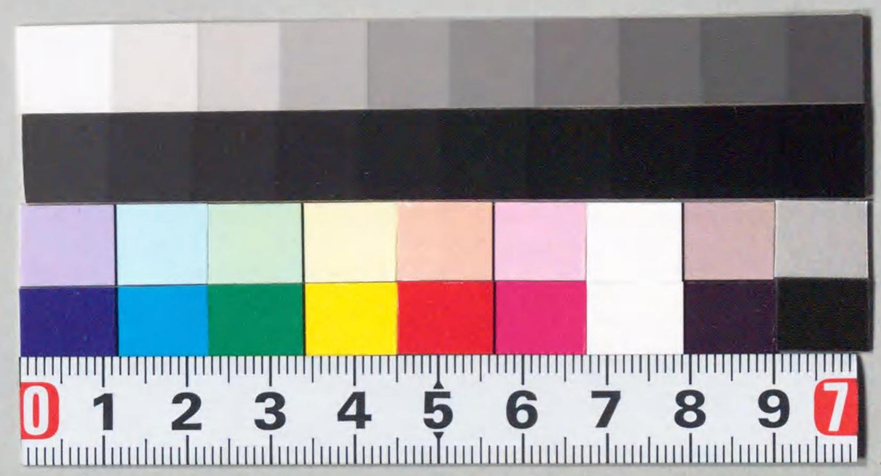


210.08
K05483
75W10878
0 複写

~~340-31~~ 3
210.08
Ko54d3

國史叢書

評議員

文學博士 萩野由之　文學士 笹川臨風
文學博士 黒板勝美　文學士 菊池謙二郎
文學博士 松本愛重　文學博士 三宅米吉

（イロハ順）

黒川真道編

南朝太平記　全

國史研究會藏版

大正
3. 3. 23
内交

210.08
K05483

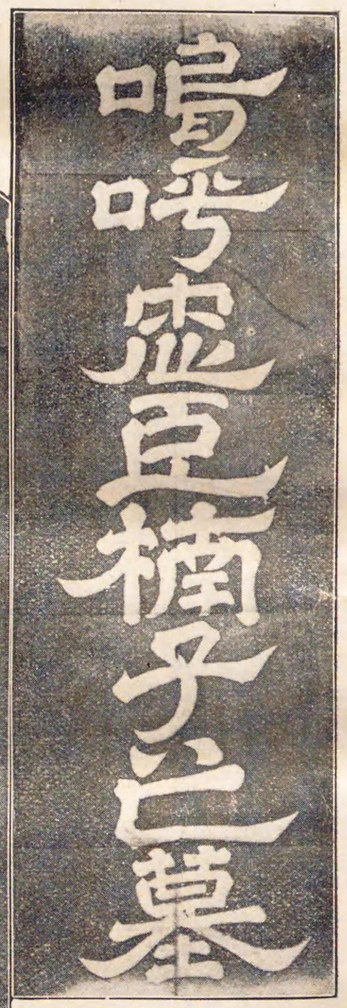
湊川神社宮公

嗚呼忠臣楠子之墓

75W10878

210.08
K05483

湊川楠公碑



表

裏

忠孝者乎天下日月麗乎天天地無日月則晦蒙否塞人心廢忠孝則亂賊相尋乾坤反覆余聞楠公諱正成者忠勇節烈國士無雙冤其行事不可概見大抵公之用兵審強弱之勢於緩急先決成敗之機於呼吸知人善任謀士推誠是以謀無不中而戰無不克誓心天地金石不渝不為利回不為害怵故能興復王室還於舊都諺云前門拒狼後門進虎廟謀不臧元兇接踵構禍國偕傾移鐘鼎功垂成而震主策雖善而弗庸自古未有元帥妒前庸臣專斷而大將能立功於外者卒之以身許國之死靡佗觀其臨終訓子從容就義託孤寄命言不及私自非精忠貫日能如是整而暇乎父子兄弟世篤忠貞節本萃於一門盛矣哉至今王公大人以及里巷之士交口而誦說之不衰其必有大過人者惜乎載筆者無所考信不能發揚其盛美大德耳

右故河橋泉三州守贈正三位近衛中將楠公贊明徵士舜水朱之瑜字魯璵之所撰勒代碑文以垂不朽

時に間斷なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在は過去の生む所にして、未來を說き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在は、數千年に亘れる過去の産物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顚末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に賴りて過去を知らんとするは、卽ち自家の見地を沒却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歷史にして、之を以て眞箇の日本歷史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歷史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記錄に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を顧みざるもの多しと雖、又夙々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

解題

南朝太平記　廿四卷

本書は後醍醐天皇、北條高時を討ち給ひて、公家一統の御代となし給ひしに、足利尊氏反し官軍利を失ひ、楠木正成は湊川に戰死し、新田義貞は北國に落ち行き、天皇は大和國へ御潛幸あらせ給ひ、吉野に皇居をすゑさせ給ひ、後村上、長慶、後龜山の四帝相續いで、明德三年に至るまで彼の宮にあらせ給ふ。これを南朝といふ。足利尊氏は光嚴天皇を擁立し、光明、崇光、後光嚴、後圓融の五帝、相續いで京都にあらせ給ふ。これを北朝といふ。

足利義滿、大內義弘を以て兩朝の和睦を請ひ奉り、遂に、後龜山天皇より神器を後小松天皇に傳へ給ひ、茲に一統に歸し給へり。

本書は其の南北分立五十七年間に於ける南朝の事蹟を記し、又此の間に於ける

楠木氏子孫勤王の勳績をも記し、終には南北一統後と雖、猶南朝の皇族吉野にまして、時々兵を構へ給ひしに、長祿二年赤松の遺臣等、更に吉野を襲ひて神璽を奪ひ、遂に南朝の全滅に及び給ふに筆をさしおきたり。

本文中特に目立ちし記事は、元祿四年水戸光圀卿の建てられし湊川の楠氏の碑銘を掲載せしこと是なり。そは本書出版は享保十年にして、建碑より凡三十餘年後の著述なれば、楠氏の碑銘を掲載したりしとて珍しからねども、全體の事蹟は何れも太平記其他の軍記等より採用したるものなれば、獨りこれのみ新しき材料として目立ちたり。これにより推考すれば、或は本書の作者馬場氏は、湊川の碑に感激する所ありて、本書編輯の動機をも成したるやも知るべからず。故に此の新材料をも掲げたるなるべし。此の建碑の感化力は實に廣大なるものといはざるべからず。

作者馬場信意は京師の人なり。玄隆と號す。後に柳隱子、山川素石と改む。信意は儒家にして易學に達したる馬場信武の子なり。和學を好み多く軍書を編輯せり。後には神書をも講談せり。享保十三年三月八日歿す。洛東烏部山に葬るといふ。

大正三年三月

黑川眞道識

例言

一、本書五頁に楠氏世系圖（後に出す）と掲げたり。然るに底本には省きたるものか又は散逸せしものか見當らず、より て他本に見えたる楠氏系圖を以て補足せんとて、是彼披見するに、何れも大同小異區々にして、且又本書の世系とも合はざれば、止むを得ず補足を見合せたり。他日同書を尋ねて補足すべし。

一、卷頭寫眞版楠公碑は黒川藏拓本に據る。

一、原本片假名なるも、本編には悉く平假名に改めたり。

一、原本中地名人名等にして、往々文字の一定を缺くものありしを以て、今全體を通じて最も多く用ひられたる文字に基きて他を訂正し、此が一定に努めたり。

一、假名遣、當字、借字等にして、原本の特長と認むべきものは、之を改竄する事なかりしと雖、讀誦に不便なるものは、假名を補うて語格を正したるもの尠なからず。且時として讀誤り易き場合に限り、振假名を附したるものあり。

一、本編の注記は、原本にありしものにして、當編輯部にては、一の注記をも加へざりき。但文字の左側に縦線を加へて、識者の高考に資したるもの二三これありしのみ。

編者識

目次

南朝太平記

卷第一……三

國家治亂附南朝由來　楠氏系圖　南木氏石碑之銘
橘氏由緒附菊水紋之事　河内守成綱被ㇾ愛ㇾ楠事　左兵衛督盛康室男子誕生事
河州水分明神靈驗附法華經普門品事　多門丸誕生幷宇佐美彌次郎相撲事
多門丸智勇事

卷第二……三

軍法傳ㇾ來本朝ㇾ來由幷楠正成軍術傳習事　正澄父子與ㇾ矢尾ㇾ合戰事
筒井氏家系幷矢尾・筒井柚頭出張事　柚頭合戰附正成奇策事
矢尾・筒井引ㇾ退柚頭神道ㇾ事　矢尾顯幸智謀事　志貴右衞門尉事

河州人見山城軍附永瀨七郎被生捕事　北條高時奢侈并越智八郎滅亡事
卷第三……四六
渡邊石衞門尉逆心附楠正成攝州發向事　渡邊防戰附歿落事
安田庄司謀叛附正成紀州勝尾着陣事　勝尾合戰附安田滅亡事
高時逸遊附萬代入道事　後醍醐天皇御隱謀露顯并奥州蜂起事
山徒心變并主上潛幸笠置事　藤房卿密計附正成參上笠置事
卷第四……六八
楠正成赤坂籠城附北條差上多勢事　赤坂城攻并神宮寺彦太郎事
正成拔落赤坂附和田·原田·勝田·生地事　恩地滿一計略并赤坂城軍事
赤坂落城附定佛入道降參事　矢尾顯幸屬正成事
正成出張住吉天王寺附京勢發向事　天王寺合戰事
卷第五……八九
宇都宮公綱攝州發向事　正成計略附板持奇妙忍之事
天王寺未來記事　東兵圍赤坂城附石上十郎次郎入道事
赤坂落城附平野入道以下被誅事　正成被構金剛山事
千劒破城壁書事　名越時有陣水邊事
卷第六……一〇九
千破劒城兵夜討附時有敗北事　足利治部大輔高氏術事
遠州入道元心同時家鬪諍附遊女新羅并梯事　宇都宮千破劒發向同城攻事
楠正成·和田正遠夜討千破劒寄手事　兩六波羅最後并千破劒寄手敗北事
卷第七……一三〇
新田義貞被攻滅北條附寶戒寺建立事
主上御還幸花洛并定平·正成南都發向事　正成謀略事
南都逆徒降參并本間·澁谷謀叛附降人等誅伐事
諸國逆徒蜂起附顯寶僧正反逆事　正成被遣恩地滿一飯盛事
正成和州發向附時光對面恩地并田氣多和事　正成邊栗發向事

邊栗合戰附落城事

卷第八……

飯盛合戰事　矢尾顯幸攻二飯盛城一并高畠才五詐返忠事

飯盛落城事　小車妻新三郎死罪并護良親王配流事

藤房卿與二正成一閑談附遁世事　新田義貞隱謀計略事

卷第九……一七三

新田・足利確執附廷尉正成諫奏事　諸國朝敵蜂起附正成重諫奏事

正成攝州發向事　攝州生田合戰并足利殿御敎書到來事

正成對二談義貞一并諸將手分事　新田義貞・名和長年口論并足利殿上洛事

京勢敗軍事　正成被レ引二取宇治一事　廷尉着二陣坂本一事

卷第十……一九三

三井寺落城并官軍寄二京都一事　官軍京合戰事　官軍重而京軍事

結城一族合戰附小筋直垂并葛西討死事　間杉平次事

間杉僞而剃髮事　足利殿京都歿落事

卷第十一……二一五

八幡寄手出二降人一并宇都宮公綱降參事　兵庫合戰并足利殿下二向西國一事

正成殿自二西國一上洛附佳瑞事　正成諫奏附清忠被レ失二面目一事

正成兵庫發向事　正成被レ遣二金言一事

卷第十二……二三九

楠正成對二面新田義貞一并敕使至二兵庫一事　西國勢手分并官軍勢配事

湊川合戰事　左馬頭直義與レ楠合戰事　志貴右衞門與二高師直一合戰事

卿公定禪加二直義手一并須賀壹岐守使者事　正成兄弟自害附廣嚴寺靈牌事

岡部遠江守乘澄討死并義貞歸京附主上臨二幸山門一事

卷第十三……二五八

攝州城々六箇所開渡附矢尾別當顯幸事

竹童丸歸二故鄕一并到官正成首被レ送二千劒破一事

四宮河原合戰附愛曾武勇幷今川家寶八々王名劒事
楠正季卒去附高師直發向河內幷成相高橋等與和田・恩地合戰事
安倍野合戰附尊氏卿兄弟被遣河州使節事
主上還幸京都附新田殿北國落事
主上潛幸南方附稻荷大明神靈驗幷諸士馳參東寺事
楠正行參內幷京都綸旨御敎書到來河州事
卷第十四……二七八
南朝怪異附後醍醐天皇崩御事
八幡合戰幷正行歸陣千劒破事
正行・渡邊合戰事
卷第十五……二九八
正平二年八月京勢南方發向附軍評定事
譽田藤井寺合戰事
目賀田彈正忠・安保忠實勇戰事
正行任官昇殿幷中風再發事
吉良・今川・土岐・佐々木以下南方發向附早瀨右衞門・庄左近七郎忍事
正行京都逆寄附尊氏卿都落事
三條典厩拔落附大樹兄弟御歸洛事
卷第十六……三一五
高師直爲奪辨內侍事
楠正行詠歌幷辨內侍・吉田宗房卿秀句事
住吉合戰附山名三河守兼義討死事
京勢多被生捕附正行情深事
本宮返忠附八幡落城同早瀨右衞門討死事
本宮軍意見附京都勢南方發向事
木澤入道忠貞事
卷第十七……三三四
楠正行遺誡幷南帝正行館へ被遣敕使事
正行參內芳野殿附軍評定事
丹下・平岡勇戰幷四條黃門敗軍事
正平三年正月五日合戰事
正行兄弟死節事
上山修理亮高元討死事
大塚・草原以下義死幷和田新五郎最後同三宅・味澤事
卷第十八……三五四

南帝御二歿落一者野一附伊賀局勇力事
吉野炎上附御詫宣事
楠正儀軍評定幷安間與一討二高和州一事
足利右武衛紀州發向附小澤城攻同和田小次郎重道智略事
京都諸將確執附足利右武衛降二參南方一事

卷第十九……二七二

洛中騷動事
南帝與二尊氏父子一和睦事
兩上皇親院遷二幸芳野一附中納言局詠歌事
源相公歸洛事

卷第二十……二九〇

板倉平三大渡先陣幷荒坂山合戰附土岐康貞討死事
八幡落城附宰相中將實勝朝臣北方事
恩地正一遁世幷尊氏卿父子歸洛事
楠正儀忠貞附渡邊九郎自害幷足利右武衛入洛事
南朝諸將軍評定事

卷第廿一……四〇七

正平十年二月合戰事
河村彈正賴秀最後幷楠正儀退口高名事
正儀詐被レ乞和事
正儀夜討事
官軍退二散國々一附正儀被レ送二高經・直常一事
南帝臨二幸觀心寺一幷和田・楠軍評定事
丹下・志貴・湯淺・俣野・譽田等出二降人一附金剛山軍事

卷第廿二……四二七

楠正儀津々山へ夜討事
正儀計略附千劒破城攻事
尾張守義深敗軍附相公歸陣事
和泉國府開城幷譽田・平石・水走落城事
和田小次郎正寬遁世由來
神崎合戰附正儀謀略事

卷第廿三……四四四

楠典厩神崎發向事
箕浦俊定敗北附池田十郎敎正武勇事
箕浦次郎最後附堀新左衞門勇戰事幷伊丹落城事

目次

正儀發二向兵庫一并池田城攻事
矢尾城軍事

卷第廿四……正儀被レ燒二敵船一附歸二陣千劒破一事 四二

金剛山城軍并飯盛合戰事
京勢圍二金剛山一事　楠正儀・和田正武卒去附赤坂落城事
河州平尾合戰事　南北兩朝御和睦附三種神器御歸洛事
畠山金吾河州發向附楠左馬頭正秀父子千劒破籠城事
南方殘黨奪二三種神器一事
神璽御歸洛事

終

南朝太平記

序

雖二本朝治亂繁多一、南北兩朝之會戰、新田・足利二家之諍亂、古今不レ聞二自レ是大一矣。後世之兒童走卒無レ不二談話一。延元年中後醍醐帝自レ建二皇基於和州芳野一以降、南朝既四世、年曆五十餘歲、終氓滅而膾二炙人口一。然楠公正成者一奉二詔命一而擧二忠烈功之美名於天下一、顯二智仁勇之三德於海內一可レ謂二神武不測之智臣一也。子孫正行・正儀・正秀、相續而義心忠功粲然于世一矣。余輯二錄之一爲二廿四卷一、名號二南朝太平記一。數任二書林田井氏之請一、從二楠氏正澄一至二正秀一記二五世之勇戰一、而以壽梓云爾。

柳隱子信意　序

南朝太平記 卷第一

洛下 馬場氏柳隱子信意 編集

國家治亂 附 南朝來由の事

茲に本朝八十三代の帝、土御門院の御宇、正治・建武の頃より、元弘年中に至つて、百三十年、北條氏天下の權を執つて、四海を掌に握る。其故を尋ぬれば、右大將源頼朝卿、平家の一族を攻滅し、相州鎌倉に安座し給ひしより、北條遠江守時政、外戚の威に乘じて、謀略を以て頼家・實朝（頼朝卿御子）を弑せさせ、是より武威を日本に振ふ。其子武藏守義時・其嫡泰時・其孫武藏守經時・其次相模守時頼・最明寺道崇是なり。其子寶光寺時宗・其子相模守貞時・最勝園寺崇演と號す。其子相模守高時入道崇鑑、相續いで天下の權を執れり。此時高時、前代に變つて朝廷を蔑如（なおざりしろ）にし、科なき諸士に罰を加

へ、民に臨時の課役をかけ、美女を集め酒に沈酔して、猿樂・田樂・闘犬等の逸遊に日を送れり。此時の聖主後醍醐天皇、高時が暴悪を悪ませ給ひ、足利尊氏・新田義貞・楠正成・赤松入道圓心（俗名號三次・名和長年以下に敕命あつて、北條門族を誅伐なされ、絶えて久しき公家一統の御代となし給ふ。然るに兩雄は、必ず諍ふ習なれば、足利尊氏・新田義貞、互に其勳功を諍ひ、確執に及びけるが、尊氏兄弟の悪逆露顯せしかば、新田義貞、足利征伐の敕諚を蒙り、合戰數十度に及びけるに、尊氏戰利なうして、西國に落下られしかども、又大軍を催し、西海より攻上らる。此時官軍利を失ひ、比叡山に取上る。然れども勝利を得させ給はん事の、難き事を知召し、京都に出させ給ひしかば、尊氏頓て主上を押籠め奉れり。義貞は又、天皇に見放され參らせて、力なく北國に落行かる。其後主上は、都を忍び出させられ、南方に潛幸あつて、大和國吉野山に皇居を据ゑさせ給ひ、南朝と號し奉る。是より後村上天皇・長慶院・御龜山院、相續いで四代、明德年中に至つて、五十餘年に及びけり。されば後醍醐天皇に仕へ奉りし武臣多しと雖、楠氏四代、義を金石よりも重くす。誰人か之に比せん。

古今に希なる忠臣なり。中にも河内判官正成は、智仁勇の三德を兼備へて、守城野戰の功、奇策妙術勝げて計へ難し。最も不測の良將なり。

楠氏世系圖　後に出す。

南木氏石碑之銘

楠河内判官正成は、智勇古今に秀で、機に臨み變に應じて城を守り、謀を帷幕の内に運らして、勝つ事を千里が外に決す。一世の奇策謀略、勝げていふべからず。後醍醐帝に、一度頼まれ奉つて、忠臣の美名を揚ぐ。惜哉足利尊氏卿、西海の波に數萬の兵船を浮べ、攝州兵庫に着岸の日、聖運の開かるまじきを知りて、遂に彼地に自殺せらる。今に至つて天下の人、樵夫牧童迄も、其忠貞を感じ、其神策を美談せり。されば近世、元祿四辛未年、貴君、楠氏の德を感じ思召れ、其舊跡の、末代に至りなば、廢れんことを嘆ぜられ、兵庫民家の外れ、正成の墳墓を再興遊ばされ、碑石を立てさせ給ふ。土臺は當國御影石を以て、高さ五尺方一丈四面になされ、中段共に

徳川光圀楠公碑を建つ

楠公碑銘

御影石にて、高さ二尺方五尺四寸なり。其上に洛東白川石を以て、長さ三尺高さ六寸の龜形あり。其上に居うる所の石塔は、和泉石を以て、高さ三尺八寸横一尺六寸腹一尺五寸なり。土臺の下には石棺を埋ませられ、棺中には亘一尺二寸の圓鏡を納めさせ給ふ。其鏡の裏の銘に、楠正成靈、源光圀造立とあり。碑石の表には嗚呼忠臣楠子之墓と刻せられ、裏に碑の銘あり。其文に曰く、

忠孝著乎天下、日月麗乎天、天地無二日月一、則晦蒙否塞。人心廢二忠孝一、則亂賊相尋、乾坤反覆。余聞楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無雙、蒐二其行事一、不レ可二概見一。大抵公之用レ兵、審二強弱之勢於機先一、決二成敗之機於呼吸一、知レ人善任、體レ士推レ誠。是以謀無レ不レ中、而戰無レ不レ克。誓レ心天地、金石不レ渝、不二爲レ利回一、不二爲レ害怵一。故能興二復王室一、還二於舊都一。諺云、前門拒レ狼、後門進レ虎。廟謨不レ藏、元兇接レ踵、構二殺國儲一、傾二移鍾虡一、功垂レ成而震レ主、策雖レ善而弗レ庸、自レ古未レ有二元帥妬一レ前、庸臣專レ斷、而大將能立二功於外一者。卒レ之以レ身許レ國之死靡他。觀二其臨レ終訓レ子、從容就レ義、託レ孤寄レ命、言不レ及レ私。自レ非二精忠貫一レ日、能如レ是整而暇乎。父子兄弟世篤二忠貞一、節孝萃二於一門一。盛矣哉至レ今王公大

人、以及二里巷之士一、交レ口而誦二說之一不レ衰。其必有二大過一レ人者、惜乎載レ筆者、無レ所レ考レ信、不レ能レ發二揚其盛美大德一耳。

右故河攝泉三州守贈正三位近衞中將楠公贊、明徵士舜水朱之瑜字魯璵之所レ撰、勒二代碑文一以垂二不朽一。

今既に三百餘年の星霜を歷ると雖、貴君、南木氏の智仁勇の三德を褒し、其忠戰義死を感じさせ給ひ、末代の將士として、忠勇の道を勸めさせ給ふ。豈其德大ならずや。

橘氏由緒附菊水紋の事

河陽侯橘朝臣正成は、神武不測の良將にて、敕命を奉り、一度天下一統の大功を立てしより、相續いで四代、其佳名を汚さず、民を懷くるに仁を以てし、君に仕ふるに忠を以てす。其祖先を尋ぬれば、人皇三十一代敏達天皇の玄孫を、葛城王と號す。然るに元明天皇の御宇、和銅元年十一月廿五日、天皇、群臣を集め遊宴なされける時、葛城王に浮盃の橘を賜はり、是を以て汝が姓とすべしと、敕命をなし下さる。其

後聖武天皇の御宇、天平七年十月朔日、從三位葛城王・同舍弟佐爲王に、橘宿禰を賜はりぬ。葛城王、其月、諸兄と名を改め給ひ、同じき十年、右大臣に任じ、同じき十五年五月、左大臣に轉任あつて、同じき廿一年四月、正一位に敍し給ふ。然るに聖武天皇の御子孝謙天皇の御宇、天平勝寶二年正月廿七日、橘宿禰を改めて、朝臣と號すべしと敕命ある。其後同じき八年二月、諸兄公逆心の企ある由、讒言する者ありと雖、天皇許容坐さず、讒者の申す所を、敢て實と思召されざりしかども、是より官職を辭して、致仕し給ひける。然るに此公は、山城國井手の里に別殿を營ませ、常に此處に坐せしかば、井手左大臣と號しけり。其假山水石の跡、今に至つてありとかや。天性酴醾〔本ノマヽ、茶蘼カ〕を愛し給ふ事甚しければ、此里井手の玉川は、酴醾の名所にて、花の盛の頃は、岸の酴醾を映し、色なる浪の打寄せて、類なき眺望なるを、限なく愛で給ひて、酴醾を眺め、蛙の啼く聲に心を澄し、風詠の仲立となし給ふ。此處は又井手の蛙とて、其啼く聲、餘所に勝れて清朗なり。酴醾も、高堤の邊には、今は纔に殘れるなり。されば諸兄公、其愛し給ふの餘りに、玉川に酴醾の咲ける所を、直衣に

繡にして、常に之を着し給ふ。其後胤之に傚ひて、水に酴醾を畫きて家の紋とせり。然るを後人、誤つて菊水なりと思ひけるを、末葉の人も、共に誤つて菊水となしけるなり。其後人皇六十一代朱雀天皇の御宇、天慶年中、藤原純友、平將門と心を合せ、反逆を企て、東西に起りし時、純友征伐の爲、小野好古・藤原慶幸・大藏春實以下、數萬の官軍、敕命に依つて西國に發向し、大に純友と攻戰ふ。此時諸兄公十代の後胤、橘少將經氏も、敕命を奉り、大に戰功ありしかば、其賞として、河內・備中兩國を恩賜あり。是より子孫相續いで、河內の國に住しけり。

河內守成綱被レ愛レ楠事

斯くて少將經氏より、十一代の後裔を、河內守橘成綱と號し、河州金剛山の麓七鄕を領し、居住せり。然るに成綱其性好んで楠を愛し、己が居館追手の馬場に、楠を數株植ゑ置きたり。又常に近習の輩に語つて曰く、天地の間に生ずる所の諸木、多しと雖、中にも世に愛する所は、櫻・藤・梅の類を以て最上とす。是れ陽氣を受けて

花開け、紅白の色を諍ひ、其匂を四方に散ず。さるに依つて折に觸れ氣色に附けて、題詠するもの之を愛す。然れども詩歌は、公家の翫ぶ所にして、我家のものに非ず。さありとて強ち之を捨つるには非ず。君子も、有二行餘力一則學レ文とこそ宣ひし。其外には古より、松を愛し或は柳を好むと雖、某は之を好まず。其故如何となれば、柳は花も咲かざれども、春は陽氣を待ち得て、綠の色を顯せり。されども素より氣力無うして、怯弱の士に似たり。松は最も木の情盛なり。花咲かねば色香もなしと雖、十八公色深二雪中一、春秋を知らずして、露霜にも衰へず。諸木の花は黃ばみ落つれども、松は其色常磐なれば、殘る松さへ、嶺に淋しきなどと詠みしなり。楠は其情剛強にして、松に似たりと雖、又松に似るべくもなし。盛長することは、餘木に劣つて少しと雖、雪折もなく、究めて大木は楠にあり。其勇強なることいふべからず。後には磐石となりて不朽に傳はり、永世に至つて、天地と共に長久を保つもの、楠にあらずして何ぞや。最も武士の愛すべきは楠なり。我之を思ふが故に、此木を朝暮に愛すること甚しとぞ語られける。此の如く楠を多く植ゑ置きて、朝夕之を愛せられしかば、是より世人、楠殿々々と呼びし故、成綱それよりして、自ら楠河内守とぞ名乘られける。

左兵衞督盛康室男子誕生の事

河内守成綱の家嫡楠左兵衞督盛康、父の遺跡を繼ぎ、相續いで楠を愛せられけるが、父祖の業を繼ぎて、文武の道に賢く、士を撫で民を憐まれしかば、諸人其德を稱しけり。然るに當國水分明神は、吳子孫子を祭れる所の神社なれば、是れ軍術武略の祖神にして、兵家の崇め信仰すべき神なりとて、常に社參せられける。或時盛康從者二三輩召連れ、忍びやかに參詣し、心閑に祈念せられ、下向に赴かれけるが、館の前楠の馬場を、閑に步み通られけるに、日既に夕陽に及びしが、楠二本摺違うて、生ひ繁れる其陰に、年の頃二十計と見えて、美目形美しく、いふ計なく艷長けて、いと艷なる女房の、唐綾の小袖に繡しけるを着て、打萎れ涙ぐみて彳めり。盛康も此女房を、一目見るよりも心浮かれ、知らず我魂も、此人の袖にや入りぬらんと、心もた

どたどしく、覺えず立寄りて、君は何國如何なる人にて候ぞや。斯る片田舍に住み給はん人とも覺えずと、問ひければ、彼女房少し顏打上げて、さん候自は、知らずも此處に吟ひ來りし者にて候。扨爰は、何國にて待ふやらんといふ。爰こそ河内國赤坂と申す所にて候と答へらる。彼女房打聞きて、扨は河内の國とやらんにて待ふかや。其は都近き國と聞きつれば、懷しくこそ侍らへ。自ら元は都の内にて、父は雲の上にも交はられし殿上人にて候が、去る年の春、讃岐國塞川郡牟禮松の領主坂原藤馬助と申せし人に迎へられ、一葉の船に乘り、八重の潮路を漕がれ行きて、彼人に契を籠めしこと、宿世如何なる緣やらんと思ひしに、此藤馬助は、人に深き恨を受けたる人にて、國の敵とやらんなりとて、或夜丑三つの頃、見るも怖しき武士共二三百人、弓・胡簶・鑓・長刀を持ちて、牟禮松の館を取卷き、火をかけて打入りし程に、在合ふ者共も、命を限りに働き、夫の藤馬助殿も、自ら刀を持出で、切合ひ給ひしが、大勢に取籠められ、敢なくも遂に討たれ給ひぬ。日頃夫の側近く召使はれし若者、甲斐々々しくも自らを搔負ひ、煙の内を遁れ出で、濱邊に至り、彼方此方と尋ねしに、商人船の磯に繫りてありけるを、兎角賺して、此人を、都の方に送り届けて呉れよと深く頼みて、我身は又、主君の御供を仕候と計いひ棄て、元の方へ走り行きて候ひし。其より商人船に乘せられて、此頃尼崎とやらん迄着き候ひしに、船の中の輩も、自を都迄も送りたく侍らへども、人々共に急ぎの事の侍れば力なし。是より都へは程も近し、迚りて渡り給へなんといひて、己が樣々行分れ侍りき。其より知らぬ道芝の露に濡ち、其所とも知らず吟ひて、今爰に來て侍りぬと、細々に語りて、せきあへず泣きければ、扨はやんごとなき人にこそ。某が方より、都へ送らせ參らせん。何か苦しく候はん。此方へ入り給ひとて、吾館に具し歸り、其より比翼の衾を重ね、別なくいひ睦ばれける程に、此女房只ならぬ身となりて、相勞る體に見えけるが、十月經て、一人の男子を誕生す。盛康大に悅び、早く成長せさせて、我家督となさばやと、早晩當所の領主とは呼ばれんずらんとて、其寵愛斜ならず。此若成仁の後、左兵衞督成氏とぞ號しける。

河州水分明神靈驗附法華經普門品の事

斯くて其年も暮れしかば、此若二歳になられけるに、正月の中旬、霖雨降續きて、物寂しき夕暮に、母の女房、何地ともなく失せられけり。盛康大に驚き、日頃、故郷なれば、都へ歸りたきなんどいひつるが、都へや上りつる。又野狐の所業にやと、方々人を走らして、尋ね求めさせけれども、其行方を知るものなし。時に二歳の男子、寢て居られける傍に、小卷の卷物一軸あり。乳母の女房驚き、頓て彼卷物を取りて、急ぎ盛康に差上ぐる。左兵衞督取りて開き見給ふに、極めて細字の一卷なり。何ならんと能々見給ふに、孫子が神武統宗といへる、軍略至極の祕書なりけり。盛康驚き、是は希代の珍書かな。吾幼少より軍學に心を委ぬと雖、今迄此書の名をだにも聞かず。是を以て思ふに、我れ武略の道に心を寄せ、明暮孫子の宮に歩みを運び、尊崇すること年あり。されば孫子水分明神、我心中を憐れみ給ひ、假に女に化して、此若を授け、今此祕奥の一卷を與へさせ給ひしにや。然れば此若は、凡人にあるべからずと、信心肝に銘し、感涙を押へ乍ら、頓て身を淸め、水分明神に參詣し、様々奉施をぞ奉られける。斯くて其年も暮れて、翌年の春二月中旬のことなりしに、所用の事ありて、館の前なる楠の下を、下部共に掘らせけるに、土の下三尺計に至りて、金襴の守袋あり。下人等大に驚き、急ぎ取りて主君に奉る。盛康取りて見給へば、去年行方も知れず失せたりし妻の女房の、常に身を離さず持ちたりし、肌の守にぞありける。こは心得ぬ事共かなと、袋を開き見給へば、彼の妻の自ら書ける法華經の普門品にてぞありける。左兵衞督暫く思案し、感涙に咽び、我れ熟勘ふるに、亡父成綱より以來、世人に變りて、楠を愛する事甚し。又常に水分明神を信仰す。是れ武の道に達し、子孫繁榮を祈る故なり。さるに依つて水分明神御納受あり。神力にて楠の精靈をして、我に夫婦の語らひをなさしめ給ひ、一人の男子を與へ、祕奥の一卷を賜はりしこと、皆是れ靈驗あらたなるに依つてなり。又楠は非情なれども、我が愛する所を感じて、其恩を報せんが爲ならんか。然らば子孫に至つて、至剛の美名を天下に顯はさんこと、疑あるべからずとて、彼一卷の祕書と普門品とを深く納

めて、永く之を家寶とす。されば其後數十年を經て、元弘年中、楠河内守正成、赤坂の城より落行きし時、敵の射る矢、正成の肱のかゝりに當りしに、身に何の恙もなかりしを見れば、守袋に入れ置きたる普門品の、一心稱名の二句の偈に中りしと聞えしは、此普門品の事なりし。是れ不思議第一の奇瑞なり。此盛康よりして、楠氏代々、水分明神を敬信せらる。さるに依りて此社の華表の額も、帶刀左衞門尉正行の筆蹟なり。

多門丸誕生井宇佐美彌次郎相撲の事

さる程に此男子生長して、武勇智略の名を顯はし、畿内に其德を稱す。左兵衞督成氏是なり。然れども其頃は、鎌倉の北條家、四海の權を執りて、仁政を行はれしかば、天下泰平にして、萬民快樂に誇りし故、させる高名もなかりけり。其家嫡刑部大輔正俊、其子從五位上左衞門尉正遠、後に改めて正澄と號す。正澄は人皇八十九代龜山院の御宇、弘長三年癸亥に生る。是れ宗尊親王の治世にして、北條相模守平時宗、執權の時に相當れり。然るに正澄、先祖より取傳へたる所領、金剛山の麓二千餘貫の地を領し、隣鄉に威を逞しくす。男子一人あり、俊親と號す。然れども早世しければ、正澄既に卅一歳に及ぶまで、續子なき事を深く歎く。爰に和州平郡郡信貴山歡喜院朝護國孫子寺（大和河内の境の毘沙門天は、靈驗灼（あった）なりしかば、正澄の室深く此事を歎き思ひ、信貴に百日參詣して、才智賢き男子を一人、儲けさせてたび給へと、丹誠を盡し、多門天にぞ祈られける。其信心や通じけん、彼室或夜の夢に、金色の甲冑を着たる異人、我口の中へ飛入ると見て夢覺めぬ。夙に起きて熟と案じられけるが、如何樣此は靈夢ならん。如何なる事の心にやと思はれしに、果して其より只なる勞（いたはり）とて、懷胎の身となられしかば、願望成就しぬと悅ばれけり。斯くて十四月に當つて、人皇九十一代伏見院の御宇、永仁二年甲午に誕生す。此時既に久明親王の治世にして、執權は高時の父相模守貞時にてぞありける。是れ正しく毘沙門天の、我子と化現し給ひしものなりとて、其名を多門丸とぞ號せられける。其故にや、幼少より聰明睿智にして、辯舌明かに、賢々（さかしく）しき事、譬へていはん方なし。六歳の時、

家人等の子供と、戯れて相撲を取られけるに、十二三歳なる童共の、而も逞しき者共を、易々と打倒されける。其後四五日を經て、又相撲を取り戯れられけるに、十一二歳より十五六歳の子供を、悉く打倒されければ、後には怖れて、相手になり候はんいふものなし。斯る所へ多門丸の乳母の夫、宇佐美次郎澄安が嫡子彌次郎出來れり。傍なる童共之を見て、彌次郎殿こそ來り給へ。若君の相撲に勝ち給はん人、宇佐美殿ならではあるまじといふ。彌次郎は十八歳にて、而も健者（したゝかもの）なりけるが、某、若君と相撲を取り申さば、中より落し申さんといふ。多門丸聞きて、如何に彌次郎ともいひ、中よりは落されまじと、立向つて組まれける。彌次郎頓て多門丸の腰の帶を攫んで、中に差上げ、落し申さんやと打笑ふ。多門、差上げられ乍ら、落して見よといひさま、右の手にて、宇佐美が眉間を丁と打つて、忽ち渠が心を奪ひ、中より跳ね落ち、彌次郎を打倒されければ、宇佐美も負け乍ら、此君御成長の後、如何なる譽をか顯し給ふらんと、悦の涙をぞ流しける。此彌次郎は、後に宇佐美河内守と呼ばれ、正成（多門丸後號二正成一）の正の字を賜はつて、正安と號し、數度の忠戰を勵みて後、建武二年、正成と共に、湊川にて、自害をぞしたりける。斯くて多門丸、七歳にては尋常の男の力量よりは、少し勝つて見えたりけるが、其年の冬、或雪の夕暮に、雁の友に後れて渡るを見て、多門丸、弓取つて矢打番ひ、過たず彼飛雁を射落されしかば、父左衛門尉正澄も、是れ凡人の所爲にあらずと、舌を振はしてぞ居給ひける。其翌年八歳の春より、同國錦部郡檜尾山觀心寺といへる眞言寺へ上せて、學文をなさしめられけるが、一を聞きては十を知る、才智世に雙（ならび）なかりしかば、稽古滯る所なく、水の流るゝが如くなり。

多門丸智勇の事

斯くて多門丸、明暮文を學び劍術を琢磨して、遊戯を好まゝ事なく、才智世に勝れて、さながら神の如くなり。爰に同國矢尾別當顯幸といふものあり。楠左衛門尉正澄と、地を爭ふこと累年なり。然るに別當、法師の身なりと雖、武の道に賢く、勇謀勝れたる法師にて、或時は勝ち或時は負け、勝敗曾て定まらず。斯る所に嘉元三年

多門丸の武勇

四月十二日、矢尾別當顯幸出張すと聞えしかば、楠多門丸、父正澄の前に進み出で、敵に足をためさせなば、合戦しにくかるべく候。味方唯今馳せ合ふべしとは、敵思ひ寄るまじければ、油斷してぞ候らん。其不意を討つて、勝利の術を盡させ給へと申さるれば、正澄大に喜び、汝は老將の智ありとて、有合ふ勢を引率し、敵陣に馳向ひ、関をも作らず、無二無三にどつと切つて懸らるゝ。矢尾が軍勢共、思ひ設けざる事なれば、上を下へと狼狽へ廻り、周章て騒ぎて見えけれども、顯幸武功の法師にて、士卒を下知し、陣を取鎮めて戦うたり。左衛門尉正澄、敵は多勢なりと雖、事ともせず。駈入りては駈出で、駈拔けては切通る。此時多門丸、眞前に進み戦はれけるが、黒糸縅の鎧に、染羽の矢を負ひ、黒き馬に乗つたる武者と渡し合ひ、馬より下に切つて落し、敵の上に乗懸り、和主は誰ぞと問はるれば、別當に加勢として、泉州より馳來りたる、岡田六郎左衛門と、名乗も果てぬを首掻落し、太刀の鋒に刺貫き、楠多門丸十二歳、軍は斯くこそすれと、高聲に名乗られける。斯くて兩軍雌雄を爭ひ、爰を先途と戦ひしかども、互に敗られず圍まれず、合戦は互角にして、敵味方共に戦ひ屈せしかば、相引に引取りけり。此多門丸、後に楠河内守判官正成と號せし良將なり。

南朝太平記巻第一終

多門丸智勇の事

南朝太平記 卷第二

軍法傳來本朝二來由并楠正成軍術傳習の事

抑兵家の軍法祕傳妙要と申すは、昔時老子、天上より傳ふる所の一法を種として、太公望、天人地理に則り、三門四種を立て、始めて兵道を開く。其始は軒轅黄帝より起れるなり。されば李老君・太公望・管仲・黄石・張子房に、相傳はると雖、子房深く之を祕して、世に傳へざりけるに、其後唐太宗皇帝、天下の內を普く尋ね求め給ひ、李靖と之を論決し給ふ。是よりして軍術の祕要、永く末世に傳はれり。然るに本朝には、人皇十四代仲哀天皇の御宇、僅に三略の書、日本に渡ると雖、永く世に斷絕す。其後吉備大臣入唐して、三略一部を傳へ、歸朝すと雖、深く胸中に祕して、子にだも授けず。洛北鞍馬寺の多門天の寶藏にぞ納めける。是に依つて人皇六十代の帝醍

醐天皇、如何にもして兵書の至要を、日本に求め得て、永く吾朝の寶とせんと、様々叡慮を運らさせ給ふ。此時安保親王の曾孫左大辨宰相大江維時、江相公孫千古子也、文章博士にてありければ、維時に命せさせ給ふ。維時敕を蒙つて、延長三年五月唐朝に赴きけるが、同年の仲秋唐土に漂着し、沙金五萬兩を以て唐帝に獻じ、五萬兩を將軍龍取に與へて、軍術の奥祕を授からんと歎きしかば、帝之を許し、龍取に敕して、六韜三略天文取捨の傳、諸葛亮が四首八尾、常山の蛇勢、奇正進退千變萬化の傳規、凡そ兵家の祕書三十餘卷、悉く眞授を蒙り、日本に歸朝せり。是よりして大江氏の後胤、世々軍術の祕奥を傳へ受くるとかや。爰に河內加賀田鄕に、修理亮大江時親といへる人あり。中納言維時始は左大辨宰相の末裔にて、太公望が立つる所の、覇者の眞傳の奥義を極めし人なりけり。然るに楠左衞門尉正澄の長男多門丸、十五歲になられけるが、簑裘の業を繼ぎて、聰慧萬人に勝れける故、如何にもして軍法兵傳の祕法を知らんと、思慮せられけるが、幸ひ大江修理亮時親當國にあり。此人に便りて、軍術を學ばゝやと思案して、時親と子弟の契をなし、同國加賀田の鄕に行通ひて、太公

が八十一變、轉化順逆百二十八變、孫子が十三變を始め、唐朝傳來の軍術、臨機應變の祕奥を、悉く習ひ得られけり。

正澄父子與二矢尾一合戰の事

斯くて楠多門丸、既に十六歳に及びしかば、延慶二年二月十三日に首服を加へ、楠兵衛尉正成とぞ號せられける。斯る所に、矢尾別當顯幸、多年の本意を達せんと、同年の六月下旬、軍勢を催し出張す。楠左衛門尉正澄、嫡男多門兵衛尉正成、敵に足をためさすなとて、勢を二手に分けて、左衛門尉正澄、其一手を帥ゐ、敵陣に馳向はる。多門兵衛尉正成は、殘る一手を從へ、敵陣の左の方なる森の中に忍び寄り、勢を伏せてぞ居られける。矢尾の別當は、斯る謀ありとは夢にも知らず、敵は小勢なるぞと見謾り、太皷を打たせて懸り合ふ。楠勢、豫て謀りし事なる故、馬の足四度路になり、辟易してぞ見えたりける。顯幸大に勇み、懸れ〳〵と下知すれば、逸雄（はやりを）の若者共、無二無三に切つて入り、一戰に切勝ちて、遁さじと追懸くる。兵衛尉正成、時分は好きぞ。起立てよと下知せらるれば、伏勢共一同に起立ちて、喚き叫んで打つて懸る。時に正澄の勢、一同に取つて返し、先づ後より引包み、微塵になれと攻立つる。さしもの顯幸一戰に打負けて、三方に分れ敗北するを、楠先陣の勢を以て、備を亂して、少々敵を追討にぞ討たしめけり。此時矢尾が領地一千五百餘貫の地を討取つて、楠家前代より領し來る所の采地、河州石川郡二千餘貫、凡そ三千七百餘貫の領主となりて、是より永く矢尾に切取らるゝ事なし。是れ偏に正成一身の謀略に據れり。此人今年未だ十六歳、末如何ならんと、聞く人舌を振はしけり。是より楠家次第に繁榮し、殊に子數多出來れり。嫡子は多門兵衛尉正成、其次は女子なり。是は一族和田孫三郎正遠（後和泉守と號す）が妻にして、新田新兵衛高家、同五郎正隆、同新發意源秀等が母是なり。其次は楠五郎正氏、其次七郎正季、其次は法師にして、後越前國平泉寺に住せしめ、律師惠秀とぞ號しける。其後左衛門尉正澄いつしか病にそみ、遂に卒去せられければ、正成、父の名跡を繼ぎて、威名彌盛なり。

多門丸元服、正成と稱す

楠勢、矢尾勢を破る

楠正澄死去

筒井氏家系

筒井氏家系井矢尾・筒井柚頭出張の事

爰に和州の住、筒井氏の來由を尋ぬれば、天津兒屋禰命の苗裔、藤原の方族にして、近衞家より分れ出でたり。其故は、人皇四十八代稱德天皇の御宇、神護景雲二年戊申の冬十一月、和州添上郡三笠山に遷りまします神あり。第一神は、常陸の鹿島より遷らせ給ふ武甕槌命是なり。第二神は、下總國香取より影向ある。其御神を經津主命と申し奉る。第三神は、河内國平岡より、此處に跡を垂れ給ふ。天津兒屋禰命是なり。第四神は、伊勢國度會郡より遷らせ給ふ。其御神を姫大神と申奉る。春日大明神と崇め奉るは、此四座の御神なり。此時天津兒屋禰命に從ひ奉る藤原氏四家あり。其内に一人、添下郡筒井庄に住して、春日の神社に給仕す。さるに依つて、筒井を以て世々氏とす。其名を筒井太夫藤原順武と號す。是れ筒井氏の元祖なり。當時其後胤に筒井淨慶といへる法師ありけるが、世々春日明神の社僧にして、采地二千五百町、家富み榮えける故、己が職にもあらずして、武を嗜み馳引を習ひければ、

楠正成、矢尾筒井兩軍と戰ふ

相從ふ一族郎等共、早業力達をのみ好みけり。然るに楠多門兵衞と不快の事出來つて、互の遺恨日々に增長せり。此事を傳へ聞き、矢尾別當顯幸、時を得たりと悦び、正成に切取られし千五百餘貫の地を取返さんと、筒井が方へ使者を馳せて、淨慶に加勢をぞ頼みける。淨慶も、楠を惡しと思ふ折なれば、堅く領掌して、一千餘騎を引率し、白地に墨にて、春日大明神の五字を、大文字に書きたる旗を飜し、河州矢尾に馳來れり。顯幸大に悦び、己が手勢一千餘騎、兩勢合せて二千餘騎を相從へ、赤坂へ押寄せんとぞ議したりける。一家相集つて八百餘騎、赤坂の館を打つて出で、堺の津より東の方、譽田の北に當つて一城を構へ、要害堅固に陣しけり。さる程に、國中の諸士、矢尾が催促に從ひ、與力して馳着きしかば、顯幸既に三千餘騎の多勢になり、柚頭神道に備へて、其間二里餘りに、軍勢陣を固めたり。然れども淨慶は、正成が武勇尋常ならずと怖れて、寄らん義勢もなし。正成は又、味方の勢八百餘騎、敵は既に三千餘騎、對揚すべくもなき多勢なれば、如何なる謀をかなしけん、敵の軍立を見て、轉化して戰ひ、勝つ

は良將の謀なり。然らば待つに如かじとて、敢て出でて戰はず、互に睨み合ひて、十餘日をぞ過しける。

柚頭合戰附正成奇策の事

さる程に、兵衞尉正成は、斯くてもあるべき事ならずと、八百餘騎を引率し、花田鄕に陣を移し、敵陣近く進まるゝ。筒井淨慶之を見て、さらば一戰を始むべしと、軍勢を押出す。此勢、道一筋を中にして、池を前に當て、池の岸の少し高きを要害に取りて、岸より此方に勢を備へ、先づ足輕の兵を、十人二十人一組にして、足輕軍をぞ始めける。大將正成、恩地左近太郎滿一を近付け、大和勢の軍立、思ふに合せて恐るゝに足らず。軍には打勝ちたり。若者共も、皆々今に高名せさせんと申さるれば、滿一聞きて、其故は如何なる事にて候ぞ。承らんといひければ、正成莞爾と笑ひ、さればとよ。池の岸少し高きに、岸の上には、兵を一騎も出さず、岸より下の彼方に、軍勢を立てたるは、正成が武勇を怖れたると覺えたり。其上一二町退いてこそ勢

を立つべきに、池の際に備へしこと、是れ良將のせざる所なり。其故は、敵、中なる道を越して寄せ懸けんに、池の際近々と備へたる軍勢は、懸らんとするに、行先遠からず、餘りに近き故、却て後るゝ者なるぞ。斯樣なる細道を、押來つて懸る者共は、皆討死と期したる者共にて、其と戰ふに於ては、味方多くは討負くべし。又敵の先陣に進まん者共、臆病にして、逃歸らん輩ありとも、後より續く軍勢共、聲々に喚き叫んで、勇み來る時は、其勇氣に引立てられ、心ならず味方の陣中へ、必ず切つて入る者なり。然らば必定、味方の勢討負くべし。其時は味方、假令ば先陣千騎計ならば、二陣は一町五反退き、又先陣二千ともあらんには、二町を退き備ふべし。敵兵池の中なる細道を押來り、廣みへ打つて出で、二十間も過ぎて來らん所へ、味方の先陣、備を亂さず押懸つて戰ふ時は、味方の勝利疑なし。是れ旨將の曾て知らざる所にして、良將の專と謀る所なり。其上敵陣二三の備も、思の外遠ければ、さのみ心にくからずとぞ語られける。之を聞きて士卒上下共に、悅び勇むこと甚し。然る所へ矢尾別當顯幸、勇謀兼備の法師なれば、逞兵六百餘騎を引勝つて、旗只一流

押立て、香象の波を踏んで、大海を渡る勢の如く、正成の本陣の右の脇より、靜々と懸り合ふ。正成之はと見やりたれば、敵勢雲霞の如く、後陣よりも段々に、備を立てゝ向うたり。其時正成、和田孫三郎正遠に向ひ、某が早晩とても、四隊の陣を好むは是なり。向に敵ありとのみ備へなば、斯る時大に騒ぎなんぞと、快げに打笑ひ、池より此方一町計退きて、備へ居たる味方の勢へ、急ぎ軍使を馳せて、少しも時刻を事なかれ。敵兵、池の中なる道を越えて切出なば、懸合せて相戰へ。少しも時刻を移すべからずと、いひ遣して後、味方の勢を見給へば、横合より懸り合ふ敵に驚き、諸卒辟易して色めき立つ。此體にては、戰ふといふとも、利あるべからずと思はれければ、鐙踏張つて立揚り、諸勢に向ひ大音上げて、正成今日軍を發せし事、尋常にはあらず。敵の中に、味方へ返忠の者多くあつて、合圖の契約ある故なり。恩地はなきか、滿一はあらざるか。池より此方にて、合圖の火を擧げられよと下知せられしかば、之を聞きて士卒色をなしけり。恩地左近太郎、扨は合圖のありけるにやと、池より此方の少し高き塚に登つて、合圖の狼煙を三つ迄上げたりける。之を見て

横合に懸り來る矢尾別當が軍勢共、敵陣に狼煙の上りたるは、如何樣味方の中に、返忠の者共ありと覺ゆるぞ。若し此勢の中に、敵と心を合せぬる者やあるらん。又後陣より續く味方に、敵と一味の者やあらん。其上大和勢の心も知り難しと、ひそひそと私語き立ちて進み得ず。又筒井が軍勢共も、是は何樣、味方の中に、敵へ返忠の者共ありと見えたりと、互に人を疑ひ、私語き合ひて進み得ず。暫く時刻をぞ移しける。正成、士卒に向つて、合圖の狼煙を揚げつるが、今少し早かりけるぞや。和田正遠の一備は、虚逃して、敵に見せられよと下知せらる。和田孫三郎、さ承り候とて、士卒に其心を知らせ、俄に崩れ立ち、周章ふためき逃退く。敵の方には之を見て、又例の古狸が、虚崩れすると覺えたり。化さるゝな人々、馬早からん者共、見て來れと下知すれば、忍田次郎・絹川入道以下、五騎三騎づつ、打連れ〳〵馳行きしかども、敵を怖れて、矢掛り迄も近付かず。馳歸つて、彼の向に見えたる林の廻と其陰に、伏勢のあるかと見えて候なんどと、定めぬ事を、實しやかにいひければ、元來取集め勢の事なる故、正成一時の謀に陷つて、さぞあるらんといふ程こそあれ、

矢尾に與力したる若江藤次、己が勢を引纏め、後陣より引行けば、矢尾・筒井が軍勢共色を失ひ、色めき渡つて見えたりけり。正成下知して、今日の合戦は是迄ぞ。引取れよ者共と、静々と引取られしかば、一人も追懸くる敵はなかりけり。實は敵方に、返忠の者ありしにはあらず。矢尾が軍勢、思の外に味方の後に廻りたれば、前後の敵に取包まれ、戦ふとも利あるまじければ、引取らんと思はれしが、只引取らば、定めて敵兵附慕はん。然らば味方に、手負死人多く出來んと思案して、斯く煙をぞ上げられける。是ぞ豫て企みし謀にもあらず、事の急なるに臨んで、時に取つての方便なり。如何様凡人にはあらず、謀略勝れたる名將ぞやと、諸人後にぞ感じける。

矢尾・筒井引二退柚頭・神道一事

斯くて正成は、一時の謀略を以て、安々と勢を引入れられけるが、此軍過ぎての後、數年に及ぶ迄、謀成りし事は、曾て口外に出されず。某敵に方便られ、返忠せんといひしを、實ぞと心得、大に負軍せんとしたりしなりとぞ宣ひける。是は以後又斯様の謀、すまじきにてもあらざれば、其時軍勢共、以前にも斯様の方便にて、大將のたらされしぞやと、いはれまじきが爲なりけり。さる程に正成は、其翌日より時を替へて、日毎に兵を出し、敵の中に、味方へ返忠の者共ある氣色にのみ見せかけ、敵陣へ、合圖の矢文など射入れければ、矢尾・筒井が陣中に、大に狐疑出來つて、誰こそ楠と心を合せて、後矢射んと相巧めり。何某こそ敵に一味して、味方を討たんと謀るぞなんどと、陣中の曲として、ありとあらぬ虚説共をいひ私語きければ、互に人に心を置合ひて、其より軍の評議もなし。然る處に、玉手四郎・白坂兵部丞・岩田・布忍・當宗・雜賀・龍田・十市・加木波等楠と慣れ、合敵を陣中に引入れんと相謀れりと沙汰しければ、此者共之を傳へ聞き、大に怒り詈り、我々身に過もあらずして、斯る惡名を蒙るこそ安からね。必竟今度の合戦は、將軍家鎌倉殿への忠功にもあらず、又正成に私の遺恨もなし。親しきまゝに、顯幸や淨慶に頼まれて、其信を違へじが爲、士の一道を守り、一旦與力したる計なり。然るに左様に疑ひ思はるゝこそ口惜しけれとて、雜賀小太夫、一番に勢を引連れ落行きしかば、玉手四郎・白坂・岩田・當宗・龍田・

矢尾顯幸敗走

布忍・十市等我先にと、己れ〳〵が陣を引拂ひ、領所々々へ落ちて行く。筒井・矢尾に與したる集り勢共之を見て、一人二人拔々に逃行きしかば、殘り少なになりにけり。結句後には、筒井は顯幸を疑ひ、顯幸は淨慶を疑ひて、楠と一味をやなしつらんと、互に狐疑の心を生じけるが、終には筒井淨慶法師、別當に斯くとも告知らさず、夜深けて陣を引拂ひ、大和の筒井に逃歸れば、顯幸も悚へ得ず、己が矢尾の城にぞ引取りける。正成、さあらんと思ひつる事よとて、其翌日軍勢を出し、敵の陣所を悉く燒拂はせ、赤坂にぞ凱陣せられける。

矢尾顯幸智謀の事

斯の如く矢尾と楠、爭ふこと數年、動もすれば顯幸働き出でしかば、之を防がんが爲に、家子の志貴右衞門尉を、兩家の領所界へ差遣さる。是に依つて志貴究竟の者共を從へ、一城を構へて、百餘騎にて楯籠りければ、顯幸も出張すべき便なし。然れども以前花田にて、無下に引退きし事を本意なく思ひ、右衞門尉を追落して、多年の恥辱を雪がばやと思ひ、種々思慮を運らしけるが、一術案じ出して、郎等の上村十郎に謀を委しく言含め、百餘騎にて、搦手の方へ忍び廻らせ、我身は追手へ向ひけるが、五町餘を退けて、竹の林のありけるに、澤五郎を始めとして、健なる若者共八十餘騎、伏勢として隱し置き、別當顯幸は五十騎を引率し、追手の門近く押寄せたり。此城追手一方は、平地に續きたれども、搦手は數十丈の谷にして巖鋭く、殘る二方は、深田重々に續いて、人馬の足及び難し。元來僅百餘騎の勢なれば、三方は切所を頼みに勢をも配らず、百餘騎の者共、悉く追手へ集つて、敵は小勢なりといふまゝに、門を開き切つて出で、互に鬨を作り懸け、追つ返しつ相戰ふ。顯幸豫て企みし事なれば、爽に物具し、矢尾別當是にあり。城主志貴右衞門尉に見參せんと、高らかに呼はり、邊を拂つて駈立て〳〵戰ひしが、顯幸矢に中りける眞似をして、馬より下に百と落つる。郎等の香西兵衞次郎走り來り、己が背に掻負ひ、後陣の方へ引退く。是を見て城中の兵共、敵の大將顯幸は、痛手負ひしと覺えたり。進めや討取れと、喚き叫んで攻立つる。寄手は豫て合圖の事なれば、周章騷ぎて崩れ行く。

志貴右衞門尉、謀とは知らず、顯幸を討取れと、百餘騎を前後に立て、城を拂つて切つて出で、遁さじと追懸けたり。此時上村十郎、兎角して搦手の切所を忍び越え、城中へ乘入れ、矢尾が家の旗十餘旒、塀の上へ差上げたり。斯くとも知らで右衞門尉が士卒共、短兵急に追懸けたり。時に伏勢の八十餘騎、一同に咄と鬨を作る。澤五郎、懸れや進めといふ儘に、眞先に打つて懸れば、士卒等我劣らじと、面も振らず切つて入る。すは寄手には伏勢こそあれ。過すな、備を立直せといふ程こそあれ。城の方を顧みれば、早敵入變りたりと覺えて、敵の旗十餘旒、飜つて見えければ、進まんとするも叶はず、引かんとすれば、早城を取られぬ。進退爰に谷つて、網裏の魚の如くなり。右衞門尉血眼になつて、敵に安々と方便れぬる口惜さよ。斯樣の時、遁れんと思へば死し、死せんと思へば生くる者ぞ。命を捨て、一方打破つて通れよ者共とて、鋒を揃へ敵中に切つて入り、近付く者を馳倒し切散らして、直に切拔けしかば、志賀が賴み切つたる郎等十八騎討たれ、殘る者共も、深手淺手、悉く負ひて、赤坂へと落行きしは、嚴しかりし分野なり。

志貴右衞門尉の事

顯幸が謀に乘せられて、志貴右衞門尉一戰に打負け、赤坂へ逃歸りしかば、諸人之を見て、楠家と別當と、所領の論に依りて、相爭ふこと數年、勝敗互に定まらずと雖、楠方一城をも取らるゝ程の事はなし。然るに志貴は、法師の軍立より拙なうして、斯く赤恥を掻きぬるは、侍にてはあらずして、比丘尼にも猶劣れり。今赤坂に落來り、楠殿に對面し、何事をか申すべき。生きて恥を曝さんより、只死ねよかしとて、指さしゝてぞ笑ひける。斯くて志貴右衞門尉、赤坂の館に來り、大將に對面す。正成、軍の次第を委く尋ね問ひて後、正成が常にいふ所は、爰にこそあれ。斯迄に愚なる合戰をすべき和主にてはなきに、何とて斯る不覺はせられしぞやとて、以往に數度ありし志貴が忠義武勇の働、又軍旅に謀才ありし事共を語り出し、さるにても其身、恙なく遁れ歸りしことこそ嬉しけれ。死したる者は、歎くといふとも歸るべからず。然れども某故に、多くの士卒討死せしこそ、實に以て不便なれとて、暫く淚を

流されけるが、誠に此度和殿が過は、只是正成が、天命に違ひたる故にして、和殿の過にはあるべからずと、再三之を賞し、馬物具も、定めて戰場にぞ捨てられぬらん。之にて後日の合戰をせられよと、馬物具を與へ、又討たれし兵共の、親妻子を呼出し、金銀米錢を、悉く程々に從ひ與へられければ、諸人其情をぞ感じける。さる程に矢尾別當顯幸は、志貴が城を安々と攻落し、上村十郎を入置きし所に、志貴右衞門尉之を口惜く思ひ、如何にもして城を取返し、會稽の恥を雪がんと、晝夜心を碎きけるが、百餘日過ぎて後、右衞門尉、正成の前に出で、上村を攻落し、鬱憤を散じたく候と望みしかば、正成、此儀尤なりとて、敷地太郎・佐川平九郎・同又次郎以下、究竟の兵百三十騎、相添へてぞ差遣されける。右衞門尉大に悅び、赤坂を打立ち、上村が城に忍び寄りけるが、術を企み澄まし、素より案内は知りすかしつ、名譽の忍の上手共を二十餘人、城中へ入れ置きて、其夜の丑の上刻、敷地・佐川を搦手へ差向け、我身は追手より忍び寄せ、鬨を作りて攻懸る。城中には、思設けざる事なる故、夜討こそ寄せ來れと、周章騷ぐこと大方ならず、太刀よ松明よ馬よ鑓よと騷動す。城

の領人上村十郎、士卒を下知して防ぎ戰ふ所に、豫て入置きたる忍の者共二十餘人、城中の所々に火をかけ、此に顯れ彼に隱れ、喚き叫んで切廻れば、城兵等之に驚き、味方の中に謀叛人こそ出來たれと、狼狽へ廻る所に、寄手の勢、追手搦手より、只一息に攻入りて、切立て追立て戰ひしかば、城兵散々に切なされ、十方に落ちて行く。城將上村十郎、今は是迄なり。引入りて自害せんと、一間なる所へ走り入り、鎧を脫捨て、既に腹を切らんとする所に、右衞門尉が甥の志貴小八郎、障子を蹴破り飛入りて、只一太刀に討取り、首を鋒に刺貫き、悅ぶこと限なし。殘黨等悉く討取りて、再び城を取返しければ、大將正成大に感じ、賞祿をぞ與へられける。

河州人見山城軍附永瀨七郎被二生捕一事

楠正成と矢尾別當と、互に威を爭ふこと數年なり。素より正成、神武不測の名將なりと雖、矢尾も亦勇謀兼備の法師故、打負くれども事ともせず。如何にもして、本意を達せんと思案して、正成の領所人見山に城を築き、若し正成押寄せなば、我れ後

人見山の合戦

詰して、前後より取挟み、楠を討取るべしとて、正和五年四月上旬、舎弟永瀬七郎元満に、従兄弟の若江四郎を相添へ、如法院幸覺・穴太藤三以下、究竟の精兵三百餘騎をぞ籠めたりける。正成此告を聞き、敵に足をためさせては悪かりなんとて、赤坂に有合ふ所の手勢二百餘騎を引率し、人見山へ押寄せらる。和田孫三郎正遠・恩地左近太郎満一等馳加はつて、五百餘騎にぞなりにける。正成悦び、士卒を集め、此人見山は、東南の二方は、磐石連り要害自然の嶮岨なれば、城兵等働くこと叶ふまじ。元より切所を頼みに、防ぎ勢もあるまじけれども、味方の勢、攻寄すること叶ひ難し。さるに依つて正成思慮を廻らすに、先づ忍の上手共を、城中に忍ばせ入れ、不意に城に火をかけなば、城兵等前後を忘れ、周章せんは治定なり。其時味方の勢進むべからず。静まり返つて勢を備へ、敵の落つるを待ちて討止むべし。日を経ば顕幸後詰して、正成を、先後より引包まんとぞ議るらん。今夜城を焼落すべしとて、板持・飛田以下、名を得し忍の者共を招き、汝等城に忍入り、方々に火をかけよ。城主永瀬は、矢尾の作道へぞ落行くらん。元満を擒にせよ。必ず討つべからずとて、恩

地左近太郎に、究竟の若者五十人に、棒を持たせて差添へ、矢尾の作道へ向はしめ、和田孫三郎は、宇津の在家に陣を取らせ、我身は城に向ひ、陣を取りてぞ居られける。板持・飛田以下、安々と城中に忍入り、其夜の丑の刻計に、三所より火をかくる。豫て合圖の事なれば、関をも作らず、静まり返りて詠め居る。城中には、忍の入りたるとは夢にも知らず、返忠（かへりちう）の者こそ出來たれと、驚き騒ぐこと斜ならず、子は親を捨て、従者は主を後に置きて、十方に落行きけり。恩地左近太郎は、矢尾の作道に陣を取り、棒の者五十人を、路の傍なる草中に伏置きたり。案の如く大将永瀬七郎元満、主従只三騎にて、作道を落來る。恩地は百二十騎にて陣しけるが、敵を僞（おび）引き寄せんが爲め、味方の勢廿五騎を、落人に似せさせ、同士軍せさせて、逃る體にぞ見せかけゝる。先立つて早敵二人生捕りしかば、棒の者共に相添へ差置きて、敵の様子を問はせければ、只今逃れ來るこそ、大将七郎殿にて候といふ。五十人の者共、此事を聞課せ、永瀬を間近く僞引き寄せ、一同に咄と起立ち、一馬の足を薙伏せ〳〵、落つる所を叩倒し打伏せて、何の手もなく、三騎共に生捕りけり。如法院幸覺は、深手淺

手十三ヶ所迄負ひ乍ら、辛うじて落延びぬ。若江四郎は、多勢の中を切抜けて、難なく矢尾に落行きけり。斯くて正成は赤坂に歸陣し、七郎元滿に對面し、慇懃に饗應すること、宛ら賓客を請せしが如く、世に情深くあへしらひ、三十餘日を經て、矢尾が方へ送り返されければ、諸人皆正成の情の程をぞ感じける。

北條高時奢侈幷越智八郎滅亡の事

北條相模守平高時と申すは、最勝園寺貞時の家嫡なりし故、正和五年父の遺跡を續ぎて、將軍家の執權職に補せらるゝ。此時の征夷將軍は、後深草院の御孫久明親王の長子守邦親王にてぞ坐しける。高時此時十四歳未だ幼若なりと雖、北條既に九代、天下の執政として、殊に武藏守泰時より以來、專ら仁政を執行はれければ、其餘澤にやよりけん、內管領長崎入道圓喜・高時の舅秋田城介時顯等、高時を輔佐し、貞時の政務を學び、先例を以て政道を執行ひしかば、天下も穩なりし所に、高時成長するに從ひ、非道非義の行跡のみにして、晝夜傾遊を好み、夜は終夜美女を集め、酒

に沈醉して狂人の如く、晝は終日田樂を集め、金銀を費すこと瓦石の如し。後には入道して、崇鑑とぞ號しける。奢侈日々に盛に、月々に增長して、鎌倉府中に集め置く所の美女三十七人、大庄三ヶ所四ヶ所、或は二千貫三千貫の所領を與へらる。加之新座・本座の田樂、凡そ二千餘人、之を十人廿人、或は二人三人づつ、在鎌倉の諸大名の、其分限に隨つて、預け置かるゝ所の弊（つひえ）幾許ぞや。是等が爲に、故右大將賴朝卿より給はり傳へたる諸士の領地を、故なく沒收して與へられしかば、大名國人等貧うして、民を貪り惱せり。是に依りて日本六十餘州、總て貧國とぞなりにける。然るに長崎圓喜入道、既に老耄しければ、其子新左衞門高資、內管領として、天下の事、大小となく執行ふ。高資素より慾心强盛にして、色を好んで美女を愛し、己を慢じて士を侮り、賄賂に耽つて、忠なき者に賞を與へ、咎なきに罰を加へしかば、大名國人等、相模守高時を恨み憤ること甚し。視二君臣一如二土芥一則視二臣君一如二寇讎一といへること、理なりと覺えけり。其頃大和國の住人に、越智八郎といふ者あり。相模守平高時幷に長崎新左衞門尉高資が、非道の政を恨み、反逆を企てんと相巧みけるが、

内々紀州の安田庄司・摂州の渡邊右衛門尉等と心を合せ、天下を覆さんとぞ企みける。斯る所に越智八郎逆心を企つる由、京都六波羅に聞えしかば、未だ敵に勢の馳着かざる先に、攻落せよとて、元亨二年の夏、六千餘騎を差遣さる。楠多門兵衛尉正成も、六波羅の催促に從ひ、三百餘騎にて出陣す。越智八郎もさる者なれば、三千餘騎を引率し、半途に出でて勢を伏せ、敵の思寄らざる所を、不意に起つて攻立つる。京勢は、すは敵方に伏勢を設けたるぞ。備を立直して戰へと、いふ程こそあれ。先陣後陣一同に、喚と崩れて逃げて行く。大和勢氣に乘りて、短兵直に進み備を亂し、一人も遁さじと追懸くる。是に依つて敵將八郎が本陣も、僅百騎計になりにけり。楠正成は是迄も、猶靜まり返つて備へられけるが、百騎計にて控へたるは、大將越智が本陣と覺えたり。斯く軍道をも知らざる敵を討たん事は、いと易く覺ゆるぞ。必ず亂れて味方を追ふ敵を討つべからず。我三百餘騎の勢を以て、五人六人方々へ散亂れたる敵を討ちたればとて、何の高名とかなるべきぞ。敵將越智が首を取つて、子孫の眉目に當てよと、下知せらるれば、三百餘騎の兵共、越智が勢の眞中へ、驀直に切つて入り、敵を巴の字に追廻し、萬字に切立つるとぞ見えし。百餘騎の者共、或は討たれ又は逃散りしかば、今は大將越智八郎を始め、主從僅十三騎にぞなりにける。八郎此勢を一所に集め、又敵中に馳入つて、前後に當り左右を擊ち、七顚八倒して戰ひけるが、十一騎討たれて、大將八郎と生殘五郎と、主從只二騎に討なされ、敵中を切拔け、南を指して落ちて行く。逸雄（はやりを）の若者共、何國迄と追懸けしかば、越智生殘二人、共に馬をも射られ、歩立になり、四五町も落延びしを、多勢追懸け、遂に二人共に討取りしかば、京勢悦び、凱歌を唱へて引返す。是に依つて諸士、愈正成の武勇を感せずといふ事なし。

楠正成、越智八郎を討つ

南朝太平記巻第二終

北條高時奢侈并越智八郎滅亡の事

南朝太平記　巻第三

渡邊右衞門尉逆心附楠正成攝州發向の事

楠正成、渡邊勢と戰ふ

さる程に和州の越智、既に滅亡しける所に、攝津國の住人渡邊右衞門尉、高時を恨み逆心を起し、近郷を侵せしかば、六波羅多勢を差向けらるゝの所に、京勢一戰に打負け、言甲斐なく帝都まで引返す。是に依つて楠兵衞尉正成、六波羅の命を奉つて三千餘騎を引率し、渡邊の城に押寄せらる。此城廻(めぐら)十町廿町が程は深田にして、路より外は、人馬の通ひなり難し。敵將渡邊右衞門尉も一千餘騎を從へ、城中を打つて出で、七つに分けて備へたり。正成士卒に向ひ、敵の陣所を見渡すに、是より十餘町は隔てぬらん、其の勢千騎にはよも過ぎじ。然れば百騎と見えたる備へは、百五十騎差遣さん。何れとも斯の如くにして、味方をも七つに分けて差遣し、敵の強弱を試みんとて、先づ持楯の人長なるを、面に撓皮(いためがは)を張り、楯に狹間を切らせたるを手々に持たせ、打物の衆を後に立て、射手を先に進ませて、敵間十間十五間、又は廿間計を隔てゝ相戰ふ。敵、馬武者を以て駈破らんとすれば、持楯前に突連ねて堅城の如く、又引取らんとすれば、敵追縋つて、駈散らすべき氣色なり。右衞門尉が郎等深志入道伯心、渡邊が前に來り、此分にては味方の負軍と見えて候。早く此方にも柴を築上げ、防戰の便と仕らばやといへば、渡邊聞きて、此儀尤なりとて、芝を築上げさする所に、正成、精兵の射手を二百人勝(すぐ)り出し、散々に射させければ、楯も物具も耐らず、手負死人數百人出來れり。敵の防ぎ兼ぬるを見て、楠又七手の備へ、加勢の者共を差加へ、我身は二三町退きて陣を立て、又百五十騎を遣して、戰ひ疲れたる味方の勢と、入變へて戰はしむ。正成又豫て用意し置きたる酒飯を、先陣の勢に勸むること、一日に三度なり。正成の本陣より、軍使の行歸ること、只櫛の齒を引くが如く、斯くして戰ひ暮しけり。渡邊右衞門尉、正成の智謀に碎かれ、叶はじとや思ひけん、夜に入りしかば、士卒を引具し、城中に逃籠る。扨こそ敵は引入り

たるぞと、寄手の勢直に進んで、渡邊が城を七重八疊に取巻きたり。恩地左近太郎滿一、此度の御謀こそ驚入りて候へ。誠に深き御智謀にこそと感じければ、正成聞き給ひ、物に心得ざる將の、敵を攻めんとばかり思ふに依りて、斯の如く狹き所にては、不覺の事出來るものなり。切所は、味方ばかりの切所にあらず、敵の爲にも切所なれば、斯様の沼深田を隔てたる戰にこそ、深き謀略の侍るなれと宣へば、滿一愈感心をぞしたりける。

渡邊防戰 附 歿落の事

斯くて楠多門兵衞尉は、一族の和田孫三郎正遠を招き、敵は味方の勇威に怖れ、周章の體見えて、騷動すること斜ならず、今一時は動轉せんずるぞ。一當あてゝ見給へとて、正遠に八百餘騎にて攻立てさせ、神宮寺太郎・宇佐美彌次郎に一千餘騎を相添へ、二手に分けて中陣とし、大將正成は、一千三百餘騎を三つに分け、深田を後に當てゝ陣せらる。城の大將渡邊右衞門尉・同執事深志入道、眼をいらゝげ馳廻つて、

斯様の一大事に與したる者共の、周章騷ぐは何事ぞや。豫て討死とは約せざるや。士卒心を一致にして、皆悉く討死して、譽を後代に殘せよと下知しければ、諸勢暫時に靜まりて、爰を先途と防いだり。斯る所に正成の陣所より、引太皷を打出せしかば、先陣の軍勢共、本意なき事に思ひ乍ら、豫ての軍令嚴密なれば、敵を攻捨にして、一同に颯と引取りけり。和田孫三郎正遠、正成の陣所に來り、今少し攻めたりせば、城は落つべかりつるものを。何故早く引太皷は打たれ給ひしぞ。殘念の至りにこそと申されば、いやとよ、さにはあらず。攻めざる前に周章騷ぎたる城の、攻懸るや否靜まり返りたるは、如何にも落し難きに候。攻めざる前は靜まりたる城の、攻懸りてより騷ぎ出でたる城は、必ず落城するものにて候ぞ。城の堀深く芝の手極めて高ければ、中々落つべうも候はず。强く攻めば落つべけれども、味方多く討たれぬべし。良將は戰はずして勝つといふ事の候ぞ。明日は謀を以て、敵を滅すべく候ぞと答へられけり。其翌未明に、東藏主といへる僧の、辯舌勝れたるを城中に差遣し、當城を攻落し候はんことも、日あらじとこそ存じ候へ。假令合戰の習、如何

渡邊勢殺落

なる術(てだて)を以て、正成には打勝たせ給ひ候とも、日本國を敵に受け、早晩(いつ)迄か遁れさせ給ふべき。世々武名香しき渡邊の御家を失はせ給はんこと、勿體なく覺え候。夜に紛れて當城を御落あり、如何なる山林にも身を寄せて、天下の變を待ち給ふか。鎌倉へ緣を求めて、降參をも御乞ひ候へかし。正成虛知(そしら)らずして、落し參らせ候はん。能々御思慮候べしと、理を盡していはせければ、渡邊是に同じ、仰に從ひ候はんと答へければ、正成悅び、一方を闕きて陣せらる。其夜深更に及んで、渡邊を初め城兵等、何國(いづく)ともなく落行きしかば、翌日城を燒拂ひ、其より歸陣せられけり。右衞門尉、此情を感じけるにや、元弘の合戰に正成に屬し、粉骨を盡しけるとぞ聞えし。

宮田庄司謀叛附正成紀州勝尾着陣の事

斯る所に紀伊國の住人安田庄司も、逆心の色を顯し、軍勢を相催す所に、玉置庄司・湯川庄司等も、安田が緣者たるに依つて、一番に馳來る。其外紀伊の深田に育ちたる剛強の溢れ者共馳集つて、七千餘騎に及びけり。紀州の早馬頻に打つて、事の急を

正成、安田庄司の勢と戰ふ

告げしかば、六波羅の周章斜ならず。漸々越智・渡邊を退治せし所に、こは如何なる事ぞや。誰々といふとも、楠に越すべからずとて、又正成にぞ命せられける。是に依つて楠兵衞正成は、大和・河內・和泉・紀伊の勢を相催して、三千餘騎、紀州を指して發向す。然るに安田が陣より、四里此方に深山あり。其より五六町計此方に、河一筋流れたり。此河、さまでの大河にはあらざれども、大石多く巖峙ち、水逆卷き白浪岸を洗ひたり。正成先づ若黨二人走らして、鄕民一人尋ね出し、爰をば何といふぞと問ひ給へば、勝尾と申候といふ。扨は名といひ地勢といひ、旁以て究竟の陣所なりとて、一河を前に當てゝ陣し給ふ。手の勢六百餘騎をば二つに分けて、二百餘騎を嶺々に備へさせ、四百餘騎をば麓に陣取らせ、正成は供の郎從少々相從へ、何處は沼、何處は深田、何處は谷、此處には坂、彼には細道ありと、前後三里の谷嶺を、悉く見課せて、備分をぞせられける。先づ小賀太郎宗澄・宇多入道法印勝順は、二百餘騎にて、艮の方峠に續いて陣を取る。其よりなれ下りたる尾崎には、河瀨兵部丞清定・嫡子太夫定種・伊丹十郎百五十騎にて備へたり。西南の方の山壇には、村越與市・

木澤入道、内郡の者共三百餘、麓には、一千餘騎にて備へけり。斯くて正成は、其よ
り忍の者を以て、敵陣の様を、三日が間見せられしかども、元來河内の野伏共なれ
ば、紀州の案内を知らずして、敵陣近く迄も行くこと能はず。少々敵陣へ入る者あ
りと雖、見課するは希なりけり。正成思慮を廻らし、如何にもして、紀州の野伏共を
招かばやと思はれけるが、我扶持し置きたる野伏共の中に、當國の野伏共と相知れ
る者やあると尋ねられけるに、某こそ知れる野伏共の多く候といふ。然らば急ぎ尋
ね具して參るべしとて、金銀多く取出してぞ與へられける。此者彼方此方と走り廻
りて、野伏八人具し來れり。正成見給ひ、御邊達は、當國の案内をば、能く知りぬら
んと問はるれば、形の如く存じて候といふ。然らば敵の陣所を見て歸るべしとて、
宗徒の野伏六人を、相添へてぞ遣されける。野伏共、其夜敵陣に忍入り、翌日は敵の
陣中に紛れ居て、思ふまゝに見澄し、次の夜正成の陣所に歸り來る。正成一人づつ
呼出して問はれけるに、敵の陣屋八百餘も候らん。安田庄司が本陣は、一段高く候。
其餘は谷にも峯にも、陣を取續け候といふ。正成一々尋ね聞きて後、忍び入りたる
様をも、細々と問はれけり。是は國に依りて用心する風をも聞き、又忍び入る様を
も、國々に依りて品多くあるべければ、其を聞きて、其國の忍を防ぐ便ともなすべき
爲なりけり。十餘人が申す言葉、一々相違なかりければ、正成熟思案し、扨は紀州武
者の軍立も、事淺く覺ゆるなり。今一度功者の忍を差遣し、能々窺ひ畢せて後、夜討
にせんものをと、思設けてぞ居たりける。

勝尾合戰 附 安田滅亡の事

斯る所に安田庄司、寄手の勢、思ひしより小勢なりと見謾り、湯川・玉置などと軍議
して、七千餘騎にて押寄せたり。寄手の陣に備へたる、諸國の取集め勢共之を見て、
すは敵は寄懸けたるぞ。一戰に打散らせといふ程こそあれ。河を渡して、敵を一戰
に打散らさんとぞ犇きける。正成の手勢六百餘騎は、豫ての制法正しければ、己れ
己れが陣前に並居て、大將の下知を待つ。時に正成、山より下りて陣前に立ち、峯の
勢を山の半腹に控へさせて後、足輕の兵三十餘人相具し、河を渡して敵陣を見られ

けるに、七十餘騎もやあらんと覺えて、先後二つに分けて備へたり。正成、集め勢共を麾き、河岸より一町計り向なる妻手の方に伏せ置き、峯より向の左の方に、集り勢に足輕を加へて備へさせ、正成は少々集り勢を差加へ、先陣四百餘騎にて備へられけるが、七八町も先登に進みたる勢に軍使を馳せ、虛逃して敵を僞引寄せよと下知せられしかば、先登の兵共、敵の多勢に怖れたる氣色をして、ひた引に引退く。敵將安田の庄司は、四千餘騎にて先陣に打ち、湯川庄司・玉置庄司等が勢三千餘騎を、後陣に打たせて押寄せけるが、敵兵亂れ引くを見て、大將安田庄司、敵は退くぞ、追懸けて討取れよ。一陣破れて、殘黨何ぞ全からん。追討して高名せよ者共と下知すれば、剛強の若者共、我後れじと追懸くる。寄手一返しも返さず、八方に分れて敗走す。安田が勢氣に乘つて、突兵急に追懸くる。楠方の三百餘騎、敵を半やり過して、魚鱗懸りに駈入り、北より南に追廻し、西より東へ切通つて、旌旗入れ交はるとぞ見えし。安田が勢咄と崩れ、立足もなく逃行くを、突立て切立て追懸けしかば、後陣に控へたる玉置・湯川が三千餘騎の中へ、頽れ懸つて逃入りしかば、後陣の勢三千餘騎、

騷動すること夥し。時に河岸に控へたる四百餘騎、正成の下知を受けて、一同に河を押渡り、安田が勢に打つて懸る。始めより山の半腹に備へたる二百餘騎、松柏の生繁りたる陰より、菊水の紋畫きたる簇を、數十流れ差上げて、坂を下りに押向ふ。其勢數萬騎に見えて、雲霞の如くに棚曳いたり。先に敗走せる軍勢共も、時こそよけれと取て返し〳〵、喚き叫んで追懸くる。其勢震々雷々として、霹靂頭を碎くかとぞ見えし。玉置・湯川が勢も、耐らず崩れけり。安田が叔父の安田又次郎も、痛手三ヶ所迄蒙り、馬にも離れ落行きしを、宇多右衞門次郎追詰めて組んで討つ。雜賀入道も、主從二騎にて落行きけるを、玉井小次郎父子追懸けて討取つたり。斯の如く其行程二里計、追討に討取りし程に、死骸は累々として、新に一堆の山をなせり。玉置・湯川を始め、與力したる軍勢共、十分に逃行きしかば、安田主從八十餘騎になり、己れが居城に逃籠る。寄手の勢勇み進んで、十重廿重に取圍み、塀を乘破つて攻込み、殘兵等を追詰め〳〵討取りしかば、安田庄司も、今は遁れぬ所なりと、腹掻切つて伏しければ、寄手の勢、城に火をかけ、勝鬨作つて引取りけり。相模守平高

時、此注進を聞きて大に其戰功を感じ、安田が一跡三千餘貫の地を、正成に與へらる。是よりして正成の武名、遠近に轟きけり。

高時俛遊附萬代入道の事

さる程に相模守平高時は、奢日々に超過して、明暮田樂を弄びけるが、此頃は又鬪犬を愛する事甚し。之を見て媚を求むる佞人等、奇犬を尋ね出し、鎌倉へ引下りて差上げしかば、金銀珊瑚琥珀などの首輪を入れ、綾羅を着たる公犬、鎌倉中に充滿たり。之を飼ふに魚鳥を以てし、之を維ぐに金銀を鏤め、錦繡を以て着物とす。されば旅人も、此公犬に逢ひぬれば、馬より下りて跪き、商工の輩も笠を脫ぎ、頭巾を取つて畏る。此時豐前國より黃犬を進上し、周防國より靑犬を引參らす。黃犬の眼は靑くして光あり。靑犬の眼は黃にして、遠く光り耀けり。之を兩陣の犬將と號し、月に十二度の犬合あつて、在鎌倉の諸士、其席に連らん事を求めけり。其弊幾千ぞや。加之新殿とて、扇谷に妾あり。之を愛すること甚しく、其賂として、大庄四ヶ所

寄せらるゝ。其餘の美女卅七人、酒に長じて終日戲れ、終夜に舞ひ遊ぶ。さるに依つて智化老臣は、高時の前に出づる事を得ず。只昵近する者とては、田樂・猿樂・大酒の輩なり。爰に萬代左衞門尉入道は、故貞時高時父也の寵臣にて、文學の聞ありけるが、貞時卒去の後、哀悼の餘り入道して、萬代入道とぞ呼びにける。然るに高時、渠は父貞時の近臣にて、仁義を行ふ者なれば、我不義の行跡を、爭か能しと思ふべき。必定諫言をぞせんずらんと思はれければ、事を左右に寄せて、所領を半歿收し、常に對面する事なく、萬に付けて難面くぞ當りける。入道是より家貧しくなりて、譜代の郎等も、多くは散々になりにける。此入道常に文學を好むと雖、元來佞奸の者なりければ、此事を大に歎き、熟と心に思慮しけるは、世人皆濁、何不掘其泥而揚其波。衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨とは、古人の金言なるものをと思設けて、高時が美女を集め遊び戲れ居る所へ、萬代入道、態とさあらぬ體にて推參す。さしもの高時、いと恥かしく思はれければ、面を赤めて、暫は物をもいはず。良ありて萬代を傍近く招き、我れ終日酒を好み、終夜色に迷ひ、逸遊を心に任す。是れ諸人の指さす

後醍醐天皇北條高時を討たんと謀り給ふ

所なり。此故に我れ之を恥づ。入道もさぞ傍痛く思ふらんと打笑はる。入道申しけるは、公今日本を掌握に治め給ひ、萬民其快樂に誇り、四海其德を稱す。今此時に當つて、其程の御樂、何ぞ物の數にて候べき。堯舜文武の君の、聖人の行ありし事も、誠は書の詐にて候ものを、さのみ御心に懸けらるべからずといひければ、高時大に色を直し、扨々御邊は、廣學大智の人なるぞやとて、以前歿收せる所領を、悉く返し付け、其上に新恩地二ヶ所を與へられければ、智ある輩は、爪彈をしてぞ笑ひける。

後醍醐天皇御隱謀露顯附奥州蜂起の事

此時聖主は、後宇多院第二の皇子、後醍醐天皇にて渡らせ給ひけるが、王法の衰へたる事を歎き思召し、如何にもして北條一家を滅さんと、宸襟を惱ませ給ひけるが、近年諸國に武命を背く者多ければ、時既に至りぬとて、日野中納言資朝・四條中納言隆資・花山院大納言師賢・右少辨俊基・平宰相成輔に御密談あつて、少々在京の武士を召しける所に、此事六波羅に泄れ聞えしかば、正中元年九月十九日、君の御隱謀に與し奉りたる土岐十郎頼貞・多治見四郎次郎國長等を誅せられけるに、東使二人を落して、資朝・俊基を生捕りて關東に下りければ、こは如何なる憂目に逢はんずらんと、君叡慮を惱まさせ給ひ、萬里小路大納言宣房卿を以て、告文を關東に下させ給ふ。高時も、流石恐多くや思はれけん、御治世の事は、朝議に任せ奉る上は、武家いろひ申すべきやう候はずと敕答して、告文を返し奉りしかば、頓て宣房卿歸洛して、此由を奏させ申されけるにこそ、君も宸襟を安んぜさせ給ひけり。其後嘉暦元年三月十三日、高時廿四歳にして薙髪し、入道崇鑑とぞ號しける。其翌年の三月、高時入道異例以の外なりければ、様々醫術を盡されければ、程なく快氣せられける故。在鎌倉の諸士、悦の色を顯さんが爲、寄合ひ〳〵遊宴す。此時奥州の住人伊達光廣入道が亭へ、長崎新左衛門尉高資以下の幸臣を招き、宴會を催しけるに、安藤五郎と下山の一族と、傾城を爭ひ口論し、下山の一族を討ちしかば、鎌倉中の騒動夥し。相模入道大に怒り、是非を分たず、雙方共に誅すべき由を下知せらる。安藤も下山も大に恐れて、己れが本國に逃下り、高資が方へ使者を送つて、多く金銀をぞ與へける。長崎館

後醍醐天皇御隱謀露顯

迄慾に深き者なりければ、高時には兎角申し、討手の沙汰も止みける所に、安藤又太郎俄に下山に一味し、兄の五郎と合戰し、忽ち五郎を討取り、日々合戰に及び、奥州の騒動以の外に聞えければ、高時怒つて、其狼藉を鎭めんが爲、使節を差下されける所に、安藤等は之に從はず、忽ち使者を梟首しければ、相模入道大に怒り、足立五郎時光を、三千餘騎にて差下さる。足立奥州に發向し、數度合戰に及びけるが、遂に逆徒等を退治して、一先づ無爲にぞ屬しける。然るに主上は、猶も北條誅伐の御謀怠らせ給はずして、元德二年三月、東大寺・興福寺に行幸あり。同月又比叡山に行幸あつて、大講堂の供養を遂げ行はせ給ふ。是れ皆衆徒の心を取らせ給はんが爲なりけり。其上關東調伏の祕法を行はるゝ由聞えし故、同じき五月、東使二階堂下野判官長井遠江守兩人上洛して、法勝寺の圓觀上人・小野文觀僧正・淨土寺の忠圓僧正を召捕りて、鎌倉に連下りしかば、相模入道仔細を尋ね問ひ、御謀叛紛れなかりしかば、三人の僧徒を遠流に處し、右少辨俊基を再び關東に召下し、葛岡原にて死罪に行ひ、中納言資朝卿をも、配所佐渡國にて、終に誅し參らせけり。

後醍醐天皇南都へ御潛幸

山徒心變幷主上潛ニ行笠置一事

然るに元弘元年八月、東使兩人、三千餘騎にて上洛す。是は主上を遠島に遷し奉り、大塔宮尊雲親王（第四宮といへるは誤なり、第六の宮なり）を死罪に行ひ奉らんが爲なりと聞えしかば、主上大に驚かせ給ひ、急ぎ南都の方へ御潛幸あるべしとて、同じき廿四日の深更に及んで、鳳闕を忍び出させ給ひ、南都東南院へ入らせ給ふ。此時尹大納言師賢卿に天子の號を許され、山門へ差上させ給ふ。師賢卿敕に從ひ、衰龍の御衣を着し、璽輿に乘りて、山門の西塔院へ入り給へば、四條中納言隆資・二條中將爲明・中院中將貞平など、衣冠にて相從はれけり。是は南都へ官軍未だ馳せ集らず、城廓もまだ調はざる方に、凶徒遮つて押寄せば、事難義に及ばんか。然れば且は六波羅勢を防がんが爲、又は山門の衆徒の心をも、御覽せられんが爲なりけり。案の如く兩六波羅大に驚き、一萬二千餘騎を比叡山に差向けらる。此勢一戰に打負けて、六波羅に引返しければ、山徒悦ぶ事限なし。然るに古、後白河院山門を賴ませ給ひ、御登山ありし時

後醍醐天皇笠置へ御遷幸

も、先づ横川へ入らせ給ひて後、東塔南谷圓融坊へ移らせ給ひぬれば、且は先蹤といひ吉例なり、早く行幸を本院へなし奉らんと、西塔院へ觸遣せしかば、衆徒等理に服し、行幸を催さんと、皇居に參上したるに、折節深山嵐烈しくして、御簾を颯と吹上げたるに、龍顔を拜し奉りたれば、主上にはあらで師賢卿なり。大衆驚き呆れて、其より參上する衆徒一人もなかりしかば、今は事露顯しぬとて、師賢・隆資以下、君の御跡を慕ひ忍んで、山門を落ちられしかば、第三宮妙法院尊澄親王も、主上の御方へと志して落ちさせ給ひ、大塔宮も、吉野十津川の方へと志して、南都へぞ落ちさせ給ひける。さる程に主上は、南都東南院に入らせ給ひしかども、衆徒の心一致ならずして、事調ふべくもあらざりしかば、其より和泉の鷲峯山へ入らせ給ふ。此處も人里遠き深山なれば、計略の便ぞ惡かりなんとて、同じき廿七日、南都の衆徒等少々供奉し奉り、笠置の石室へ潛幸なし奉り、本堂を皇居となさる。斯る所に京勢、山徒に打負けぬと聞えしかば、近國の武士共馳參る。然れども勢の百騎とも從へたる輩は、一人も參らざれば、此體にては、當山の籠城も如何あらんとて、叡慮を惱ませ給ひけり。

藤房卿密計 附 正成參上笠置事

さる程に主上、萬里小路中納言藤房卿を、玉座近く召され、北條が權威を怖るゝが故か、名を知られたる武士は、未だ一人も馳參らず。此體にては、當寺に暫く安座せん事も覺束なく覺ゆるなり。然れば近年越智・安田等を誅伐して、世に武名を顯したる楠とかやいへる者は、河內國に居住すと聞きつれば、是より程も遠からじ。渠を招いて、賴まばやと思ふなり。此事如何あらんや、心中を殘さず敕答すべしとなり。藤房冠を傾け、暫時思案して申されけるは、敕定理に當つて覺え候。是に付きて猶も深く謀を巡らしたく候。古、殷高宗位に卽かせ給ふ時、賢臣を求めて、天下を泰平に治めんと思召されしかども、御心に叶ふ臣なかりけるが、或日群臣を召集めさせ給ひ、今夜不思議の夢を感得せり。其故は、天、朕が不德なるを憐れみ給ひ、良弼を授け給ふと見たり。朕正しく其顏色を覺えたりとて、其姿を繪に畫かしめ、普

く天下を、殘る所もなく尋ねしめ給ふ。時に傅岩の野に、土を荷へる民一人あり。其名を說と號す。惟肖たりとて、召連れて來りしかば、天、朕に與へ給ひし、夢中の賢人は是なりとて、頓て立てゝ宰相となし、其左右に置き給ひて、敕命ありけるは、朝夕誨を納れて以て台德を輔けよ。若金ならば、汝を以て礪とせん。若巨なる川を濟らば、汝を用ひて舟楫とせん。若歲大に旱せば、汝を以て霖雨とせん。乃が心を啓いて、朕が心を容れよ。若藥瞑眩せずんば、其疾瘳じ、若既にして地を視ずんば、厥足用ひて傷れん。惟乃の僚と心を同うして以て、乃の辟を匡すといふ事勿れ。先王に率ひ、我高后に迪つて、以て兆民を康んせよ。嗚呼予が時命を欽んで、其終あらん事を惟へと詔し給ひて、天下の政を任せられしかば、殷の世大に治りて候ひき。されば高宗幼稚に坐す時、民間に坐して傅說が賢なる事を御覽じ及ばせ給ひしかば、卽位の後、此人を擧げ用ひて、天下の政を任せたく思召しゝかども、賤き民を登用して、群臣の上に置きなば、諸臣皆恨み妬んで、其命を用ひまじと思召し、夢に事を寄せられて候なり。然れば今般靈夢なりと敕定あつて、楠を召し候ひなば、諸士

正成が德を感じ、聖運再び開かるべしと、思取り候べしとて、其謀を、忍びやかに奏聞し給ひしかば、君淺からす藤房の才智を叡感坐しけり。其翌朝主上は、萬里小路中納言藤房卿・舍弟中宮大進季房・源中納言具行・按察大納言公敏・六條少將忠顯・當寺の衆徒成就房以下を召し、朕昨夜不思議の靈夢を蒙れり。所は紫宸殿の庭上かと覺えたるに、大なる松樹あり、南へ指したる枝の、千年の陰深く榮え蔓れる其下に、三公九卿次第を守つて列座せり。座上に疊を高く敷き、未だ坐したる人もなかりしかば、誰を設けん爲の座席やらんと、怪しく思ひ見居たる所に、鬢結うたる童子二人、忽然として來り、朕が前に跪き、涙を流し乍ら、當時一天下の間に、暫くも御身を寄せらるべき所なし。南へ向へる玉扆こそ、御爲に設け置きて候。暫く是に御座候へといひて、二童は天に飛去りぬと見て、忽に夢覺めたり。朕思ふに、是れ天より示させ給ふ所の靈夢なりと覺えたり。吉凶如何あらん。勘へ申すべしと敕定ある。時に藤房卿、左右を顧みて宣ひけるは、臣退いて思案を巡らし候に、是れ天より告げさせ給ふ所の吉夢にて候。先づ二童子は、日月にて候べし。南に向ひて設けたる

後醍醐帝楠正成を召し給ふ

玉座は、君再び南面の徳を治めさせ給ふべきとの御事にて候べし。其上木の枝の南へ指したるに、心を付けて見候へば、木に南と書きたるは、楠と申す文字にて候はずや。然れば此邊に楠と呼ぶ〻武士の候か。御尋あつて、若し左様の者の候はゞ、召されて御頼み候へかしと宣へば、諸臣皆最上の御吉夢にて候と賀し奉る。主上御心よげに打笑ませ給ひ、藤房いしくも申したり。若此邊に楠といはるゝ武士やあると、敕定ある。成就律師承り、近き邊に左様の武士ありとも、未だ承り及び候はず。河内國金剛山の西に、楠正成と申す者の候。渠が父母、志貴の毘沙門に祈つて、靈夢を感得し、設けたる子にて候とて、多門丸と呼び候ひしが、當時は兵衛尉正成と申候と申す。扨は夢の告、是れなんめり。楠を召せと仰出されければ、藤房敕を奉り、頓て正成をぞ召されける。楠は、武門の面目、何事か是に如かんとて、急ぎ笠置に參上す。主上、藤房を以て仰出されけるは、東夷の征伐を頼み思召さるゝの所なり。如何にしてか朝敵を一時に滅すべきと敕定ありければ、正成謹んで承り、東夷の暴悪、前代未聞に候へば、天誅を巡らさるべき時至り候なり。戦伐の功は、偏に智勇の二つにて候。勢を以て論じ候はゞ、日本の兵を集め候とも、武藏・相模の勢に對し難く候べし。然れど、謀を以て戰ひなば、欺くに易く候はん。合戰の習、一旦の勝敗を、必ず叡慮に懸るべからず候。正成一人戰死仕らず、未だ存へ罷在りと聞召し候はゞ、聖運再びかるべしと思召候べしと、堅く領掌仕りて、御前を退出せられけり。

藤房卿密計附正成參上笠置一事

南朝太平記　巻第四

楠正成赤坂籠城附北條差二上多勢一事

楠正成赤坂城に據る

さる程に楠兵衛尉正成は、主上に頼まれ奉りしが、俄の事故、兵糧の用意なんどもなかりしかども、笠置に力を合せんが爲に、妻子幼若の輩を、金剛山の奥、觀心寺といへる山寺に隠して後、九月十一日、五百餘騎にて赤坂山の城に楯籠る。是は高時軍勢を差上すとも、諸士北條を恨むる時節なれば、不日には出勢すべからず。其間には和泉・攝津・河内三ヶ[illegible]攻靡け、多勢になりなば、笠置の後詰をせんとぞ企みけり。さる程に六波羅[illegible]勢、去る二日より笠置の城を取圍み、攻動かすと雖、城兵能く防ぎ戰ひしかば、寄手[illegible]度利を失ふ所に、楠正成赤坂の城に楯籠り、櫻山四郎入道も官軍に屬して、備後の一宮に起る由聞えしかば、六波羅の北方常陸駿河守大に

周章し、日々早馬を馳せて、關東に勢をぞ乞はれける。此早馬、同十六日に鎌倉に來着す。相模入道大に驚き、一家他家の大名、六十三人迄ぞ上されける。其人々には、大佛陸奥守貞直千二百餘騎・同遠江守貞次千五十騎・普恩寺相模守千百五十騎・鹽田越前守千百二十騎・櫻田三河守千三百餘騎・赤橋尾張守千三百餘騎・絲田左馬頭五百餘騎・江馬越前守三百餘騎・佐介上總介二百十騎・印具兵庫助百十騎・名越右馬介六十騎・金澤右馬介八十騎・遠江左近大夫將監治時百騎・足利治部大輔高氏千五百餘騎、侍大將には、長崎四郎左衞門尉二百餘騎、其外岩城次郎入道四百餘騎・宇都宮安藝守五百餘騎・同肥後守七百餘騎・同美濃入道八百餘騎・石崎彈正左衞門尉二千五百餘騎・田村刑部大輔入道五百餘騎・下總入道七百餘騎・長井因幡民部大輔入道五百餘騎・同備前太郎三百五十騎・同治部少輔二百餘騎・伊達入道七百餘騎・筑後前司四百餘騎・那須加賀守三百餘騎・葛西三郎兵衞尉三百餘騎・大內山城前司三百餘騎・土野七郎三郎二百餘騎・椎名孫八入道百五十騎・小山出羽入道百八十騎・氏家美作守二百餘騎・那波左近大夫將監百八十騎・三浦介入道百餘騎・結城土野入道百騎・武田次郎左衞門尉百餘

騎・長沼四郎左衞門尉百五十騎・梶原上野太郎左衞門尉二百餘騎・土屋安藝守二百餘騎・相馬右衞門次郎百二十騎・南部三郎二郎百二十騎・木村次郎左衞門尉百餘騎・一宮善民部大輔二百餘騎・土肥佐渡前司三百二十騎・寒河彌四郎百騎・佐野安房彌太郎三十騎・佐竹上總入道二百八十騎・毛利丹後前司百二十騎・岩崎孫三郎二百餘騎・同彦三郎百五十騎・山城左衞門太夫五百餘騎・横山・猪股の兩黨千餘騎・入江・蒲原一族千二百餘騎・武藏勢百騎・相模勢八十騎・伊豆・駿河勢百三十騎・上野勢五十騎、都合二萬五千七百五十餘騎、太平記に、廿萬七千六百餘騎と記せるは僞なり、同廿日に鎌倉を打立ちけり。北條家天下の權を執つて、承久の亂より以來、兵を動すことの輕き此の如し。今崇鑑愚將なりと雖、先代の掟を守り、且は父祖の家風殘れるが故に、早速諸勢打立ちけり。

赤坂城攻 幷 神宮寺彦太郎の事

さる程に東國の多勢、近日着陣すと聞えし所に、陶山藤三・小見山次郎、同晦日笠置の城に夜討して、忽に攻落せしかば、主上を始め奉り、一宮中務卿親王・三宮妙法院

尊澄親王、其外月卿雲客貴僧高僧以下、悉く生捕り參らせけり。斯くて東國勢は、笠置既に落城の由を聞き、之を本意なきことに思ひ、伊賀・伊勢・宇治・醍醐を經て、赤坂の城に押寄せたり。此城方一二町には過ぎじと覺えたるが、塀一重を賴みに、櫓少少掻雙べたれば、楠が分限思ふに違はず、乘入つて高名せよといふ程こそあれ。諸勢一同に打寄するより早く、堀へ飛入り、塀の陰に立雙んで、既に乘込まんとする所に、城中に豫て選び置きたる精兵の射手共二百餘人、鏃を揃へて散々に射ければ、板屋を過ぐる霰の如く、寄手、的になつて射られける程に、諸卒一溜りも悚へず、我先にと逃げ退く。正成之を見給ひ、あれ追立てられよと下知せらるれば、舍弟七郎正氏・甥の和田五郎正隆、三百餘騎を從へ、三の城戸より打つて出で、遁さじと追懸くる。引立ちたる勢なれば、一返も返さず、八方に分れ逃行くを、一里計り追討にして、敵を討つこと數を知らず。士卒悅び勇んで城中に引入りけり。正成諸卒を集め、今日の合戰は、是れ只弓の德なるぞや。二百人の射手あらずんば、爭か敵を退くべき。又追討せし兵も、功なきにあらず。命を義に捨て、多勢の中に、小勢にて切入りし

は、忠なりと感せらる。神宮寺彦太郎進み出で、士たらん者は、射術を學ぶべき事に候。我々は城中より切つて出で、數々所の手負ひ、太刀長刀を鎗の子の如くにしなしつれども、させる高名ならず。射手の人々は、居ながら敵を退けて、第一の高名となりぬるぞやと、無興氣にいひければ、正成聞き給ひ、無骨なる神宮寺が申やうかな。時によつて弓・鎗・刀の功も勝劣あり。敵元より弱兵にして、味方の防ぐに怖れ、引退きて敢て近付かざりしかば、今般は弓の功にてありしなり。猶も近く進み懸らば、其時は太刀・長刀の功なるべし。又猶も近からん時は、組討にすべければ、其時は力なり。此敵にこそ、古より兵具の品を分ちたり。其上御邊達の功なきにあらずと宣へば、神宮寺赤面し、某若年故、士の道に疎く、誤つて候なりと退きけり。斯くて打散らされたる寄手の勢、漸々吐田・楢原まで寄懸けしが、親を討たれ子を討たれたるを憤り、重ねて城に押寄せ、乘入らんとする所に、豫て設け置きたる釣塀の縄を切つて落せしかば、士卒等塀の下に敷かれて、起上らんとする所を、城中より大木大石を投懸けしかば、寄手又七百餘人討たれて、陣所に引取りけり。

正成拔二落赤坂一（附）和田・原田・勝多・生地の事

さる程に寄手の勢、此度は楯の面に撓皮（いためがは）を張らせ、潛き連れて攻寄せけるが、又釣塀にやあるらんと、士卒堀に飛浸り、熊手をかけて塀を引破らんとせし所に、城中より砂を煎り、柄の一二丈長き杓にてかけゝる程に、兜鍪の天邊、綿噛の外れより、彼砂、身に徹つて燒け爛れければ、寄手怺へず、一同に咄とぞ崩れける。是より寄手合戰を止め、只守り詰めてぞ居たりける。元來此城に、兵糧の用意なかりしかば、既に二十餘日にして、城中の糧盡きにけり。正成諸勢を集め、我れ數度の合戰に討勝つと雖、城中糧既に乏し。正成素より節に當り義に臨んで、命を惜むには非ざれども、謀を以てせずんば、爭か敵を亡さん。我今自害の眞似をして、敵兵を欺かん。然らば東國勢退くべし。敵退かば打つて出で、敵進まば退かん。此の如く五度も六度も、敵勢を惱しなば、極めて氣短なる東兵等、爭か退屈せざるべき。其間には、諸國に、御味方を仕る者多く出來らん。其弊に乘つて攻討たば、大利を得んこと必定

正成赤坂城を忍出づ

なりとて、城中に大なる穴を掘らせ、此程堀の中に多く討たれ伏したる寄手の死骸を二三十人、穴の中に取入れ、薪を多く積ませ、風雨の夜を待受けて、和田新五郎宗景・勝田左衛門尉直幸・生地兵衛尉・佐田原次郎正忠四人を、城に殘し留め、四五町も落ちつらん時、城に火を放つべしとて、術（てだて）を委しくいひ含め、皆鎧を脱ぎて徒膚になり、正成を初め、城中の士卒二人三人五人六人、敵に紛れて落行きけり。正成は、西の方の門より忍び出でられけるが、寄手の先陣、北の方は、赤橋尾張守の役所なり。其に續いて侍大將長崎四郎左衛門尉、其より南の方は、櫻田三河守が陣所なり。長崎が陣に續いて、三浦介入道、其より南は、名越右馬助の陣屋なり。正成は、長崎が陣所厩の前を忍び通り、三浦が陣所の前へ差掛らんとせられける所に、三浦介が郎等古郡彌三郎之を見咎め、何者なれば深更に及んで、御役所の前を忍び、竊に通るぞと咎めける。正成聞きも敢ず、是は大佛陸奥守殿の御内の者にて候が、雨強く候ひぬ。雲重なつて目刺すも知らず候へば、道を踏違へて候と、いひ捨てゝ通られけるを、木村新介、扨は痴者（しれもの）ぞ。馬盜人にてぞあるらん。射殺してくれん者をと、走り寄つて兵と射る。其矢正成の臂のかゝりに當りたるが、少しも膚を犯さずして、箆を返して飛翻（とびかへ）る。後に能々見れば、膚の守に入れて、年來日來身を離たず、信仰して讀誦せし普門品に、矢先留りけるこそ不思議なれ。正成の先祖左兵衛督盛康より、子孫代々持傳へし普門品は是なり。正成を始め、家子郎等一人も討たれず、皆悉く落延びけり。城中に殘り留りたる和田新五・田原次郎・勝多左衛門・生地兵衛尉、是等四人の者共、今は時分こそよけれと、城の役所に火をかくる。寄手の勢之を見て、すは城は落ちたるぞと、喚き叫んで押懸くる。豫て正成、巧み置きしことなれば、勝田と生地は、西の方の門より出で、和田と原田は、北の城の城戸より出でけるが、先駈の勢の眞似をして、手々に首を提げ、敵は未だ詰の城にあるぞ。切入れや者共と呼はつて出でければ、寄手の勢、味方ぞと心得、勇々しき者共かな。我々も高名せんと、揉合ひ押合ひ込入る程に、西より入る者は、北より入る味方を敵ぞと思ひ、北より入る勢は、西より入る者共を敵ぞと誤り、豫て合印合詞をも定めざれば、同士討することゝ數刻なり。互に味方ならんと、思ひも寄らざることなれば、爰を詮と戰ふ

程に、二百餘人同士討に討たれて、漸々と靜まりけり。夜明けて後に見れば、大なる穴の中に、燒死したる死骸多し。扨は正成を始め宗徒の者共、悉く生害したるにこそ。流石武功の勇將程ありけるぞとて、諸人之を感じけり。さる程に勝田・生地・和田・原田は、安々と赤坂を遁れ出で、金剛山の城に落歸り、正成に對面し、事の次第を語りければ、正成大に感じ、多くの人の中に四人殘り留つて、今又恙く歸りしは、忠あり義あり勇ありとて、太刀一振づつ與へらる。四人の者共、畏つて申しけるは、命は義によつて輕しとこそ申候へ。累代御厚恩を蒙り、妻子を育み候へば、命は君に豫て奉り置き候ひぬ。引出物は、前より數度給はり候ものをとて辭退せり。正成平に給はるべしと、三度に及んで强ひられければ、其時各拜受して退きけり。

恩地滿一計略 幷 赤坂城軍の事

さる程に關東の計らひとして、後伏見院第一の御子を御位に卽け奉らる。光嚴院殿是なり。斯くて先帝後醍醐天皇を、隱岐の國へ流し奉り、其外諸門跡月卿雲客以下、

或は流罪或は死罪に行はる。大塔宮尊雲親王計は、辛うじて十津川の方に落ちさせ給ひ、竹原入道が許に忍びて坐しける。楠兵衞尉正成は、赤坂の城を落ちて後、猶も計略の爲、恩地左近太郎滿一と二人、三河國に下り、正成は猿樂の從者となり、恩地は猿舞の從者となり、姿を變へて、彼方此方と經廻りける。其の年も暮れて、翌れば元弘二年正月、二人共に河内國觀心寺にぞ歸りける。是は關東よりの計らひとして、赤坂の城に、紀州の住人湯淺孫六入道定佛を据ゑ置きければ、先づ初度の合戰に、赤坂を攻落さんが爲なりけり。此城は、元來正成の築かれたる城なれば、家子郎從能く案內を知りぬ。其上鄉民等は、數代の領主なれば、正成を戀慕へり。去るに依つて攻落すに安かるべしとて、斯く思ひ立たれけるが、若城の體替りしこともあるらんとて、先づ忍の者二人差遣し、城中の體を窺はせけるに、二人の忍び立歸つて申しけるは、湯淺愚將と見え候ひて、城中の體、思ひしよりは淺間に候。役所々々に搔楯もなく、矢の用意をもせず、兵糧も少く、內外の城に、家六十八軍勢五百人には過ぎ候はじとぞ申しける。正成猶も能々窺ひ課せん爲に、恩地左近太郎を、忍びに交

へて遣さる。滿一深く思慮を巡らし、我領内に八郎太夫とて、猿を舞はす男のありければ、渠に猿を引かせ、下人になりて、髭を剃りて、綴りたる着物の袖も附けざるを着し、破れたる笠を引蒙り、爪木に米嚢など取入れ、八郎太夫に從ひ、白晝に赤坂の城中に入り、城の構、勢の多少、兵糧の分限、思ふまゝに見澄してぞ歸りける。正成恩地に對面して、城中の樣を問ひけるに、始め忍びの者共が申せしに、少しも違はず候といふ。正成扨は心易し。攻取らんこと手裏にありと、近國の勢を相催し、和泉・河内兩國の堺にて勢を揃へければ、三千餘騎にぞ及びける。さらば赤坂に押寄せ、敵の虛實を窺ふべしとて、同四月二日に、觀心寺を打立ち、翌三日の卯の刻、赤坂の城に押寄せらる、正成謀才深き大將なれば、若敵追手より討つて出でば、搦手より城中に切入るべしとて、志貴右衞門尉に三百餘騎を附け、搦手の南に當りたる竹の林、又は木の茂りたる中に隱し置き、其外所々の切所に勢を伏せ置きて、態と小勢の體に見せ、追手の城戸に押寄せらる。士卒同音に鬨を作り、只洪水の漲り來れる如く、無二無三に攻懸る。湯淺入道大に驚き、敵は誰なるぞと問ふ。敵の旗の紋、皆菊水にて候といふ。入道聞きて、扨は正成が自害したるは僞ぞや。大事の敵ぞ。卒爾に出でて、戰ふべからずとぞ制しける。湯淺が甥の有田孫四郎、敵は小勢にて候ぞ。切つて出で一戰し、追拂ひ候はゞやといひけれども、入道用ひず。敵も敵によるぞ。正成は謀深き者なれば、如何なる術をかせんずらん。能く防ぎ守つて、敵の軍立を見定めてこそといへば、有田聞きも敢へず、入道殿は、早晩も合戰を大事にし過し給ふぞや。昧方兵糧多からねば、久しき籠城は叶ふまじ。然れば敵を急に追拂ふべきの圖に當れり。此上は某が手勢計にて討つて出で、一戰して試み候はんと進みけれども、入道大に制しければ、力なく止みにけり。寄手は、午の刻まで攻立てしかども、城兵一騎も出でざれば、正成其より一里計引退き、廣野の中に小高き岡のありければ、此所に陣をぞ取られける。

赤坂落城附定佛入道降參の事

正成は豫てより、忍びの者八人、赤坂の城に入れ置かれけるが、翌四日の寅の下刻、

忍びの者二人走り歸り、城中兵糧乏しく候故、紀州阿瀬川より兵糧を入れ候といふ。正成大に悦び、扨こそは能き謀は出來れりと、和田孫三郎・恩地左近太郎・高安寺に能々術をいひ含め、是等を將として、究竟の兵三百人、紀伊と河内の境なる、紀見峠へぞ差遣はされける。斯る所に同七日の丑の刻計り、湯淺が兵三百餘人、兵糧を牛馬に負はせ、或は背に負ひて紀見峠を越えんとす。時に和田・恩地、二百餘人を跡に殘し、百餘人にて一同に咄と駈出づる。湯淺が郎等雜人等、牛馬を捨て、背負ひたる米を打捨て、這々紀州に逃歸る。和田・恩地馳廻り、必ず敵を追ふべからずと制しけり。是は味方三百餘、氣に乘つて追懸けんに、若敵に武勇の士あつて取つて返し、切拔けて赤坂の城へ入り、此事を知らせなば、後の謀、なり難からんずればなり。此時敵の首十二級を得たりけり。正成は、敵の捨てたりし兵糧を、味方の陣に取り運ぶべしと下知せらる。又豫てより、俵に鎧を多く入れ置かせたるを、馬に負はせ、雜人に荷せて、二三百人作り立て、明れば八月の卯の刻、阿瀬川より兵糧を入るゝを、寄手の勢、追散らさんとする眞似をして、城邊にて追つ返しつ、同士軍をして相

戰ふ。湯淺入道成佛此體を見て、敵は兵糧を奪はんとするぞ。打つて出で追拂へと、城を拂つて切つて出で、爰を詮と戰うたり。寄手の勢、安々と城中に入りて、俵より鎧取出し、ひし〳〵と堅め、菊水の旗を颯と差上げ、同音に鬨を咄と作る。湯淺が勢大に驚き、敵兵早城中に入りたるぞ。引入れて戰へと、周章騷ぎて逃入るを、寄手の勢氣に乘つて、遁すな泄らすな討取れと喚き叫んで、切立て〳〵城中に攻入れば、城の大將湯淺孫六入道も、一騎當千とも賴みたる有田孫四郎は、橋本八郎と組んで討たれぬ。敵は前後より攻立つる。今は十計盡きて、降を乞ひ城を渡し、正成の手にぞ屬しける。此合戰、湯淺が不覺にあらず、只正成の神智妙策によるものなりと、諸人之をぞ感じける。

矢尾顯幸屬正成事

さる程に楠兵衞尉正成は、赤坂の城を攻落し、湯淺が勢を併せて、近國を攻從へんと思はれければ、先づ格侍者といへる禪僧を、矢尾別當顯幸が方へ遣はし語らはれ

ければ、別當之に應じ、頓て手勢百五十騎にて馳來り、正成の手に屬す。此別當は、楠と合戰を挑むこと數年、殊に顯幸は、正成に我領地を伐取られ、憤、骨髓に徹つてありけるに、今何故に、正成と和睦せしぞと尋ぬるに、是皆正成の計略より出でたるなり。其故は、正成未だ赤坂を落さゝる前、先づ三州より觀心寺に歸りて後、去ぬる正月、十津川に御坐しける大塔の宮の御方へ、使を參らせて、忍びやかに申しけるは、矢尾の別當顯幸は、法師ながらも、武勇勝れたる者に候へば、渠が味方に屬せざる程は、河内の國平治し難く覺え候。正成とは、父正澄より、所領のことによりて矛盾に及び候へば、正成未だ生きてありと知り候はゞ、如何に召され候とも、敕定に應ずまじく覺え候。此法師は、生得心淺々しく、正直なる者にして、官位に望をかくる者にて候へば、令旨を賜はつて、渠を招かれ候へかし。其術（てだて）は先づ權僧正になし下され、恩賞は朝敵誅伐の以後、宜しく請ふによるべしと仰下され候はゞ、必定味方に參つて、忠戰を勵むべく候（べし）とぞ申送られける。宮大に悦ばせ給ひ、木寺相模を御使として、密に令旨を顯幸になし下さる。顯幸之を頂戴し、僧正になし下さるゝこと、法師の面目、何事か之に過ぎ候はん。此上は御味方仕りて、逆徒誅伐の謀を巡らすべく候。然れども楠、赤坂にて自害したりとも申す、又未だ生きてありとも申候。若正成遁れて、未だ御味方仕り候はゞ、顯幸勅諚に從ふこと叶ふまじく候とて、相模をば歸しけり。宮此事を難儀に思召し、正成が方に斯くと宣ひ遣はさる。正成承り、別當左樣に御返事申さんとは、豫て存じ設け候故、能き方便を案じ置きて候とて、御返事の次第を、委しく申送りけり。宮大に御感あり、赤松律師則祐、村上彦四郎義光を召し、正成は勇といひ謀才といひ、當世無雙とは雖、上古にもあるべからずと宣ひて、重ねて木寺相模を以て、矢尾が方へ仰せ遣はされければ、正成が存亡、其實を知召さゞる所なり。生きてあらんには、今まで音信せぬことはあるまじ。若し生きてあらんにも、此の如く吾に與せざらんには、何ぞ賞することあらん。只朝敵に等しからん。以後正成申入るゝとも、御許容あるべからずと仰遣はされければ、顯幸之を實（まこと）ぞと心得、御味方に屬し候はんと、御請をぞ申されける。斯くて廿三日を過ぎて、正成赤坂へ打つて出でたりと聞えしかば、別當大に驚き呆れ、

大塔宮の御方へ、正成未だ存へて、赤坂へ打つて出で候なり。御存候やと申送りければ、嘗て知らせ給はざる旨、御返事坐しけり。是に依つて別當も、赤坂の城軍の間、何方へも與せず、樣子を見合はせ居たりけり。斯る所に正成、赤坂を攻落して後、矢尾別當が方へ、格侍者とて、辯舌勝れたる僧を以ていひ送られけるは、勅諚默止し難きに依つて、身不肖ながら、此一大事を思立ちて候。此度貴坊の訴によつて、宮より御不審の端多く候。私の遺恨を以て、公事を忘れんは、忠義を知らざるにて候はずや。此上は、年來の遺恨を御許し候べし。父祖の恥を忘れて、貴坊へ降參仕候間、正成曾て不忠を存せざる由、宮の御方へ仰入れられ給はり候へ。偏に貴坊の御祕計を頼み存ずるなり。其とても叶ふまじきにて候はゞ、私の宿敵といひ、朝敵征伐の障にて候へば、朝敵に同じかるべく候上は、正成馳向つて、運を天に任せ候はんといひ送られければ、別當驚き、我れ官軍に屬し、一度六波羅の惡しみを蒙る上は、京方にもなり難し。又正成多勢になりぬれば、私に戰ふとも、利を得ん事叶ひ難し。さばかり良將の正成、愚僧に降を乞はるゝ事、法師の面目、且は後代迄の譽なりと思ひければ、格侍者に向ひ、一天の君の御味方仕る上は、爭か私の遺恨を存じ候べき。宮の御前は、愚僧宜しく申なし候はん。今よりは殿の御手に屬し、忠戰を盡し候べしと返事して、手勢百五十騎を引率し、赤坂に馳來つて、正成に屬しける。御代一統の後、此事を包まず顯幸に語りければ、別當聞きて、扨は安くも計略に落し入れられて候ぞや。さり乍ら佛神に非ずんば、爭か此謀に乘らで候べきと感じける。

矢尾顯幸楠正成に屬す

正成出張住吉・天王寺〔附〕京勢發向の事

さる程に矢尾・湯淺、正成に屬しければ、和泉・河內兩國の勢、戰はざるに靡き、攻めざるに降つて、悉く歸伏しければ、同五月十七日、住吉天王寺に打つて出で、渡邊橋より南に陣を取りて、京勢遲しとぞ待たれける。正成此時、家子郎從等を集めて語らはれけるは、夫れ良將は、敵國を攻むる時、先づ其利害を勘へて、敵の備へて待つと待たざるとに拘はらず、其利あらん所へ向ふなり。今京勢六萬餘騎と聞ゆれば、此勢を以て、渡邊・大和路・飯盛より向ひなば、戰難儀ならんか。然れ共六波羅愚將なれ

楠正成北條高時對陣

ば、我備へたる所にぞ向はんずらん。盲人の、人の呼聲に付きて來るが如くなれば、盲將とは名付けたり。敵押寄せなば、味方は鳥雲に陣を取り、數度駈惱ましたらんに、などか川へ追はめざらん。斯くしたらんには、敵の後陣、如何に多勢なりとも、川を濟すことを得ず。數日向ひ暮らすべし。然らば兵糧盡き衆和せずして、士卒大將を恨むべし。其時謀を以て招かば、味方に屬する者、多からんずるぞと宣ひけり。若又味方利を失ひなば、籠城して戰はんとて、金剛山の麓千破劍に堅城を構へらる。其上忍びの者五十人、京都に附置かれければ、六波羅の軍議、一として聞えずといふ事なし。斯る所に六波羅の討手として、隅田次郎左衞門尉・高橋又四郎、其外四十八箇所の簗、畿內近國の勢を合せて七千餘騎、同廿日帝都を立ちて、神崎・尼崎・杜松に陣を取る。正成此由を聞き、敵によつて轉化すとは是なりとて、僅三百餘騎を、渡邊の橋より南に控へさせ、殘る勢を、住吉天王寺に引入れてぞ待たれける。

天王寺合戰の事

天王寺合戰

翌れば廿一日、六波羅の五千餘騎、渡邊の橋に打寄む。正成士卒に下知せられけるは、敵兵川を濟しなば、味方三百餘騎の見せ勢は、一戰にも及ばず敗北せよ。敵は氣に乘つて追懸けんずるぞ。敵天王寺の西を半過ぎん時、和田孫三郎は、一千餘騎を二手に分け、天王寺より駈出でよ。敵は思ひ寄るまじければ、周章騷ぎて漂はん。其時、住吉に置きたる六百餘騎、古宇都の東より、魚鱗になつて、敵の眞中へ切入れよと下知をなし、又渡邊の橋より、十町此方へ軍使を馳せ、敵川を渡さば、早く住吉に引來れといひ遣はし、吾身は住吉と天王寺との半途に在つて、住吉に軍使を馳することと止む時なし。自ら渡邊に馬を飛ばして、敵の形勢を勘へ、又住吉に馳せ歸つて、味方に術をいひ含め、天王寺に馳向つて士卒を下知し、此の如く馳廻り〳〵、衆を勇めて下知せられける程に、其日馬を乘替へらるゝこと、七疋にぞ及びける。高橋又四郎、川より向ふを屹と見て、敵は小勢ぞ。駈散らせよと、橋を下つて濟しければ、畿內の集り勢之を見て、人に先を越さんとし、或は橋を渡し、又は河瀨を濟しけり。隅田は之に同せず、又楠が如何なる術をかなしぬらん。暫く敵の働を見てこそ

天王寺合戰

正成、六波羅勢を破る

とて制しけれども、士卒耳にも聞入れず、我先にと進みければ、隅田も心ならず、そぞろに河を濟しける。三百餘騎の見せ勢共、一戰にも及ばず北げ行くを、追懸けて討取れと、天王寺の北の在家まで、山川も崩るゝ計り、喚き叫んで攻込んだり。時に和田正遠、一千餘騎を二つに分け、一手は天王寺の東より、敵を左にして駈出づれば、一手は西門の石の華表より打つて出る。六波羅勢之に驚き、辟易して見ゆる所に、住吉の松原より、六百餘騎の逞兵等、馬の頭を雁行に連ね、旗の手を龍粧に進め、靜々と懸りければ、京勢なじかは悚ふべき。一同に咄と崩れ立ち、親を捨て、主討たるゝをも顧みず、ひた崩れに逃げ行くを、隅田次郎左衞門尉大に怒つて、斯くあらんと思ひ、制しつるものを。貳し返せと下知しけれども、一返しも返さず、人馬共に橋より押落されて、水に溺れ死する者數を知らず。七千餘騎の兵共、殘少に討ちなされ、這々京都に逃歸る。見苦しかりし分野なり。

南朝太平記巻第四終

楠正成宇都宮公綱對戰

南朝太平記　巻第五

宇都宮公綱攝津發向の事

さる程に隅田高橋大に敗亡して逃げ歸りしかば、六波羅に重ねて合戰の評定あつて、宇都宮治部大輔公綱を差向けらる。其頃關西にては楠、坂東にては宇都宮とて、天下に武名を稱せらるゝ程の勇將なれば、此度合戰利なくんば、生きて再び歸らじと討死を思定め、七百餘騎を引率し、七月十九日の午の刻に、六波羅を立ちて、其夜は柱松に陣をぞ取つたりける。夜半に及んで、和田孫三郎正遠、正成の本陣に來つて申しけるは、宇都宮既に柱松に着きて候が、士卒七百には過ぎ候はじ。今夜逆寄にして、追拂ひ候はゞやと申しければ、正成暫く頭を傾け、和田殿の宣ふ所も、利に當つて候へども、上策とはいひ難し。其故は、公綱六波羅に勇を進められ、必死と思

ひ定め、炎の如くに、勇氣頭に上りたる士卒なれば、小敵と雖、侮り難し。今夜押寄せ戰はゞ、勝利は得べく候へ共、味方多く討たるべし。然れば先づ味方は陣を引退き、敵に一利を付けて後、八方の山々に篝を焼き、夜毎に敵を劫しなば、氣短なる坂東勢、疲れて引返さんは治定なり。是れ戰はずして勝つといふ術にて候と宣へば、橋本八郎正員進み出で、誠に深き御謀にては候へ共、世の聞えも、餘りに穩便に覺え候といへば、正成聞き給ひ、以前の多勢にも打勝ちながら、今小敵なれども、宇都宮が勇に怖れ、正成が引入りしなんど、武の道をも知らざる者は、幾萬人もいへ。曾て恥辱とするに足らず。今愚人のいふを恥ぢて合戰に及びなば、家子郎從多く討たれ、大損を取るべきなり。宇都宮一人朝敵ならんには、如何様にしても討取るべけれども、彼一人は、大海の一滴に同じ。多からぬ味方を討たせなば、後度の合戰しにくからん。夜明くれば敵押寄すべし。片時も早く引取れよとて、天王寺を立ちて、觀心寺にぞ引入れられける。翌拂曉に、宇都宮公綱七百餘騎にて押寄せしかども、敵一人もあらざれば、頓て天王寺に入り替り、京都へ早馬を以て、楠を容易く追散ら

し候とぞ告げたりける。公綱素より小勢なれば、續いても攻入り難く、又一戰にも及ばずして、引返さんも無念なれば、何のする業もなく、徒に日をぞ送りける。此時宇都宮、六波羅に援兵を乞ひ、其勢を併せて、河内に攻入るべきことぞかし。又六波羅も、軍勢を差下すべき思慮もなく、京勢六萬餘騎を遊軍となして、只うか〳〵として、喜されけるこそ轉情(うたて)けれ。

正成計略附板持奇妙忍の事

斯くて四五日を經て、正成思慮を巡らし、矢尾別當顯幸を始め、和泉・河内の者共、其外宇多内郡の野伏共を語らひて、三千餘人、秋篠や外山の里・生駒が嶽・志貴・津浦を始め、浦々山々に篝を多く焼續けさせ、足輕三百餘人に、野伏千餘人を差加へ、攻むべき體に見せければ、すは敵は打出でたるぞと、芳賀兵衛尉・同次郎四郎を始め、紀清兩黨の者共、一戰せんと打出でけれども、十方に分れて逃げて行く。敵は案内者ぞ。取卷れなとて引退く。敵引かば追懸くる。又取つて返し戰へば、思ひも寄らざる方

より一同に鬨を作り、或は俄に狼煙を揚げ、遠矢を射懸け打ち、樣々と惱ましければ、宇都宮が勢怺へずして、天王寺に引取りけり。斯の如く夜毎に敵を劫して後、夜半に及んで、志貴・早瀨・宇佐美、一千餘騎にて天王寺の東に押寄せ、鬨を咄と上げしかども、宇都宮、勢を一人も出さゞれば、其儘勢を引取りけり。其上正成、板持といふ名譽の忍びの者を、差遣はされければ、公綱が持ちたる扇の、遠山に月を出せる繪を畫きたるを、盜み取りて歸りけり。正成大に悅び、頓て宇都宮が陣に使を遣し、某が手の者共、御陣所に推參仕り、御所持の扇を盜み取りて候へば、返進仕り候とてぞ送りける。公綱大に驚き、我れ殘暑堪へ難く、手を離さず持ちし扇なり。如何樣奇妙の忍び共の、多くありと覺ゆるぞとて、愈用心堅固にぞ守らせける。其夜板持、又宇都宮が陣に忍び入り、六波羅の越後守仲時の方より來りたる狀を一通、盜み取りて來りしかば、正成又初めの如く、使を以て返されけり。さしも大剛の公綱身震して、いや〳〵此所に長居せば、命を捨つるのみならず、如何なる恥辱をか取らんずらん。敵の退きたるを一面目にして、上洛せんと思ふは如何にと問はれければ、紀清兩黨の者共も、我々は此間、正成といふ古狐に化されて、心神疲れ果て候ぞや。少しも人心のある中に、御引取候へとて、同廿七日の寅の刻、公綱天王寺を立ちて上洛すれば、正成頓て天王寺に入り替らる。是に依つて近國の勢、我も〳〵と馳加はつて、勢强大になりにける。

宇都宮公綱退陣

天王寺未來記の事

正成猶も思慮し給ひけるは、衆の心和せずんば、大功を立つる事なし難からん。當時既に末世なりと雖、猶も佛神を尊む事甚しく、其奇瑞を實とする事は、さながら嬰兒の如くなり。吾密に聖德太子の未來記を披見して、細やか文を作り、忍びやかに祕して人に見せしめば、頓て世上に風聞せん。是大なる謀にして、且は諸人に、信を勸むる術（てだて）ならんと思はれければ、同八月四日天王寺に詣で、大般若經轉讀の布施として、白鞍置きたる馬一疋・白綾縅の鎧一領・白覆輪の太刀一振を引かれけり。其後當寺の一舍利大師に對面し、忍びやかに密談せられければ、舍利大師之に同じ、密

に寶藏に入りて、金軸の書一卷を持來れり。正成之を拜見し、豫て企みし如く、思ふまゝに書き調へ、寶藏を出でて後、吾上宮太子の一皇治天の安危を勘へ給ひ、持統天皇より以來、末世代々の治亂を記されたる未來記を拜見せしに、不思議の識文一段ありとて、和田孫三郎正遠に、七日齋せさせて、密に之を拜せらる。其文に曰く、

當人王九十五代、天下一亂而主不レ安。此時東魚來呑二四海一。日沒二西天三百七十餘箇日一、西鳥食二東魚一。其後海內歸一。

正遠三拜して、悅ぶこと限なし。其時正成、和田に向ひ、熟識文を考ふるに、君既に神武帝より九十五代に當り給へり。天下一亂而主不レ安とあるは、將に當時のことなるべし。東魚來呑二四海一とは、是れ平氏の逆徒なり。日沒二西天三百七十餘箇日一とは、君、隱岐國に御遷幸ありしことならん。西鳥食二東魚一とは、如何樣關東を滅す人出來らん。然れば君明年の春は、隱岐の國より還幸あつて、再び位に卽かせ給ふべきこと、必定なりと宣へば、正遠大に悅び、恩地に齋すること五日にして、密に之を拜ましむ。恩地、又楠家の老臣七人に齋すること三日にして、拜ませしかば、皆悅の

涙を流して、末頼もしくぞ思ひける。諸人此識文を書きて、密に齋すること二日三日にして、拜ませければ、扨は權者の記し置かせ給ひし上は、疑ふべきにあらずとて、少々運を兩端に窺ひし者共も、皆楠に思ひ付きにけり。其上六波羅の越前守仲時を始め、北條家宗徒の人々も、之を傳へ聞ける輩は、心の頼みも盡き果て、何の思慮にも及ばず、當家の運命も、今は此迄なりとのみ思ひて、只忙然として居られけるとぞ聞えし。されば後醍醐天皇も、此の事を謀とは知召されざりければ、四海一統の後、天王寺へ勅命あつて、彼未來記を叡覽ありけるに、此文なかりしかば、諸卿扨は正成の謀にやと申さるゝ。是に依つて主上、正成を召され、御尋あり、正成謀の次第を、ありのまゝに勅答し給ひしかば、君叡感あつて、正成は、智仁勇の三德を兼ねたりと、敕諚ありけるぞ忝き。

東兵圍二赤坂城一附石上十郎次郎入道の事

さる程に大塔宮は、十津川を御出あつて、槇野の城に入らせ給ひけるが、此處も要

正成、金剛山に籠る

阿曾治時赤坂城を攻む

害の地ならねばとて、三千餘騎を從へられ、吉野山に楯籠らせ給ふ。楠兵衞尉正成は、赤坂の城に平野左金吾入道を籠置き、我身は紀伊と河内の境、金剛山に堅城を構へ、八百餘騎にて楯籠り給ひけり。此平野入道は、矢尾別當が甥なりしかども、顯幸と正成、異心あるべからずとの誓約に依つて、平野を正成の養子とし、和田孫三郎正遠か子滿仁王丸は、正成の甥にて、十一歳になりけるを、顯幸が弟子とせり。後に和田新發意賢秀といひし法師は、此滿仁王が事なりけり。斯る所に、相模入道の下知を受けて、諸國の勢十八萬餘騎上洛して、元弘三年正月晦日、三方に手を分つて、吉野・赤坂・金剛山、三の城へぞ向ひける。阿曾彈正少弼治時は、赤坂の城へ向はれける所に、同二月二日、人見入道恩阿・本間九郎資貞父子、拔駈して討死す。之を合戰の始めとして、晝夜息をも續がせず攻立つる。同九日、寄手の勢一萬三千餘騎、南より攻寄せて、切岸の下迄ぞ近付きける。此一方は、左右田にして平地なれば、攻むる便ありける故、安々と攻寄せて、士卒等既に塀を打破らんとしける所に、小田次郎左衞門尉といふ、小賢しき男進み出で、以前も此城にて、寄手の勢方便（たばか）られ、大に不覺を取りしなり。又例の釣塀なるを知らざるや。少し引退きて城を攻めよと、馬を乘廻して下知しければ、諸卒尤と同じて退かんとする程に、備騷ぎて見ゆる所を、城中より、矢前を揃へて散々に射る。寄手射白まされて、互に人を楯にせんと、背を屈めて色めく所を、城兵得たり賢しと城戸を開き、一同に切つて出で、霹靂碎けて太山をも劈くが如く、敵中に切つて入れば、なじかは以て耐るべき、崩れ立ちてぞ逃げ行きける。平野が勢は、僅三百餘騎なれば、長追をすべからずとて、頓て城へ引入りけり。寄手は之にも痛まず、同十四日まで、荒手を入替へ〳〵攻めたりけり。玆に寄手の中に、吉河八郎といふ者ありけるが、此城の體、三方は谷深うして道もなく、一方は平地にして、山遠く隔りぬ。何所に水あるべしとも覺えざるに、水の卓散（たくさん）なるは心得ずと、樣々思慮を巡らし、其邊を左右と巡りけるに、とある森陰の藁屋の内に、讀經の聲聞えければ、扨は僧のありけるにこそ。いしくも尋ね出したりと悅びて、庵の内へ入らんとするに。盜賊の用心と見えて、内より扉を閉ぢてけり。八郎立寄り扉を叩き、案内を乞ひしかば、法師立出で、扉を開きて内に請ず。

八郎内に入りて彼の法師に向ひ、某は播磨國の住人吉河八郎と申す者にて候が、阿曾霜臺が手に屬し、此城に向ひ候なり。合戰の習、十にして九つは討死を仕るべく候へば、能きに菩提を弔ひてたび候へ。若又一命恙なく候はゞ、現當二世の爲ともなり候はんとて、銀錢二百文と太刀一振と與へて後、樣々の物語をしけるが、さるにても敵城に水の多く候は、外よりも取り候にや。如何なる故にて候ぞ、御坊は知り給はずやと問ふ。法師聞きて、城の用水は盡くる事あるまじく候。其故は、南の山の奥、葦谷の瀧口より地の底に樋を伏せ、城中へ水を掛入れ候なり。其樋を堀切らせ給ひなば、平野は落城に及ぶべし。然らば功は萬人の上に立ちて、恩賞厚く蒙らせ給ふべし。愚僧は先年楠に攻滅されし越智八郎が郎等、石上十郎次郎と申す者にて候ひしが、越智滅亡の後、剃髪染衣の身となり、諸國をさまよひ歩き、近き頃より、此所に忍び住み候なり。主人越智事は、鎌倉殿を敵に受けて候へども、差當つての敵は、正成にて候へば、其恨なきにあらず。早く大功を立て給へと敎へければ、吉河大に悦び、暇を告げてぞ歸りける。

赤坂落城 附 平野入道以下被ㇾ誅事

斯くて吉河八郎は、大將治時の陣所に來り、當城には、南の山より用水を取り候なり。此事某謀を以て、尋ね聞きて候といふ。彈正少弼大に悦び、人夫を集め、城へ續きたる南の方の山の尾を、掘切らせて見られければ、葦谷の瀧口より十八町が間、二丈餘りの土の底に、石を疊みて樋を伏せ、眞木の瓦を覆ひたり。此樋を掘切りて後、日々火矢を射かけし程に、追手の櫓六つを燒落せり。城中には、口中を濕すべき一滴の水だになくて、既に十二日に及びければ、今は精力も盡き果てぬ。皆一同に切つて出で、討死せんとぞ議したりける。茲に寄手の勢の中に、澁谷十郎といふ者あり。平野が郎等一九彦九郎とは、智音なりける故、大將治時、是ぞ能き便なりと悦んで、澁谷を以て城中にいひ遣はされけるは、弓矢の道、今は是迄にて候。枉げて當方へ御出で候へ。御本領の上に新恩を申沙汰仕らん。此の事努々相違候はじと、詞を巧みにぞいひ送られける。十郎城中に入りて、一九に先づ此旨を語る。一九又右

赤坂城陥る

の次第を、大將平野入道に告げければ、入道忽ち義を忘れ、同十六日、士卒二百八十二人を從へ、城を開け、降人になつて出でけるを、長崎九郎左衞門尉請取りて、鎧太刀を奪ひ取り、高手小手に搦めて、六波羅へ引渡せしかば、案に相違してぞ見えたりける。爰に兵衞尉正成は、吾身金剛山に楯籠り、妻子幼稚の者共を、觀心寺に隠し置き、舍弟正氏・和田孫三郎正遠・恩地五郎・橋本六郎・志貴右衞門尉・渡邊五郎以下、一千餘騎を籠置きて、助勢とせられけるが、平野が降人に出でぬる由、觀心寺に聞えければ、楠正氏・和田正遠・恩地・志貴・渡邊等相集り、六波羅を助け置けば、吉野・千劔破兩城の軍勢共、籠城に苦しんで、降人に出でんことを思ふべし。如かじ謀を以て、彼等を誅せんにはとて、六波羅に聞者を入れ、平野は、正成の養子矢尾が甥にて、無二の官軍なれば、時を待ちて、本意を達せんと企つる由をいはせければ、越後守仲時、此謀に陷れられ、諸人の見懲にせよとて、平野を始め相從ふ輩、悉く六條河原にて首を刎ねられしかば、吉野・千劔破の城兵等傳へ聞き、愈義心金石の如くになりにけり。

金剛山の要害

正成被レ構二金剛山城一事

楠兵衞尉正成は、千劔破の城に籠り給ふ。此山は、金剛山と號して、大峯葛城の頂なり。金剛山の本堂より、坤の方へ十八町去つて、千劔破と號し、日本第一の城地にして、五德相應の名城なり。五德といつぱ、水を以て第一とす。此峯に祕水あり。其滴ること一日に三石六斗なり。城外より取る水は、敵、鴆毒を入るゝ怖あり。第二には、此山嶮岨にして、一夫爰に怒れば、萬卒も進むことを得ず。四方の谷深く切れて、峯つゞかず。第三には、麓は平地にして、岸嶮なり。上の岸平なれば、敵、城を掘るに便あり。又四町の內に山あるときは、敵、矢を飛ばすの怖あり。第四には、岸皆岩石なるを以て能とせり。敵登ること叶はざるか故なるべし。第五には、近邊の山深く、地ざかひがんたるを以て能とせり。是は敵の寄るに難儀にして、城兵の忍んで出入するに、便あるべければなり。峯岩石にあらざるぞ、五德の一缺けたり。然れども當城は、此外に一德あり。高きこと二町に過ぎず。餘りに高きは、軍勢の

出入難儀なり。されば此山の東の高さ百五十六間、南の方は百三十間、西の方は百二十五間、北の方は、高さは五十四間なり。扨こそ正成、此一徳を加へて、五徳相應の名城とは名付け給ひけり。正成此城の廣狹を計られけるに、乾より巽の方へ、其長さ百六十五間、城の根廻り九百四十餘間なり。先づ芝を四尺に築き、芝より下本の土より三尺を掘りて、間四尺を置きて、長さ二間の柱を立てたり。芝と土と都て七尺立てたれば、如何なることにも、崩るべからざるに、本土の下にても、貫を二筋通し、芝の間にも、又一筋の貫を通し、其上に五尺の塀をかけたれば、飛鳥ならでは、越ゆることを得べからざるに、猶も矢切を構へたり。塀の柱は廻二尺餘、又は一尺七八寸なり。二本の柱の間には、悉く六寸五分、又は五寸六分の矢狹間を、内八文字外八文字に切らせたり。是は岸に三尺五寸の人形を立てゝ、内より射よきやうに、高く低く切らせらる。坂を上る敵なれば、腰の屈むべければとて、三尺五寸の人形を射させられけり。矢狹間の上下に、四寸の貫を通し、貫二筋に、間二廻り八寸の小柱を立て、四五寸の木を、内外より塀を骨にかき、其間に小石を入れて、粘土を以て突込み、日に乾すこと十日にして、又内外より土を以て塗立て、内三尺の走り櫓高櫓等を、かき雙べたり。又城中の諸木も、松の外は、春若葉の頃、悉く取りて日に乾し、又は煎干鹽に漬けて、之を食物の便とす。木を伐る時は、太きを敵に抛る礫とし、枝の細きを薪とず。又水舟を二三百作り雙べ、役所の軒に續樋をかけ、一滴の雨をも殘さず入れ置きたり。米を磨ぎし水を捨てずして、士卒洗足の水となし、其をも捨てずして、馬にかひ湯洗ひの水となし、其をも猶すたらざる様にして、火矢を消す水とせり。

千劔破城壁書の事

斯の如く拵へたる上に、塀の内一丈五尺を去り、樹木を植ゑて林とす。其内に室家土藏あり。塀より外の樹木を切り、其餘りも、悉く根を掘りたり。是は敵登るに、便あらせじが爲なりけり。米粟麥以下三萬餘石・大豆二千餘石・鹽五百石、又方三間に深さ二間の藏箱あり。之を地に掘入れて、稻の穗を積み滿てり。其外油・干魚・海藻

は、其數を知らず。長さ五間横四間の土藏に、矢の根を入れ、其上鐵三萬斤・鍛冶六人を籠めて、晝夜之を打たせたり。正成此の如く、思ふまゝに用意して、義心鐵石の如くなる逞兵八百六十四人を選み、引勝つてぞ楯籠り給ひける。又正成壁書を出して、士卒を誡めらる。其文に曰く、

一、遊びも度々重なりぬれば、樂にあらず。好むべからず。
一、珍膳も、毎日向へは甘からず。
一、甲冑は、さねの固きを良しとす。好むべからず。
一、よせいの馬何かせん。長三寸計にて、遠行に疲れず、足の強きをよしとす。
一、太刀は骨のきるゝをよしとす。作を好むべからず。
一、高直の着物を求めず。
一、人の惡をいはず、善をも便なきにいはず。
一、世の善惡を、あからさまにいはず。
一、吾にある有を報ぜんといふ事なかれ。爲國報人惡常人可禁なり。
一、唯今日無事ならんことを思へ。

已上

去年正成、湯淺を攻落されし後、和泉・河内兩國の敵の所領、悉く取集め、家子郎從に與へて、殘る所は皆千劒破に取入れらる。其時、胡麻の油はいふに足らず。一切の菓を取らせて、油とせらる。正成の居給ひし家の下には、深さ二間に穴を掘り、炭を埋むること三千餘駄に及びぬ。唐土・天竺より寄せ來りたらんは知らず、日本の勢は、數を盡して攻むるとも、落つべき城とは見えざりけり。

名越時有陣ニ水邊ニ事

斯る所に、同閏二月十八日、二階堂出羽入道道蘊、吉野の城を攻落せしかば、今は吉野・赤坂の東國勢、悉く馳せ加はつて、千劒破の寄手二十萬騎に餘りけり。東國勢は、城の小きを見侮り、切岸の下迄潛き連れて攻め近付く。城中には豫てより、大木の三四尺廻りなるを、四五尺に筒切りて、塀裏に多く積置かせ、又轉び易き石の、

一人して一つ二つ持つ程なるを、山の如くに積み置きたるを、士卒等取つて投かけ投かけ漂ふ所を、散々に射させければ、手負死人五六百人に及びける。是より左右なく攻めんともせざりけるが、爰に木坂九郎といふ者あり。主君金澤右馬助貞將に向ひ、先日赤坂を攻落し候ひしは、吉河の水を留めて候ひし故、忽に落城して、阿曾殿の高名となり候はずや。是を以て案じ候に、是程の小城に、水の澤山に候は、如何様東の山の麓に流れたる溪水を、毎夜汲むかと覺え候といへば、貞將大に悦び、汝がいふ所理に當れりとて、大將大佛陸奥守貞直・同武藏左近將監宣政・名越遠江入道元心に對面し、此由を宣へば、皆此儀尤なりとて、名越越前守時有を差向けらる。時有三千餘騎を引率し、水邊に陣を取り、城より出下るべき道々をつまり〳〵に、逆茂木を引きて待懸けしかども、素より城中に此水を汲まざれば、曾て人音もせざりけり。正成此事を聞き給ひ、名越が陣に忍びを入れ、毎日敵の様子を窺はせ、備の虚實、名越が術、殘る所もなくぞ尋ね聞かれける。其上觀心寺より、毎日十人十四五人づつ、忍びの者共を敵陣に差遣す。此者共、或は餅・酒・草鞋等を賣る商人になり、又は猿引

なんどになりて、陣中に紛れ居て、敵方の取沙汰を城中に知らせけり。敵は十重二十重に圍みたれども、毎夜城中に狀を通ず。其狀は皆白紙なりといへども、水に漬しぬれば、文字明に浮べるなり。又鍋の墨を付けて見るにも、文字顯はれぬ。是はたうごまの油を以て書くとかや。其頃迄は世人曾て知らざりければ、正成大に之を祕せられけり。去る二月廿三日の黎明に、忍びの者一人、正成の返狀を持ち、觀心寺に歸らんと、城中より出でけるを、大佛左近將監の番兵見咎めて、何者なるぞと捕へければ、吉野より參りたる商人にて候といふ。何條さる事あるべき。密狀やあるに、搜せよとて、赤裸にしたりけるに、懷中に白紙の折りたるが、十枚計ありしより外、何と見咎むべき物もなし。番兵等、扨は實の商人にやといふ所に、同じく觀心寺より出でたる忍び一人走り來り、こは如何に、汝は何の過をなしつるぞやと問へば、さればとよ、道に踏迷ひ、城の方へ行きし程に、爰は敵の方なりと思ひ、足早に逃げ歸りしに、此の如く見咎めせられ、難儀に及ぶなりといふ。彼の忍び聞いて、是は吉野より近き頃參りたる、油醬なんど賣る者にて、某が友にて候が、和泉より參

りたる商人に僞り方便られて、昨日錢四百文盜まれて候故、彼の男奴を尋ね出さんが爲め、此者と二人、方々と尋ね廻り候なり。汝は又何故に、其樣子をいはざるや。陣中に馴れざる故、臆したりなどいへば、さればとよ、餘り怖ろしさに、兎角をも得いはざるなりといふ。番兵等、扨は實の商人ぞや、疾々歸るべしとて歸しけり。大將左近此由を聞き、諸國より來り集れる商人共を、其の如くに惱したらんには、賣人等怖れて、悉く已が在所に逃げ歸るべし。然らば陣中詰りて、諸勢難儀に及ばんか、以來卒爾の擧動をすべからずと、陣中を觸れさせられければ、是より忍びの者共、彌思ふ儘に陣中を經巡りける故に、名越時有の備の疎なるをも、日々城中へぞ告げ知らせける。

南朝太平記卷第五終

南朝太平記　巻第六

千劔破城兵夜討附時有敗北の事

さる程に兵衞尉正成は、敵の虛實を、思ふまゝに窺ひ澄して、敵陣を見やり給へば、諸陣よりは、十町又は十四五町も隔てたり。城よりは五町有餘と見課せて後、一夜討して、敵に目を覺させんとて、逞兵を勝り出し、相印相詞を定めらる。一番は湯淺六郎百餘騎、水邊に陣せし敵に、一文字に切つて入れ。二番は北辻玄蕃允宗以、是も百餘騎にて、名越が陣の、周章騷がん所へ切入れよ。三番は楠三郎正富、是も百餘騎にて、後陣を堅く守るべしと下知せらる。豫て物馴れたる勇士十六人、敵陣に入れ置かる。是は名越周章出合へば、組せんが爲なりけり。時に北辻申しけるは、名越は遊興をのみ事として、夜毎に夜半過ぐる迄酒宴をして遊び候由、傳へ承りて候と

名越時有敗走

いふ。然らば卯の一天、宜しからんとぞ定められける。殘る城兵五百餘騎も、面々の持口を堅めさせ、若敵寄せ來らば、防ぐべしと下知せらる。斯くて卯の刻になりしかば、大將正成も、三十餘人を相從へ、正富が陣より、二町ばかり後陣に控へ、我れ能き時分を勘へ、引太皷を擊つべきなり。一番の太皷に、湯淺・北辻引取れよ。味方如何に勝誇りたりとも、打捨てゝ引取るべし。其故は、時有を討ち取りたりとも、敵はさまで痛むまじ。味方一人にても討たれなば、大なる損なるべし。二番の太皷に、正富引け。縱ひ一番の太皷に、先の二軍引かずとも、正富は引取れよ。先の二軍太皷を用ひずして引かずんば、捨てゝ正富を引かせ、正成も引かんずるぞ。二軍を助けんとて、城を敵に取られなば、末代迄の恥辱といひ、君に對して大なる不忠なり。三番太皷は、正成が引取ると知らせん爲の太皷ぞと、軍令堅く下知せられけり。名越が勢、每夜氣を詰めて守りけるが、後には次第に懈りて、敵此水は汲まざりけりとて、打解（うちとけ）にぞ居たりける。斯る所に又、篠目の霞隱れより押寄せて、河邊の者共二十餘人切散らし、直に名越が陣に切り入つて、東西南北に駈立つる。越前守時有、辛き

命を助かり、這々本の陣所に引取らる。數萬の寄手助け合せんとて、騷動する體を見て、正成一番太皷を擊つて、早二軍を引取り給ふ。二の太皷に付きて、正富も引入れば、漸々數萬の敵兵。名越が陣に馳付きたれども、喧嘩果ての千切木なりとぞ見えたりける。斯くして後正成、三番太皷を打たせ、靜々と引入らるれば、名越が陣に集りし諸軍勢、此太皷に驚き、すは楠こそ寄すれとて、前後を忘れ途を失ひ、八方にぞ逃行きける。斯くて湯淺以下三人の者共は、敵の捨てたる旗幕など取り持たせ、大將の前に出合ひ、戰の次第を述ぶる。正成其戰功を感じ、恩賞夫々にぞ行はれける。時に北辻進み出で、敵の旗幕を追手に立て、笑ひ候はゞやといへば、正成打笑ひ、我もさ思へども、敵若し誤つて、名越殿こそ城へ切り入り給ひたりなんどといはゞ、數萬の敵、之を誠ぞと思ひ、競ひ懸つて攻め來らば、城危かるべければ、暫く敵の靜まるを待つべしとぞ宣ひける。其翌日櫓に三木傘の旗と幕とを引きて、昨日名越殿より賜つて候と、同音に咄と笑ふ。名越一家の人々大に怒つて、五千餘人切岸の下迄攻付けて、城中へ切入らんと揉む所を、切岸の上に横たへ置きたる大木共

を、一度に切つて落しければ、壓に打たれて死する者、千四五百人に及べり。是に駭き、士卒騒ぎ立つ所を、城中より差詰め引詰め射ける程に、五千餘人の勢過半討たれ、殘りし者共も、朱になつてぞ引取りける。

足利治部大輔高氏術の事

斯くて正成、又一つの謀を巡らし、芥を以て人形を二三十作らせ、甲冑を着せ兵具を持たせ、深夜に及んで麓に立置き、逼兵百餘人を交へて、黎明の比、関を咄と作らせける。數萬の寄手之を見て、我一にと攻合はす。城兵は、矢軍少々する體にもてなし、次第々々に城中へ引いて入る。寄手人形を敵ぞと思ひ相集る所を、大石四五十一同に轉ばせしかば、敵數百人討たれて逃退く。寄手も大に呆れて、是より合戦を止めにけり。爰に足利治部大輔高氏も、此城の寄手に向ひ居給ひけるが、大將大佛陸奥守貞直へ向ひ、數萬の大軍取圍みながら、うか〳〵として爭が日を送り候べき。謀を以て一夜討仕らんと宣へば、貞直も此儀尤に候ぞと、同ぜられける。足利殿の一族、細川彌八郎清氏（後相模守の乳母は、正成の家子早瀬吉太が伯母なりければ、是ぞよき便なれとて、乳母の夫桂平六を以て、御邊の役所より手引せられば、夜討にして當城を攻落すべし。然るに於ては、恩賞として、四千貫の所領を申行ふべし。此事僞あるべからずとて、黄金五百両をぞ送られける。然れども正成良將たるにより、番兵をして城を堅固に相守らせ、十二時に鐘を撞かせ、廻り番六十人、十人を一與として、毎夜六七度づつ之を廻らせて、怠を禁められる。櫓々よりは、松明又は車松明を、夜毎に五度六度かけ出して、忍び入れじと檢むる。正成も、勇士十人相從へ、自ら夜毎二三度づつ巡らるゝ。松明二つ、雨の夜は三つ、其内一つは樹の内を通し、何れも二十間計り先に立ちて、面々の陣に、御用心候へと呼はつてぞ通りける。其上敵より隱謀を勸め、賞を與へんとの判を出し、又は引出物を送るべし。然らば正成、敵の一倍を與ふべしと、豫て下知し給ひければ、早瀬頓て正成の前に來り、敵よりの術を、ありのまゝに申し、陸奥守の證判引出物等を出して、正成の前に置きければ、正成大に感じ、即座に千両の金を與へ、四千貫は唱への悪ければ、五千貫を宛

行はんとぞ約せられける。足利殿は、斯る事とは知り給はず、既に夜討の日限を定め、人質を出さるべしといひ送られければ、早瀬、正成の下知を受けて、密に返事しけるは、當城には、一族も候はず。妻子も南都に候へば、質に進ずべき者なく候。此上は一紙の告文を進じ申候はんといふ。高氏之に同じ、告文せさせて後、細川九郎義實を大將として、二百餘人をぞ差遣はされける。義實此勢を從へ、さしも嶮しき山を攀登つて、切岸の下に着き、早瀬が相圖を待ち居たり。城兵等、敵を思ふ儘に僞引寄せ、吉太を搦めて、生捕りたる體に見せ、遙々と難所を是迄御出こそ、御大儀に候へ。籠城の儀にて候へば、何とて持成すべき物もなく候。堅くとも之を聞召されず候へといふ儘に、大石を拋掛け〳〵漂ふ所を、松明を投出し〳〵、其光に精兵の手垂共、差詰め引詰め射たりければ、細川九郎を始め殘少なに討たれ、其餘の者共は、我先にと逃行きけり。是より諸將會議して、只食攻にすべしとて、合戰を止められける。

遠州入道元心・同時家鬪諍附遊女新羅井梯の事

斯くて寄手の諸將、軍を止めて守り居られければ、永陣に屈し、徒然に堪へ兼ねて江口・神崎の傾城共を集め、思ひ〳〵に遊興をぞせられける。爰に名越兵庫介時家は、神崎の新羅といふ遊君に相馴れ、わりなく思ひ通はれける所に、叔父遠江守篤時入道元心、彼女を戀慕ひ、己が方に取隱して、閨の友とぞなしにける。甥の時家、此事を泄れ聞きて大に憤り、小田常陸前司時知は、無二の朋友なりしかば、小田に此事を語る。時知聞きて、某に任せられよ。能きに計らふべしとて、入道の陣に行向ひ、此事甚だ以て宜しからず。世の聞く所も如何に候と諫めしかども、左樣の事思ひも寄らず候。如何樣讒人の申す所か、人違かとこそ存じ候と陳ぜられければ、時知も力なくして立歸りぬ。兵庫介大に怒り、如何にもして見顯はして、本意を達せんとぞ企まれける。斯くとも知らで遠江守入道、或時遊女・道世者共を集め、酒宴を催し居られけるに、兵庫介不意に出來り、入道の傍に居寄つてありけるを見て、礒と睨み、何ぞ入道、斯くまで無禮を行ひ給ふべき。郎等共、あの新羅を引立てよと怒らるれば、さ承り候と、若者共三人、新羅を取つて引立てんとす。入道之を見て、兵

庫介を抜打に切らるれば、時家も透さず、入道の左の肩より右の助まで切離さる。入道の手の者共、頓て兵庫介を切倒す。両人の郎等共之を見て、或は切合ひ或は刺違へて、片時が程に二百餘人、枕を雙べて死したりけり。城兵等之を見て、朝敵に與し、十善の君に敵し奉る惡人共が、自滅するを見よやとて、同音に咄と笑ふ。寄手の諸勢は頭を掻きて、名越殿の仕出されたる事よとぞ呟きける。斯る所に同じき四月四日、鎌倉の飛脚到來し、城をも攻めず、徒に日を送ること、甚だ以て然るべからずと下知せらる。是に依つて諸將會合し、軍の術を評定ありけるが、城の前なる堀に、橋を渡して打入るべしとて、京都より番匠を五百餘人呼下し、八九寸計の材木にて、長さ十丈、横は二丈五尺に、梯を作らせたり。是は大繩を二三千筋附けて、車を以て卷立て、向ふの岸へ倒し懸けんが爲なりけり。忍びの者共之を見て、城中に告げければ、城兵等も大に怖れ、如何せんとぞ案じける。正成又思慮を巡らし、いや〳〵敵の術（てだて）恐るゝに足らず。梯を掟木にして射んに、あだ矢は更にあるべからずとて、敵より橋を渡すらんと思しき所に、櫓を多く構へさせ、竹を以て水彈を七千餘作らせらる。又大壺を多く土に掘り据ゑさせ、油を湛へたること二百三十餘石、又長さ一尺廻り一尺五六寸の松明を、二萬餘用意せられけり。是は寄手橋を渡しなば、水彈を以て油を彈きかけ、其上松明を投げ出して、燒落さんが爲なりけり。斯くて梯出來しかば、數萬の寄手、車木を以て卷立てさせ、既に向へ倒し懸けんとせし所に、城兵一同に關を作り、散々に射立てければ、元來臆病なる人夫共、わつというて逃げける程に、是に氣を奪はれて、すは例の楠よと、何の分ちもなく、崩れ立ちてぞ逃行きける。梯は倒れぬ。又壓に打たれて死せし者も多かりける。寄手材木を敵に取られじと、小町民部丞を、一千餘騎にて、番兵として附置きける所に、小町大に怖れ、我れ楠が爲に討たれんは必定なりと、身を震はして悲みけるが、次の夜暗きに紛れて、行方も知らず落失せけり。

正成計略（附）佐介時氏・陸奥貞森以下被レ討事

正成又思慮を巡らされけるは、寄手の中にも、金澤右馬助貞將は、小賢き男にて、動も

すれば間者を入れ、味方を討たんと相企むなる。我れ上手を討つて、今より術を止めさすべしとて、覩心寺にありける舎弟正氏の方に、密計をいひ送らる。是に依つて正氏、大事の計略なればとて、日井小藤太・木澤平次兩人を、敵陣にぞ遣されける。日井・木澤は、吉野より來りたる商人の體にもてなし、此彼と徘徊しけるが、貞將の家子岩城右京進が許に行き、様々物語りしけるが、越中の一方の將、恩地左近太郎が方へ參りて、味方になし參らせてんやといふ。岩城能き便なりとて、二人を具して、貞將の前に出で、斯くと申しければ、貞將大に悦び、汝等は如何にしてか、城中へは入るべきと問ひ給ふ。二人聞きて、能き方便（てだて）の候。大塔宮の令旨を、一通作りて給はり候へ。城中に入りて正成に令旨を渡し、扨恩地が役所に忍び行き、味方に語らひ候はんといふ。金澤殿之を感じ、汝等は、鄉民には才智勝れたる者共なりとて、令旨を似せて一通認め、術を委しくいひ含めてぞ遣されける。兩人は、城中に忍び入りけるが、翌日立歸つて、金澤殿に申しけるは、恩地御返事を申候は、仰の如く日本を敵に受け、此一城に楯籠り候へば、落城とこそ存じ候へ。然れ共主人正成を捨て

難く候。此一跡を御絶し候はんには、爭か仰に從ひ候べき。正成計を御誅伐あつて、幼子多門丸を御立てあらんに於ては、正成は一代、家は末代にて候へば、仰に從ひ候はんと申候といふ。其上正成よりの、令旨の御請をも取來れり。貞將諸將と胥議し給ひけるが、正成一人討て出しなば、多門丸は本領安堵相違あらじと、誓書をぞ出されける。二人は之を帶し、又似せ令旨を賜はつて城中に入り、先づ恩地が役所に來る。左近太郎二人を相具し、正成の前に出で、披きて之を見るに、六ヶ條の好みの內、極めて難儀なるは人質なり。是は足利尊氏、以前の不覺に懲りて、堅く支へ申さるゝ所なり。茲に長谷平九郎は、大剛の者にて、力世に超えたれば、並々の者四五十人は、脣ともせまじければとて、長谷を招きて、此事を宣へば、御承り候。君の爲に命を捨てんこと、士の面目にて候なり。然れども如何なる敵中にても候へ、大方は切抜け歸り候はんといひければ、長谷を、恩地が舍弟左近三郎と申者にて候とて、人質にぞ出しける。右馬助貞將、謀相調りぬと大に悦び、金劔三振・黃金三百兩・白銀千兩を、恩地が方へぞ送られける。恩地相圖を定め、多勢は御無用にて候。

正成計略附佐介時氏・陸奥貞森以下被ㇾ討事

正成に腹を切らせんことは、御勢を頼む迄もあるまじく候。宗徒の人々、少々大將の後の方の櫓の下へ御付け候へとて、案内者二人、相言葉を定めてぞ遣はしける。金澤右馬助、さらば勢を差向くべしとて、佐介次郎時氏・陸奥式部丞貞森・嫡子小式部貞武・南澤右衞門次郎・藤村與一以下、宗徒の一族八人、究竟の若者三十二人をぞ遣されける。此勢、其夜の寅の刻、案内者を先に立て、城邊に近付きたり。時に恩地が勢直先に進み、切り入る體に見せければ、四十人の者共、劣らじと込入りたり。時に賊兵共、洪水の漲り來るが如く、一同に喚き叫んで切つて懸る。恩地が勢之を見て、咄と逃ぐる眞似をして、寄手の勢四十人を、眞中に取包み、一人も殘さず悉く討取りけり。其後城兵等、太皷を擊ち鐘を鳴らし、鬨の聲を揚けしかば、數萬の寄手之を見て、扨こそ城は落ちたるぞ。攻入つて高名せよと、谷とも崖ともいはさず、曳や曳やと攻登る。城兵等思ふ圖に敵を近付けて、大木大石を投懸くれば、さながら天狗礫の如く、見る內に二百餘人打倒され、蜘蛛の子を散らすが如く、一同に崩れ行くを、散々に射させければ、四方の谷に人雪崩を築かせけり。長谷平九郎・木澤平

次・日井小藤太三人は、此騷動に紛れ、敵陣を遁れ出で、觀心寺へぞ落行きける。

宇都宮千劍破發向同城攻の事

大塔宮尊雲親王（護良と改め給ふ）は、吉野の城を落ちさせ給ひ、觀心寺に忍びて坐しけるが、吉野十津川宇多內郡の野伏共、宮の令旨を奉じて、七千餘人蟻の如くに集り、蜂の如くに起つて、此彼の谷岸に群り居て、金剛山の寄手の往來を差塞ぐ。是より諸國の軍勢共、兵糧運送の道を留められ、人馬共に疲れ苦しみ、百騎二百騎打連れ〳〵落ちて行く。和田孫三郎正遠、五百餘騎にて觀心寺より打つて出で、糧道を差塞ぎ、落人を討留めしかば、日毎に討たるゝ者數を知らず。僅に死を遁れたる者共も、赤裸になつて落行きける。兩六波羅大に呆れ、兎角楠を退治すべき人は、宇都宮殿ならではあるべからず。馳向つて凶徒を誅伐し給ふべしと申されれば、公綱畏つて、仰承り候。某罷向ひ、身命を捨てゝ忠戰を勵み候べしとて、手勢千二百餘騎にて、千劍破の城に馳せ向ひ、大佛陸奥守貞直・同武藏左近將監宣政以下の諸將と評議して、其

より城を七重八疊に取圍ませ、夜毎に関を作らせ、前なる兵には鋤鍬を持たせ、堀を深く掘らせ、土を高く築上げさせ、宇都宮以下の諸將、其蔭に詰寄せたり。城兵等之を見て、車松明を投懸け〳〵防ぎけれども、悉く堀へ落入りて、寄手死傷する者一人もなかりけり。既に黎明も明行けば、朝霧の晴間より、敵陣を見やりたるに、件の堀を前に當て、土手を高く築上げて、宇都宮治郎大輔公綱・千葉大介貞胤・伊具右近大夫將監有政・土岐伯耆入道存孝・結城九郎左衛門尉親光以下の宗徒の大名、家々の紋付きたる旗を、嵐に飜らせ、軍勢沓の子を打ちたる如く、寸地も餘さず詰寄せたり。斯くして又夜に入れば、十間二十間繰寄せて堀を掘る程に、十餘日に及びしかば、切岸の下まで攻寄せて、鹿垣一重引破る。城兵も爰を詮と防ぎしかば、此時又寄手多く討たれけり。紀清両黨の者共、切岸を上らんと揉みけれども、元來正成能く構へ置かれたる城なれば、寄手終に登り得ず。公綱思慮を巡らし、只掘崩せよと下知して、岸の下よりぞ掘らせける。寄手左右なう詰寄せて、城近く陣取りしかば、忍びを出すべき便もなく、掘崩さんとする術を、城中會て知らざりけり。氣を得たる寄手なれば、難なく三日が間に、追手の櫓一つ掘崩す。諸勢すは攻込めよといふ程こそあれ、曳々聲を出して攻登る。されども豫て植ゑ置きたる樹木、嚴しく生茂りたれは、寄手も攻入り難く、猶ためらふ所を、大石を抛げ矢を飛し、破られじと防ぐ程に、寄手若干討たれにけり。其より正成思慮を巡らし、穴を掘りて湯を沸し、之を敵にかけ、大石を落せしかば、是が爲に或は死し、或は瘡を蒙る者、其數多く出來たりし故、寄手の勢も、今は十計盡きて、すべき術なかりけり。

楠正氏・和田正遠夜討、千劔破寄手の事

觀心寺に忍び居たりし女童等、此事を傳へ聞き、君の一大事、此時に限りたり。我我も命生きて何かせんと、泣悲みければ、楠正氏、和田・恩地以下を集め、舍兄正成の滅び給はんを、我々斯くてあり乍ら、何ぞ餘所に詠むべき。いざや一夜討して、敵を遠く追拂はんと、目刺すも知らぬ暗き夜の、而も風雨烈しく、大木をも吹折る計なるに、物馴れたる兵十人廿人一與として、寄手の諸陣へ忍び入れ、又五十人六十人

楠正氏和田正遠等夜討

づつ、此彼に伏せ置き、又二百餘騎は、敵陣に切り入るべしと下知せらる。和田孫三郎は八百人にて、大佛が陣に忍び居て、敵、関の聲に驚き、周章せん時に、火をかくべしと約をなし、我身は百五十騎にて、寄手の勢の、夜詰に行く眞似をして、公綱が陣の後に控へたり。斯る所に二百餘騎の兵共、寄手の陣へ、喚と叫んで切つて入る。諸陣驚き騒ぎ、こは何事ぞといふ所に、和田正遠、大將貞直の陣に火をかけ、関を作つて切つて廻る。豫て與々を分けて入れ置きたる軍勢共、味方の誰こそ敵になり し、何某こそ返忠すれと、聲々に喚はつて、此に顯はれ彼に隠れ、十分に駈亂す。此時楠正成の勢百五十騎、公綱の陣へ、無二無三に切入りて、縦横無碍に駈立つれば、紀清兩黨の者共、一戰にも及ばず、八方に分れて落行きたり。其餘の諸陣も、親討たれ子討たるゝをも顧みず。多くは赤裸にて逃げて行く。正氏敵を追立て、直に城門に馳來らる。番の者共大に悦び、城戸を開かんとするを、正氏怒つて、何故此節大將の下知をも受けず、門を開かんとはするぞ。軍令を知らざるや。大將に申すべし。寄手強く攻め候故、斯く夜討を仕候とて、郎等一人城中に入れ、我身は頓て馳返さ

る。正成之を聞き給ひ、戰半なるに、正氏が爰に來れる愚さよ。思ふ圖の合戰は、えせまじきぞと宣ひけるが、案の如く與をなして、分れ居たる軍勢共、大將引き給ひたりと心得て、我も〳〵と引いて行く。正遠は便を一人城中に遣して、合戰のやうを告げ、正氏の見えざるは、城へぞ入り給ひつらん。正氏には似合はざる擧動かなとて、山陰にて待ち居たれば、正氏五十騎計にて馳來る。此勢と一手になり、豫て相圖せし所にて、後れし勢を待揃へ、打連れてぞ引取りける。其夜陣を退かざりしは、長崎四郎左衞門尉高貞・城太宰大貳入道・三浦若狹五郎氏明・千葉大介貞胤・二階堂出羽入道・小山判官秀朝が勢計なり。其餘の輩は、三里四里逃れしかば、翌日白晝に歸るもあり、又夜に入りて歸るもあり、見苦しかりし分野なり。

兩六波羅最後井千劔破寄手敗北の事

爰に播磨國の住人赤松入道圓心は、大塔宮の令旨を賜はつて、苦縄の城より打つて出で、所々の合戰に打勝ちて、摩耶山に楯籠り、遠江に威を震ふ。四國の土肥得能

後醍醐天皇隠岐を忍出させらるる

北條時益仲時戰死

も、宮方になつて、長門の探題上野守時直を討散らし、六千餘騎にて讃州宇多津今張に舟を汰へ、京都に攻上らんと企てける。斯る所に閏二月廿四日、先帝隱岐國を忍び出でさせ給ひ、伯耆國に潛幸ある。村上又太郎長高、名和と號す。後敕命に依り長高を長年と改む、敕命に從つて次男孫三郎基長後三郎左衞門尉と號す。卅歳にて出家す。三男乙童丸後四郎左衞門尉と號す。建武三年に逝去す・長高の舍弟鬼五郎助高後に左衞門尉と號す・從弟小太郎信貞以下を引率し、先帝を船上山に遷幸なし奉り、此所に楯籠り、勢强大になりにけり。然る所に赤松入道、酒部瀨川の合戰に打勝ちて、直に帝都に攻上る。此時諸方に力を合すべしと敕命を蒙つて、千種頭中將忠顯、船上より打つて上り、赤松に力を合さるゝ。六波羅毎度戰に利を失ひ、關東に加勢を請はれしかば、名越尾張守高家・足利治部大輔高氏を差上さるゝ所に、名越尾張守は、久我畷にて討死し、足利治部大輔高氏は、忽官軍に屬し、六波羅を攻められしかば、兩六波羅遂に戰負け、東を指して落行かれけるが、左近將監時益は、四宮河原にて、流失に中つて死し給ひぬ。越後守仲時も、五月九日、一揆等に取籠められ、江州番場の宿にて、主從卅二人、自害してぞ失せにける。正成の京都に附置かれたる忍

宇都宮公綱退軍

の者共、翌十日の卯の刻、千劔破に走り歸り、兩六波羅沒落の由を告げければ、城中の士卒、悦び勇む事限なし。正成、追手の櫓に人を上せ、六波羅殿こそ、御慰のため東國へ御向ひ候へ。知召されて候にやとぞ呼ばらせられける。寄手は未だ曾て知らざりければ、又古狐が、如何なる巧をかなしつらんと、陣中ひそめき合ふ所に、其日の午の刻、六波羅攻落されし由聞えしかば、上下周章騷ぎて、東西に走り南北に駈り廻るとぞ見えし。未の刻に及んで、寄手悉く陣を拂ひ、南都の方へと落ちて行く。近國の野伏者、谷に充ち峯に群り、螺を吹き枯木を叩いて喚き叫ぶ。正成之を見給ひ、敵を追討に討取れよ。落人を討止めんと、野伏共峯々に充滿(みちく)たり。彼者共に高名あらば、恩賞を行ふべしと、大將の下知なるぞと觸聞かせ、百人づつに先をせさせ、三百人を三つに分け、後陣に備へて追懸けよ。敵の返し易からん所にては、遠矢に射よ。切所に懸らば追懸け追詰め、討取れよ。若敵大返しに返さば、城に駈入るべからず。向の深山へ引入れよとて出されけり。士卒等、大將の下知の如く野伏共を語らひ、短兵急に追懸けしかば、大軍の引立ちたる癖として、一返しも返さず、主

討たれ子死するをも顧みず、我先にと落行く程に、討たるゝ者數を知らず。或は深谷に落入り　又は深田に轉び入りて、心ならず生捕らるゝもあり。さしもの多勢、殘り少なに討なされ、其夜の子刻計り、漸々南都にぞ落着きける。正成、恩地以下の諸臣を集め、敵に一人も、合戰の道を知りたる將はなかりしぞや。正成此の如く引取らんには、今日は手強く城を攻めて、明日曉天より峯々を取つて勢を備へ、士卒三十餘一組にして、谷の方より引取らせ、其餘は次第を守らず峠へ登せ、峯より峯を持ちて引取らんに、城兵も野伏も、爭が追ふことを得べけんや。敵の難所は味方も難所なり。去年より爰に在陣しぬれば、案内は知り透しつらん。然れば城より打出でなば、願ふ所の幸にてこそあるべきに、富めるに誇つて、次第に武の道の疎くなりぬる淺猿しさよと宣へば、湯淺彦六進み出で、峠より彼方をば、如何にして引き候はん。承りたく候といふ。正成聞き給ひ、峠より彼方に小き峯いくらもあり。然れば先備の、峠に登りたる勢を以て、小峯々々を堅めさせ、跡に引きたる軍勢を、峠に備を立てさせて、其内より三千餘を峠に殘し、先の如くに引取らん。然らば峠を下らん所を討取らんと、城の軍勢打出でんか、其時は、先の峯に備へし勢と、三千餘騎を亂さず引きける勢と、一つになつて戰はんに、などか勝利を得ざらんと、謀巧みに宣ひければ、恩地以下の者共、皆智慮の程をぞ感じける。

南朝太平記巻第六終

南朝太平記　卷第七

新田義貞被攻滅北條附寶戒寺建立の事

爰に上野國の住人新田小三郎義貞は、鎌倉の催促に從つて、千劒破の寄手に相加はつて居給ひけるが、密に大塔宮の令旨を蒙り、虛病を構へて本國に引歸し、同心の一族を相語らひ、元弘三年五月八日、笠掛野へ打つて出でらるれば、越後の一族里見・鳥山・田中・大井田・羽川以下馳來る。其外甲斐・信濃の源氏五千餘騎、小幡の庄にて馳着きたり。翌日武藏國に打越え給へば、紀五郎左衞門、足利殿の息千壽王殿を大將として、一百餘騎にて馳せ加はる。其外近國の勢相集り、山野一片に陣を取る。相模入道大に驚き、金澤武藏守貞將・櫻田治部大輔貞國・長崎次郎高重以下を差向けらる。櫻田・長崎以下、小手差原・久米川兩所の合戰に、悉く打負けて、分倍を指して引

退く。高時重ねて舍弟四郎左近大夫入道惠性に、各勢を相添へ差向けらる。敗軍の勢、荒手の加はりしに力を得て、聊勝利を得ると雖、終に合戰利なうして、鎌倉に引退く。新田方は、鎌倉勢馳せ加はつて、龍の雲を得、虎の山に凭る勢をなし、巨福呂坂・假粧坂・極樂等の切通より、三手に分れて攻寄せらる。鎌倉にも三方に分れて、拒ぎ戰ふと雖、天運既に盡きけるにや、所々の合戰に悉く利を失ふ。官軍は氣に乘つて、稻瀨川の邊に火をかけて、濱面より鎌倉に亂れ入る。折節魔風頻に吹きて、鎌倉中殘る所なく焦土となり、相模入道の屋形にも火かゝりければ、東南の方、東勝寺葛西が谷に引籠り給ひ、同廿二日、高時を始め一族二百八十三人、悉く自害して、平氏九代の繁榮一時に滅亡す。哀れなりし事共なり。其後足利尊氏、後醍醐天皇に奏し、高時の亡魂を弔はんが爲、彼舊宅に東勝寺を移して、北條一家の骸骨を改め葬り、寶戒寺を建立し、圓觀僧正（五代國師と號す）を開山とせらる。第二世慈源和尙（普川國師と號す）申せしは、尊氏の次男にして坐しけり。卽高時の靈を德宗權現と崇め、社を建てゝ、當寺の鎭守とぞなし給ひける。

後醍醐天皇御還幸

主上御還幸花洛并定平・正成南都發向の事

兩六波羅既に敗亡の旨、京都の早馬、船上に下着しければ、頓て御還幸あるべしとて、同じき晦日、攝州兵庫に着かせ給ふ所に、翌日新田義貞の早馬參着して、北條一家滅亡の由を奏せられければ、主上叡感斜ならず、其翌六月二日、兵庫を御立あつて、瑤輿を廻らさるゝ程に、同じき六日、二條富小路の内裏に還幸あつて、重ねて寶祚を踐ませ給ひけるこそ目出たけれ。さる程に千劔破の城に向ひ居たりし關東勢は、漸々南都に落集り、鎌倉へ引返さんと擬しけるが、道々は、皆官軍に屬すべければ、長途如何あらんと思ひ煩ひ居る所に、鎌倉滅亡の由聞えしかば、今は何國へか落行くべき。殘り留まる勢五萬餘騎、心を一にして帝都へ攻入り、潔く討死して、名を後代に殘さんとぞ催しける。此事叡聞に達しければ、頓て楠正成を召され、此事如何あらんと敕諚ある。正成謹んで承り、北條が殘黨、恐るゝに足らずと申ながら、窮鼠却て猫を咬み、鬪雀人を辭せざるの類にてぞ候はん。今迄は何とぞ身を全うして、關東へ落下らんと存候べきか。然れども北條既に滅亡の上は、迚も遁れぬ所と存じ、死を一途に思ひ定め候べし。中にも宇都宮、勇猛の者にて候へば、最後の合戰と、存じ詰めて戰ひ候はんには、容易に誅伐を加へ難く候はん。士卒を多く討たせ候ては、勝ちても良將とは申難く候。戰はずして勝つと申す事の候へば、謀を以て御退治候ひて、宜しかるべく候と申す。合戰の道は、勇士に勝ることあるまじければ、汝計らひ申すべしとなり。正成承り、然らば追手の大將を一人、差向けられ候べし。正成は搦手より罷向ひ、官軍の威を顯はし候べし。其後追手の大將より、先づ宇都宮が方へ綸旨をなし下され、汝が勇敢豫て叡聞に達す。早く官軍に降るべし。本領安堵相違あるべからずと敕諚あつて、彼を召され候はゞ、降參仕り候べし。然れども何事も、正成に負けじと存ずる者にて候へば、其取扱ひ候はゞ、必定我を立てて、敕諚に應ずまじきにて候。其餘も降參するに於ては、罪科を恩免あり。忠あらば、賞祿を宛行はるべしと、御下知を下され候べし。宇都宮降參を仕りなば、諸勢力を落し、十方に逃散り候はんに、況してや御免の敕諚候上は、我も〳〵と降人に出

で候べし。能く計り課せ候はゝ、大佛・二階堂以下の諸將をも、悉く生捕り候はんと
敕答申さるゝ。主上叡感淺からず、正成が術に勝ることあるべからずとて、中院中
將定平を追手の大將として、五萬餘騎にて、大和路より差向けられ、正成は搦手の
大將として、河内路より差向けさせ給ひけり。斯る所に同じき七日、菊地小貳大友
が方より早馬到來して、九州の探題英時を退治仕候と奏聞す。今四海一同に符を合
せたるが如く、逆徒悉く滅亡して、王化に復しぬるこそ目出たけれ。

正成謀略の事

さる程に追手搦手の勢七萬餘騎、南都に攻寄する所に、宇都宮・紀清兩黨、七百餘騎
にて般若寺の一の木戸を固めたりけるを、定平様々賺して、綸旨を遣はし招かれけ
れば、公綱、一族郎等共を集め、此事如何あらんと評議せらる。時に芳賀清太郎資
邦、諸人の意見をも待たず、進み出でて申しけるは、此度所々の合戰悉く利を失ひ、
鎌倉殿滅亡に及び給ひしこと、是皆不義の行跡あつて、天命に逆ひしに依つてなり。

然れども君臣たるの道を盡し、一命を戰場に抛ち、忠功の譽を天下に顯はし給ひぬ
れば、武恩は、形の如く報じ盡し給へり。然る上は敕命に從ひ、官軍に屬せさせ給ひ、
御子孫の後榮を御議り候へと、理を正していひければ、公綱此議に同じ、頓て降人
にぞ出でたりける。然れども猶も殘る處の東國勢三千餘騎、東大寺に楯籠り、一支
へせんと待ちたる體、行末の事はいさ知らず、先づ勇々しくこそ見えたりける。斯
る所に楠正成、追手の大將羽林定平の陣所に行き、東大寺に楯籠る所の三千餘騎は、
必死の敵にて候へば、攻むるに容易からずして、士卒多く損じ候はん。勝は良將の
好む所にて候へば、今一術仕り候はんとてぞ歸られける。されば二階堂出羽入道道
蘊は、古、正成と鎌倉にて學友の交り深かりければ、美酒三箇佳肴七種を送り、正成
討手に罷向ひしこと、私の遺恨更になし。敕命は辭し難きに依つて、罷向ひ候へど
も、古の好忘れ難く候へば、寸志を述ぶるにて候。鎌倉も、新田義貞に攻破られ、相
模入道殿を始め、御一門悉く御生害候なり。君にも入道は、朝憲を蔑如にし、萬民を
惱亂せさせしに依つて、天誅を巡らせし所なり。彼が一族に於て、何の罪かあると、

忝くも敕諚ありし由、禪林寺の頭中將殿忠顯又千種を稱すの物語にて候ひし。又洞院殿も、敕諚にてあるぞ。討手に罷向ひたりとて、荒く沙汰すべからずと、御内意を承り候程に、合戰も斯く相延べ候なり。鎌倉殿既に滅亡の上は、誰が爲にか忠戰を勵まれ候べき。早く中院殿へ仰入れられ、官軍に屬せられ候へかし。大佛右馬助殿高眞と號す太平記に貞直に作るは非なり。大佛貞直は鎌倉にて戰死す。大なる誤なり近日降人として出でらるべき旨、事既に定まり候とて、一封の狀を添へてぞ送られける。出羽入道、此上は官軍に降り、妻子所從等が一命を助けばやと思ひ、降人に罷出づべき旨、自筆の返狀を遣はしける。正成大に悅び、又大佛右馬助高直の方へも、右の通をいひ遣し、二階堂殿も、斯の如く降人に出でらるべきに極り候とて、入道の返狀を遣されける。高直之を見給ひ、渡りに舟を得たる心地して、是も降人に出づべき由、返狀をぞ送られける。正成、扨は謀なりぬと悅んで、阿曾彈正小弼時治以下の諸將へも、又右の通りをいひ遣はし、高直・道蘊の返簡を送りければ、時治以下の人々大に驚き、急ぎ會合して見らるれば、紛れべくもなく道蘊・高直の自筆なり。實にも此程兩人、共に病氣と稱して、評定の場へも出合はれざるは、斯る企ある故なり。我々とても忠義致せり盡せり。今は誰人の爲にか身を亡すべき。倡や降人に出でて、一所懸命の地をも賜はらんは如何にといへば、臆病神の付きたる人々、皆此議に同じけり。其より城入郎、兩人の方に行向ひ、忍びやかに語りければ、兩人も大に悅び、諸將打寄り評議一決して、道蘊・時治の方より、羽林定平の方へ降參の由を乞ふ。正成微妙の謀を以て、斯くまで方便り課せたる術の程こそ恐しけれ。

南都逆徒降參井本間・澁谷謀逆附降人等誅伐の事

斯くて東大寺にある所の東國勢、降人に出づべきに事極まりしかば、大佛右馬助高直・阿曾彈正小弼時治按するに、太平記に、阿曾時治は、鎌倉に於て、高時と同じく自害すと記し、又此時降人に出づる諸將の内に載せたり。是大に前後齟齬せる者なり。此時三人の時治あり。鎌倉にて自殺せるは、武藏左近少監時治にして、今降人に出づるは、阿曾時治なり。諸抄を按ずるに、或は時治に作り、或は時治に作る。佐介安藝守時俊・左京亮貞俊以下、北條家宗徒の一族十三人、並に長崎四郎左衞門尉高貞・二階堂出羽入道道蘊・長井壹岐四郎・長沼太郎を始めとして、北條恩顧の輩五十四人、皆般若寺にて出家を遂

北條の遺臣悉く降る

げ、律僧の形になり、三衣一鉢の姿に窶れ、しほ〳〵として降人に出でたりけるが、定平之を請取り、悉く高手小手に禁め、傳馬に縛り付けて、白晝に京都に歸陣せらる。見苦しかりし事共なり。頓て法名を改めて、諸人の大名に分預けらる。出羽入道計りは、廣學の才ある由、其聞えありければ、一所懸命の地をぞ賜はりける。然るに翌年建武元年三月、本間澁谷の者共、高時の一族を取立てゝ大將とし、謀叛を起して、鎌倉へ押寄する。時に澁川刑部大輔義季、極樂寺の前に馳せ向つて、數刻挑み戰ふ所に、凶徒等悉く討負けて、十方に敗走せり。此の事京都に注進せしかば、去年降參せし千劒破の寄手共、如何なる隱謀をや企つらんとて、七月九日、大佛右馬助高直・阿曾彈正小弼時治・佐介安藝守時俊・長崎・長井以下宗徒の輩十五人、忽びやかに阿彌陀峯にて誅せられぬ。二階堂も亦、如何なる不思議をか企つらんとて、其後是も誅せられけり。此君重祚の後、諸事の政をも、未だ捗々しく行はれざるに、刑罰を專とせられんこと、仁政にあらずなんどと、京童は私語くも多かりけり。然れども此君、重祚なされしにあらず。其故は、伯州船上より還幸の時、先づ東寺へ入らせ給ひ、二條關白道平公を召され、此度內裏へ入らせ給ふこと、重祚などにてあるべけれども、神靈を御身に添へられ、隱岐・伯耆へも還幸ありたれば、只遠き行幸の還御の式にてあるべけれと、定められたれば、更に重祚ありしにてなかりしなり。其頃左大臣道平公の關白を止められ、氏長者になされ、右大臣經平公と、萬機の政を補佐せらる。是は偏に延喜の佳例を追はせ給ひしとぞ聞えし。

諸國逆徒蜂起 幷 顯寶僧正叛逆の事

爰に大塔宮護良親王は、和州志貴に御座ありけるが、六月十七日に志貴を御立あつて、同じき廿三日御入洛あり。頓て左近大夫入道惠性の一跡を進ぜらる。高時の德宗領分を、內裏の供御所料と定め、大佛陸奧守以下平氏一族の所領、關東權勢の輩の采地をば、准后を始め、御寵愛の宮女・郢曲・妓女・伎藝の者共、又は官僧などに、一跡二跡を合せて賜はりしかば、軍勢の恩賞に行はるべき地はなかりけり。是に依つて諸士恨み歎き、國費え民苦む所に、翌年建武元年の春より、大內裏造營の御沙汰あつ

て、彌天下貧國となれり。斯る所に筑紫には、前亡の餘類規矩兵庫助時秋・同掃頭助高政・絲田左近大夫將監貞義、殘黨等を集めて、帆柱の城に楯籠る。伊豫國には、赤橋駿河守宗時が一子駿河太郎重時、立烏帽子峯に城廓を構へ、邊境を侵し掠む。時に大佛陸奥守貞直の家子に、大佛藤太光正といふ者、未だ身を全うして隱れ居しが、時既に至れりと悅んで、佐々目顯寶僧正とて、高時の一族の南都に居られけるを大將に仰ぎて、樣々計略を巡らしける。顯寶頓て還俗して、相模左衞門時光と改名し、便宜の味方を語らひければ、紀州槇野の庄司・和州の筒井淨春・寒江民部丞貞忠・芳野禪師坊清秀を始め、是に與する者十三人、關東の殘黨相集つて、和州邊栗に簇を擧ぐる所に、隣國の勢相加はつて、一萬八千餘騎にぞ及びける。正成は其頃は、在京して居られけるが、此事を聞き、二條左府道平公の方に參り、朝敵の殘黨等、所々に蜂起仕候へば、又由々しき御大事にて候べし。然れば和州の朝敵に於ては、某罷向つて退治仕り候はんと申さるれば、左府、如何樣奏聞を經てこそと宣ひながら、兎角して日數を送られける所に、相模左衞門時光、和州邊栗より打つて出で、河内の飯盛山に取登り、近邊を亂暴し、大和・河内の兩國に威を震ひけり。

正成被レ遣二恩地一滿二一飯盛一事

さる程に天下靜謐の爲、竹內慈嚴僧正に敕命あつて、南殿に壇を構へ、國家安鎭の法を行はせ給ふ。此時武家の輩、四門の警固を奉る。楠も其役人に相定められる。正成承り、此度の御所の役人は、餘人に仰付け候へかし。朝敵近國に城を築き、武威を振ひ候なる。幸に正成存知の國にて候へば、罷下つて退治仕度候。某とても祈の役人、正成に仰付けられ候上は、和州の逆徒誅伐のこと、然るべき仁に仰付けられ候へかしと申されしかども、近日大法を行はるゝの上は、御祈過ぎての後、早々發向仕るべしと仰下されしかば、正成も、是非なくして止みにけり。是に依つて正成思慮を巡らされ、長臣恩地左近太郎を以て、飯盛へいひ送られけるは、此度兵を集め萬民を惱さるゝ段、甚逆義の至りなりとは申し乍ら、鎌倉殿既に滅亡し給ひぬれば、忠貞を忘れ給はずして、厚恩を報ぜられんが爲に、御旗を上げらるゝの條、神妙

に存じ候なり。定めて討手には、正成罷向ひ候はんずれば、合戰は天運に任せて、一時に決し候はん。然るに兵糧に事を寄せ、民を苦めらるゝこと心得難く候。民には何の咎の候や。只穩便の御沙汰あつて然るべく候。何にても相應の御用に於ては、正成承り候べしとて、兵糧米百石・樽五十荷・肴十種をぞ送られける。其上我郎等共の相知りたる者共には、皆酒肴小袖なんどをぞ送られける。逆徒之を見て、又例の背の脫けたる古狸が、如何なる珍らしき謀をか仕出すらん。正成と旋風とには、遇はざるこそよけれ。使者の男奴が鼻を劓げよ。首を刎ねて獄門に梟けんものをなんぞと罵りけれども、大將時光を始め、槇野庄司・岩田源次郎以下の宗徒の輩、いや此正成は、謀略に於ては神の如くなれども、仁義の勇士にして、賢人の譽あり。其上彼は民を憐むこと、親の子を思ふが如し。僞をいふ男にあらず。察するに正成、一度公家に賴まれて金剛に楯籠り、莫大の軍忠を盡しぬれども、さまで恩賞の沙汰もなければ、定めて君を恨み奉るにてぞあるらんと、又返札を送れり。扨こそ正成の分國をば、敢て侵すことなかりけり。

正成和州發向附時光對二面恩地一井田氣多和の事

斯くて鳳闕の祕法遂に行はれしかば、畿內の逆徒の討手として、正成敕命を奉り、逞兵五百餘騎を引率し、河內の國に發向せられけるが、謀は、子房をも欺く程の良將なれば、恩地左近太郎滿一を使にて、此度正成敕命を奉り、討手に罷向ひ候なり。然れども咎なき民を苦めんこと、歎かはしく候なり。願はくは降を乞うて、京都へ御出候へかし。御所領の地に於ては、正成命に替へても、申請けて進じ候はん。先非を悔えて、敕命に從はれんに、何の憚か候べき。過つて改めざるを、過とは申候へ。能々御思慮候べしとて、小袖二十領・良劒一振送られけり。時光、恩地に對面し、楠殿の御懇志の段、返々も祝着の至りに候。然れども某事は、既に僧正迄經登りて、專ら衆生の濟度をこそ、心にかけて存ずべき身の、古の俗になり返り、三衣を脫ぎて堅甲に變へ、念珠を大地に拋つて、劒戟を手に提ぐ。是れ少しも名聞利慾の爲に候はず。相模入道殿の厚恩をも報じ、先祖北條代々の靈魂を安んせんが爲に、生

きながら大魔王となつて、國民を惱亂す。然る上は楠殿に對して、私の遺恨なしといへども、勝敗を天に任せて、一戰の中に決し候べしと、返事してぞ返しける。滿一は此使の往返の內、小高き前に走りて、城中の陣屋を算ふるに、三千餘もやあるらんと覺えたれば、勢の程は、一萬二三千もあるらんと積りけり。斯くて恩地は飯盛の城を出で、卅町計りも歸りける所に、向より田氣多和次郎兵衞尉、飯盛の城に歸らんとて來りけるが、恩地とは古より相知りたる中なりければ、珍らしや恩地殿と詞をかくる。其時互に馬より下りて、古今の物語しけるが、扨も城中の御勢の、思ひしよりは多く候。某は三萬餘と積りて候といふ。田氣多和悅べる氣色にて、さん候、軍勢四萬餘騎とこそ承り候へ。楠殿、明日にもあれ押寄せ給ひなば、天地も反覆する計の大合戰ありぬべしと存候。恩地殿には御存じ候はずや。九州には規矩兵庫助時秋・同掃頭助高政・絲田左近大夫將監貞義、近國の味方を相語らふに、弓削左兵衞尉清常・宗藤三盛芳・片岩金吾淨古・山鹿筑前守政貞・原源吾・惟任一郎以下、無二の武家方五萬餘騎、筑前の國山鹿葦屋より打つて出で、帆柱山に楯籠り、九州を攻從

へ、都へ上らんと相催し候なり。加之伊豫國には、赤橋太郎重時、立烏帽子峯に取登り、既に多勢になりし故、數百艘の兵船を揃へ、是も上洛せんと相企み候なる。然らば天下、武家の掌握に落つることもや候らん。若恩地殿も、武家へ降らんと思召さば、某如何樣とも取持ち候はんといひければ、恩地、品に依りて降人に出で候はん。其時は、兵衞殿の御祕計を賴み存ずるなりと、半時計りが程、物語りしてぞ別れける。

正成邊栗發向の事

斯くて恩地左近太郎滿一は千劍破に歸り、右の次第を委しく語り、さるにても田氣多和は、敵方にては一方の將にて候へ共、心の淺き男にて候。敵は一萬五千餘と積りし乍ら、三萬餘もやあるらんと申せしに、田氣多和、某が一言に乘せられ候ひて、四萬五千餘騎ありと申候。さばかり勢を見損ずべきや。一萬餘の勢を、三萬餘もやと申しつるを誠ぞと思ひ、悅べる色の候は、愚なる故にて候なり。然れば田氣多和が大

正成、邊栗城に向ふ

將にて向ひ候はんずる所へ押懸けて、一術仕り候はゞ、勝利立所に候はん。其上城の構、無下に淺間にして、陣の取りやう疎なれば、忍びを入るゝにも、又易く覺え候とぞ申しける。其後正成、古市九郎を招き、邊栗の城の有樣を問ひ給へば、さん候、邊栗は、高安四郎三郎・十市太郎兩人相守り候が、軍勢五千餘もや候らんとて、城中の樣子、委細にぞ語りける。正成は、昨日千劍破に着かれけるが、此由を聞き、其夜戌の刻に及んで、諸勢に觸れ知らしめ、子の上刻に打立たる。先陣は舍弟正氏にて、諸卒、正氏の旗の赴くに從ふべしと下知せらる。正氏其勢八百餘騎、中軍は正成六百餘騎、後陣は和田正遠八百餘騎、都合其勢二千三百餘騎とぞ聞えし。然る所に志貴・恩地以下馳來り、何故に斯く小勢にては向はせ給ふらんといふに、御邊達を始め、矢尾別當以下の宗徒に、正成が手勢を加へて、六千餘騎はあるべければ、跡に於ては心安しとて打立ち給ふ。此は四月廿九日、善惡も知らぬ暗き夜なれば、案內者十人づつ三軍に分ち置き、二人は先に進み、三人の道の曲れる難所にて、立留つて勢を通す。其餘の五人は、前後を馳巡つて士卒を下知す。相印は赤布を八寸に切つて、

鎧の綿噛につけ、誰といはゞ、勇むと答へよと相詞を定め、一備に等一本づつ用意させ、道の分れて知れざる所にて、士卒の通りたる方に立置くべしと下知せらる。是は後れたる勢に、道を知らせんが爲なりけり。其上跡に下りたる勢の、若も行くべき道の知れずんば、人馬の足跡を指南にせよ。其も兩方の道に足跡ありて、何れをそれとも知れざるもあらん。古き足跡は土堅まれり、新しき足跡は土柔なり。今宵は雨降りぬれば、路邊の草葉を嘗めて見よ。士卒の通りたる路には、人馬の蹴上掛りたるあるべし。是も雙方の道の草葉に蹴上あらば、何れとも知れ難からん。古き蹴上は葉にひつくべし。今の蹴上は露に浮べり。是を以て知るべし。又深谷深野にては、太刀を鞘ながら擧げて、一町計兩方へ行き見るべし。蜘蛛の糸の懸りたる方は、あらぬ道ぞと心得べしと、細々と下知をなし、態と松明を燈させずして、其夜の寅の下刻、邊栗にぞ着しける。

邊栗合戰附落城の事

正成、邊栗城を陷る

斯くて楠正氏は、郎等の中忍びに馴れたる者共を、百餘人勝り出し、木子兵太氏鎭に相添へて、敵城にぞ遣はしける。敵の要害淺間なれば、百餘人の者共、安々と忍び入る。大將正氏は、先陣より六町を退きて備へ、其より二町を退きて、後陣の正遠備へたり。正成諸卒に下知して、松明を三把宛持たせ、輕卒八十餘人、和田が陣より後の山へ差遣さる。此者共、後の山々峯々に登つて、茂りたる木陰より、松明を一同にぱつと燈す。其光一尺に輝きて、宛も白晝の如くなり。時に大將の本陣より、太鼓を打出す。之を聞きて先陣の勢、一聲喚と鬨を作り、喚き叫んで攻懸る。城中には思寄なきことなれば、こは何事ぞや。楠は未だ都にありと聞きつるものをとて、太刀よ物具よと騒く程に、松明に火を燈す隙もなく、目刺すも知らぬ闇夜に、士卒等東西へと走り廻る程に、或は鑓長刀を倒につきて、己れが足を突通すもあり。又は傍輩と行當り踏倒されて、摑合ひ敵き合ふもあり。何と分けたる方もなく、只周章ふためく所に、正氏の八百餘騎、一同に乘入りたり。城中に入置かれたる百餘人の忍びの者共、此彼に火をかけて、五騎十騎づつ、走り巡つて切り通れば、すは城中に返忠の者こそあれと、狼狽へ廻る所を、追懸け追詰め討取りけり。城兵今は過半討たれ、我先きに落行くを、正成、先後の備を亂して追はしめ、城をば田原・勝田等に守らせ、我身は、右の方なる峯に登つて備へらる。追擊の軍勢共も、豫て下知せしが如く、一里計にして引返し、陣を堅うし備へたり。斯る所へ豫て正成の下知に依つて、家嫡多門丸、生年八歳なりけるを大將にて、其勢三千餘騎、寅の刻に千劒破を立ち、六里の道を押して、辰の上刻、邊栗に着き、先陣は志貴右衞門尉・橋本小辨六百餘騎、中軍は多聞丸一千餘騎、後軍は牲川・西川六百餘騎にて、段々にて馳せ來る。此多聞丸は、後帶刀正行とて、父に劣らざる良將なり。扨こそ未だ八歳なりと雖、鎧一縮して、馬上にて來られければ、正成出向ひ大に悦び、多聞丸の手を取つて、いしくも早く來れるものかな。鎧つきの能さよ。馬に乘振の能さよ。子ながらも、天晴君の御用に立つべき人ぞや。豫て此勢に、後より來れと言付けしことは、敵多勢なれば、若今日歸り來つて、城を攻返さんとすることもあらんか。始の勢は終夜遠路を越え、而も戰ひ疲れたる勢なれば、戰ひ危しと思ひて、斯くは計りしなりとて、悦の

涙を流し給ひける。其日は、人馬の足を休められける所に、國中の勢馳せ集つて、一萬餘騎に及びければ、翌日其勢を從へ、方々に押寄するに、何國にか落行きけん、敵一人もなかりしかば、所々の城々に勢を殘し置きて、河州も亦心元なしとて、千劔破へぞ歸陣し給ひける。

南朝太平記卷第七終

南朝太平記　巻第八

正成、飯盛城を攻む

飯盛合戰の事

さる程に楠正成は、建武元年五月朔日、千劔破に歸陣し給ふ所に、又飯盛の逆徒等、三荷・新床に打出でて引入れたり。正成此告を聞き、翌二日千劔破を打立ち、六千餘騎を率し、飯盛に馳向はる。先陣既に久寶寺に着けば、正成は、佰々部の城に入り給ふ。其時一の術を巡らし、和田正遠・志貴右衞門・楢原三郎・石澤十郎以下三千餘騎を、飯盛の城邊に伏せ置き、我身は逞兵三千餘騎にて、敎興寺に備へ、野伏五六千人にて、陣を取る體をぞ見せたりける。是は城將時光、敵は小勢なりと思ひ、陣を取敷かせじと打出んか、其時正成城中に攻入りて、一戰に城を取らんとの巧なり。案の如

く城守左衞門尉時光、寄手の松明を見て、早楠は寄せたるぞ。陣を取敷かぬ先に、打散らせよと下知しけるを、筒井淨春法師進み出で、敵夜中に進んで兵を動す時、其軍立をも勘へず、味方懸り向ふ時は、必ず敵の爲に計らるゝものにて候ぞと、大に制し諫めけれども、河上兵內禪師房清秀之を用ひず。軍勢八千餘騎を、用心の爲に城中に殘置き、我々五千餘騎にて打て出で、正成を打散らして捨て候はんといへば、時光之に同じ、河上兵內·芳野禪師房·長崎七郎をぞ差向けゝる。時光も、夜明けなば城を拂つて打出でんと、堅固に守つて控へたり。豫て正成の附置かれたる忍びの者共、打出る敵に連れて逃げ歸り、右の次第を告げければ、正成聞き給ひ、然らば和田は合戰をすべからず。味方の野伏を敵に追はせよ。松明の逃げ散るを見て、城兵悉く打出づべし。其時合戰を始むべしと、軍使を正遠の陣に遣さる。軍使未だ馳着かざるに、早正遠の勢起立ち、敵兵と相戰ふ。正成之を見給ひ、今は方便相違せり。城兵等殘らず討つて出でなば、忽ち正遠討たるべし。重ねて敵を落さんに、何條事のあるべきぞ。此陣より闕を發すべしと下知せらるれば、三千餘騎の軍勢共、一同に喚と

闕を作る。城中には之に驚き、上を下へと騷動す。正成態と城をば攻めず、筋違に押出し、野伏共が備へし傍に陣し、又正遠の陣に使を馳せ、相圖既に相違せり。必ず長追をすべからず。夜明けざる以前、我陣に來るべしと下知し給ひ、佐田の宮を、後に當てゝ備へらるれば、夜はほの〴〵と明けにけり。正遠は少々敵を追討にして、頓て追捨て、正成の陣前に馳せ來る。城中には、敵より寄れと、勢を配つて待居たりしが、東雲明行くに見れば、敵兵は一人もなし。合戰には負けぬ。又正成といふ古狐に化されけりと悔え怒れり。恩地、正成の前に來り、本陣より闕を揚げ給はずんば、城兵悉く打出で候はん。然らば正遠は討たれ給ひなんと存候といふ。正成聞き給ひ、吾陣に闕を發せしは、敵を出すまじきが爲なり。此城に向つて長陣せば、諸國の敵蜂起するとか、又飯盛は堅城なるとかいはゞ、正遠を見捨てゝも、城を攻落すべけれども、落すに容易すかるべければ、和田討たせてはと思ひ、城兵等に怖れさせんが爲、闕の聲を揚げしなり。其時一同に城中に攻入らば、城は落すべかりつれども、城中にも武功の者共多ければ、味方多く討たれんと思ひ、扨止めしなりとぞ

語られけり。

矢尾顯幸攻二飯盛城一井高畠才五詐返忠の事

斯くて正成は、如何にもして敵を方便り出さんと、色々に術を巡らされしかども、以前に懲りて、敵は曾て出合はず。味方小勢なれば、城を攻むることも叶ひ難し。是に依つて飯盛山の麓の川より、向ふに六十間が程逆茂木を引き、輕卒百三十人を出し置き、敵兵急に寄せ來らば、逆茂木の陰に叉河中に蒺藜をまきて、引退けよと約せられしかども、敵敢て出合はず。然る所に矢尾別當顯幸、正成の前に來り、奇妙の忍びを以て敵の様を窺ひ知り、一術なされ候へかしとて、己が手の忍びの者五人、正成の手の忍びの者五人を、敵城に差遣さる。城兵等之を見付け、彼者共を八人迄生捕り、耳鼻を殺ぎ、髪を剃落してぞ追返しける。其上却つて城中より忍びを出し、矢尾が陣に火を放つて切し、逆茂木の陰なる足輕共を、廿七人討取りけり。顯幸大に怒り、此小城一つを攻落さゞることこそ遺恨に候へ。諸勢を以て、一息攻に攻めて

御覽候へといふ。正成聞き給ひ、別當の詞、餘りに荒氣に覺ゆるなり。某一謀を以て、廿日が中には、城を攻取りなんものをと宣へば、顯幸いや〳〵餘りに敵をふかみさせ給ふな。別當あて〳〵見候はんとて、頓て飯盛に押出づる。槇野庄司・岩田源次郎等、枝城より打て出で、散々に戰ひければ、矢尾が勢多く討たれて、戰ひ難儀なりける所に、正成士卒を從へ押寄せ給ひ、早く引取れよとて、入れ替つて敵を請取り、少々合戰して、敵を追返してぞ引取られける。其後正成顯幸を招き、敵將時光が始終の合戰の體を見るに、是れ良將にして、其働き、節に當り度に當れり。惜い哉正成の爲に頭を梟されんことを。我れ敵を謀らんこと、廿日を出づべからずとて、高畠才五に謀を委しくいひ含めらる。是に依つて才五城中に內通し、正成に恨みあれば、返忠仕らんといひ送りしかども、始の程は誠にもせざりけるが、寄手より様々の術をする事共、彼が方より日々に告げ知らする如くなれば、時光も、扨は詐ならずと悦び、諸士を集めて軍議しけるは、今既に城中兵糧盡きぬれば、遂に籠城叶ふべからず。幸哉高畠と心を合せ、味方の勢を忍ばせ置き、未明に城より切つて出で、敵

を遠く追拂はんは如何にといへば、皆此議尤に候と同じ、湯本・湯上に二百人の士卒を相添へ、高畠が陣へぞ忍ばせ入れにける。才五此由を大将に告げければ、正成大に悦び、早瀬吉太・牲川三郎・守屋平太に一千七百餘騎を相添へ、飯盛の山下に伏せ置き、高畠が陣へは、日田左京亮に、五百餘騎を相添へ差遣さる。日田才五が陣所に行向ひ、汝敵に内通するの由、慥に告知らする者あり。其故に城より却つて押寄すると見えたり。有のまゝに白狀せよといふ。高畠聞いて、某今何の恨あつて、敵に返忠仕らん。是皆讒者の申す所にて候と、様々と陳じければ、正成扨は心安し。軍には勝ちたるぞとて、敵兵に向はるゝ。城將左衞門尉時光は、五千餘騎にて城に殘り留り、槇野次郎・岩田源次郎・芳野禪師房以下八千餘騎を出しければ、此勢、寄手と追つ返しつ相戰ふ。既に合戰半の所、豫て城中に相圖せしことなれば、才五、己が陣に火を放つ。湯本・湯上が二百餘人の者共、一同に鬨を作り、切り廻らんとする所に、正成の本陣に殘し置かれたる軍勢共、高畠が役所をひた〳〵と取圍む。高畠が郎等共之を見て、こは何事ぞや。累代の君に背き、朝敵に與し給ふべき事やある。

才五殿は一代、御家は末代なればとて、高畠を檎にして、正成の勢に加はつて、二百餘の敵兵を、追詰め〳〵討取りける。斯くとも知らず槇野・岩田等、相圖の煙を見て氣に乘り、勇んで相戰ふ。時に正成士卒に下知し、鏃を揃へて散々に射させられければ、城兵等辟易して見ゆる所に、麓に伏せたる早瀬・牲川千七百餘騎、同音に鬨を咄と作り、面も振らず打つて懸る。槇野・岩田以下、前後の敵に切立てられ、右往左往に敗北す。岩田源次郎も、痛手三ヶ所負ひて、心ならず自害せり。芳野禪師房淸秀も、既に討たれぬべく見えける所に、同宿の全秀・存秀等、防ぎ留つて討死する間に、漸々と逃延びて、辛き命を助かりけり。時光は城に殘つてありけるが、士卒下知して固く守り、靜まり返つて居たりければ、正成士卒を制し、城をば必ず攻むべからず。軍は是迄ぞとて、勢を引取り給ひけり。是等皆高畠と、心を合せての謀なりと雖、諸人に之を知らせては、後度の謀なし難きものぞとて、近臣等にも深く隱し、態と高畠を千劔破に歸し、蟄居せさせて置かれければ、諸人誠の謀叛人ぞと思ひしに、飯盛落城の後召出し、增秩を宛行はれければ、扨は又謀にてありけりと、皆人々感稱しぬ。

飯盛落城の事

斯くて日數を經ると雖、時光良將なれば、敢て寄手の謀に乘せられず。固く守つて居たりければ、正成も、種々謀を巡らされける所に、或夜風烈しきに、志貴右衛門が陣より、失火燃出で、焔天を焦せしかども、豫ての法令正しければ、志貴が一手の勢は、火を消さんと騒動す。其餘の陣々は、靜まり返つて大將の下知を待つ。然る所に正成諸陣に觸れて、勢を押出し給へば、士卒等も、扨は大將の謀にやと思ひけり。飯盛の城中には、又楠が如何なる謀をかなしぬらん。愈用心せよといふ所に、巽より風烈しく吹きて、正成の本陣に火燃え付く。大將少しも驚かず、士卒の騒がざるこそ神妙なれ。雜具に心付くべからず。其料をば與へんずるぞと下知し、火を防がせんが爲に、士卒一隊を分け遣さる。城兵等も、今は大將の陣に火かゝりぬる上は、謀にはあらず。此弊に乘つて切散らせと、我先にと打出づる。槇野庄司、思慮ある者なりければ、大に制し止めけり。時光も是を可なりとして、樣々と制すれども、士

正成、飯盛城を陷る

卒等耳にも聞入れず、後れじと出でければ、大將時光も、洪水を手にて防ぐが如く、如何ともすべき術なく、猶も制し留めんと、打連れてぞ出でたりける。槇野大に怒り、こは何事ぞや。大將を討たせては叶ふまじとて、同じく續き出でければ、一萬三千餘騎の軍勢共、悉く城を拂つて出でにけり。案に相違して、正成の先陣恩地左近太郎滿一、陣を二つに分けて、一同に嘲いて懸る。時に正成の本陣より、太皷を打出す。是に氣を得て恩地が勢、太山も崩れよと、無二無三に切立つれば、城兵等途を失ひ、一同に喘と逃行くを、恩地・先の一軍を以て追はしめ、己は二陣にあつて、本陣に軍使を馳せ、城を攻取り候はんといへば、正成尤なりとて、舍弟正氏・和田正遠が備を亂し、進んで、逃ぐる敵を追はしめらる。滿一は、逞兵四百五十騎を前後に進ませ、逃ぐる敵をば餘所に見捨て、城の追手へ攻登り、士卒等必ず高名せんとて、外城にて敵を討つべからず。能き敵は城中にこそあなれ。早く切入れよと下知すれば、士卒等、我劣らじと城中に込入るを、頓て火をかけ燒上ぐる。正成は城に足をためず、右の方なる山の尾崎に陣せらる。北條左衛門時光・槇野庄司・禪師房清秀以下、

討取る首級四百餘級とぞ聞えし。猶も餘黨等を尋ね捜さんが爲に、舍弟正氏・和田正遠・恩地滿一等を飯盛に殘し置き、翌日上洛し給ひけり。

小車妻新三郎死罪幷護良親王配流の事

此の時陣中に於て、和田正遠の舍弟小車妻新三郎を、死罪に行はれしことあり。其故を尋ぬるに、此新三郎は、常に美女を愛し酒を好みけるが、正成と一族たるを以て、其權に誇り、此陣中に、攝州尼崎より遊女を招き、三日まで酒宴し戯れけるを、正成傳へ聞き大に歎き、和泉守正遠の陣へ使を遣し、此事知り給ひたりや。足下の舍弟など、斯く奢侈の行跡あるは、是只正成が武運傾きたる徴なり。譬ひ正成が子なりとも、陣中の制法を破りなば、何ぞ罪過遁るべき。如何思はれ候ぞといひ送られければ、正遠大に驚き、大將の本陣に來り、正遠が努々存せざる所に候。法に任せて、罪過に御行ひ下さるべしと申されれば、正成神妙なりとて、小車妻が所領を沒收せられけり。正遠涙を一目に浮め、某慥に御一門の數に連なりながら、斯る存外の行跡恥入りて候なり。國の爲に、新しきを存じ候はんやとて、正成に申受け、死罪に行はれければ、上下の諸士大に恐れて、敢て制法を犯すことなかりけり。さる程に立烏帽子の敵は、河野の一族に攻破られ、規矩・絲田等は、小貳大友に打滅され、東西悉く靜謐に及びければ、國々の諸士、我も〳〵と都に馳上つて、洛中に充滿す。先づ宗徒の諸將に、恩賞を行はるべしとて、足利治部大輔高氏に、武藏・常陸・下總を宛行はる。舍弟左馬頭直義に遠江、新田左馬助義貞に上野・播磨、嫡子義顯に越後、兵庫助義助に駿河國、判官正成に攝津・河內、名和長年に因幡・伯耆を恩賞ある。中にも赤松圓心は、さばかり大功を遂げたりしに、佐用の一所を賜はり、播州の守護職を、却て召放たれしかば、赤松大に君を恨み奉り、後終に足利にぞ屬しける。此時足利高氏兄弟、大塔宮の繼母准后に多くの賄賂を送り、宮及び義貞以下を讒せらるゝこと頻なり。宮此事を聞召し、足利を誅伐し給はんと、內々御企ありける所に、宮御隱謀の由、高氏讒し奉らる。是に依つて鎌倉に流罪あり。其後遂に直義の爲に、害せられ給ひけるこそ薄情けれ。

藤房卿與二正成一閑談附遁世の事

茲に萬里小路中納言藤房卿は、賢才の譽ありければ、事に觸れて君を諫め奉り給ひたれども、一つとして用ひさせ給ふことなし。然るに主上、出雲より差上げたる龍馬を愛せさせ給ふことを、藤房卿大に諫奏し給ひけれども、君御許容坐さねば、今は是迄と思ひ定め給ひける。同じき九月十三日の夜、河内判官正成を招き給ひ、木の間の月も晴渡り、いつよりは事變りて、又面白く覺えし故、和殿を請せしなりとて、互に歌など詠じて興せられけるが、其後藤房卿宣ひけるは、此度大塔宮を流罪に行はせ給ふこと、兵革再び起るべき其端と存ずるなり。其故は、天下の事大小となく、淮后の計らひなれば、高氏又淮后を誑かして、遂には天下を奪はんと相企めり。義貞も君を恨み奉れば、渠先づ朝敵とやならんずらん。今見給へ。近き中に亂賊出來りぬと覺ゆるぞ。吾之を思が故に、心中熱湯にて手を洗ふが如し。藤房苟も臣たるの道を盡し、屢諫奏し奉ると雖、叡智拙うして之を容れさせ給はず。然れば新

田か足利か、何れか天下を奪ふべし。此上は如かじ、出家せんにはと存ずるなり。和殿は弓箭の家に生れ給ひぬれば、君の爲に討死し給へ。扨もなり果てたる世の中ぞとて、涙をはら〳〵と落しけるを、直衣にて押拭はせ給ひければ、正成も涙に咽び、斯く迄公家一統の御世となしつるものを。逆臣の爲に奪れさせ給はんこそ、口惜しく候へ。正成に於ては、粉骨を盡し忠戰を勵まして後、討死仕るべく候。此上ながらも、今暫く朝に仕へさせ給ひ、猶も諫奏なされ、世の成行く樣をも御覽候へ。正成斯くて候はん程は、容易く天下は奪はれまじく候と申さるれば、藤房卿、さればとよ、和殿の宣ふことを、諸卿用ひ給ふまじければ、如何に思ひ給ふとも甲斐あるまじ。其上朝臣たれば、諸國の士も從ふまじ。今とても朝敵となり給ひなば、天下の士は、風に草の靡くが如くにてぞ候らん。和殿は良將たればなりと宣へば、正成承り、此上は、某も早く討死仕らばやと、存じ定め候なり。月も西に傾きぬ。夜も更け候ひなんとてぞ出でられける。同じき九月廿一日には、石清水に行幸（太平記に、建武二年三月十一日と書けるは誤なり）あり。藤房卿も、時の大理なりける上、此度を名殘の供奉と思ひければ、

藤房卿の遁世

一際聲花（はなやか）に引繕ひ、君の供奉をぞし給ひける。其後同じき十月五日、遂に忍び出で給ひ、北岩倉に至り、出家遁世の身となり給ふ。御年卅九歳なり。君大に驚かせ給ひ、急ぎ召返して、政道輔佐の臣となすべしと、宣房卿藤房父に仰下されければ、岩倉へ人を遣して、其旨をいひ送り給ふ。藤房卿聞き給ひ、

何事の羨しさに歸るべき世にありとても厭ひこそせめ

と返事して返し給ひければ、父の卿、急ぎ岩倉へ尋ね行き給ひけるに、住み給ひける庵室の障子に、一首の歌を書殘して、早何國ともなく失せ給ひぬれば、父の卿も、悲歎の涙に暮れながら、すご〳〵と歸り給へば、君にも頻に御後悔坐しけり。藤房遁世の後は、何國に居給ふとも、知りたる者もなかりけるに、新田義貞北國に下向の後、義貞の家人畑六郎左衞門尉時能、越前國鷹巢山に城郭を構へ居たりけるが、猶も案内を見置んが爲、奥深く分入りけるに、谷川の清く漲りたる流あり。其水上を尋ね見んと、靜に川上に至りけるに、差出でたる岩をかたどりて、松の葉にて葺きたる家の、見るも物憂き庵あり。賢くも斯る所に住みなせる人のありけりと思ひければ、差覗きて見けるに、年の頃四十餘りにして、色青ざめ、癯疲れたる法師の、落葉を集めて席とし、平かなる石の上に、法華經を置きたる計にて、外には一物も貯へたるなし。主の僧は、榛を手に携へ、外より歸り來り、谷川の水を結びて庵の内に入り、經の紐を解かれけるを、さしも荒き武士なれども、いと殊勝に覺えければ、つと入りて、如何なる人の、世を背かせ給へるにやと問ふ。彼僧、いと物靜にもてなして、足下には、如何なる人にやと宣ふ。さん候某は、新田左中將義貞の郎等、畑六郎左衞門尉時能と申す者にて候が、先年新田殿に從ひ、北國に下向仕り、當時は此鷹巢に楯籠り罷在候といへば、扨は猛き人々にこそ。愚僧は吾妻の者にてと計り宣ひて、經を讀み給ひしを、能々見れば、古見（いにしへ）參らせし藤房卿の面差に、扨も似給ひつるものかなと思ひ、急ぎ歸つて脇屋刑部卿義助（義貞の弟）に語る。義助大に驚き、戀しく思はれければ、一條少將を伴ひ、彼處に至り給ひけるに、早僧は見え給はず、經を載せて置かれつると覺しき石に、

爰も又浮世の人の問ひくれば空行く雲に宿求めてん

と、一首の歌を書付け給へり。一條少將、筆蹟を能く見知り給ひ、紛るべきもなき藤房卿にて坐しけりとて、近邊の山々を尋ねられしかども、巡り合はずして歸られけり。此藤房卿は、遁世し給ひしより、侃山子と號し、風雲を樂み、住所を定めず居給ひけるが、爰も亦住むべき所にあらずとて、何國ともなく失せ給ひけるが、其後土佐國へと志して、都の方へ上り給ひ、懷しさのまゝに芳野に至り、古の雲井の交も忘れ難く、洞院大納言實世卿の方へ、御文を送り給ふ。實世卿披き見給ふに、

君が住む宿のあたりをきて見れば昔に濡らす墨染の袖

使は民家の童部なりければ、召寄せて問ひ給ふに、今日早朝に、西の方の野邊に出でて草を刈り候へば、癩せたる法師の、此文を届けよと仰せ候ひしと申す。實世卿驚き給ひ、急ぎ參內して奏聞し、大和・河內・紀伊にある所の關々へ仰せ、修業者を留め給ひけれども、其と覺しき僧もなかりけり。侃山子藤房入道は、其よりも船にて土佐國へ越し給ひけるが、如何なる前世の宿業にかよりけん、惡風に侵されて、海底の藻屑となり給ひけるこそ哀なれ。

斯樣に風說させて、藤房は名を變へて、京都妙心寺の住職となられたる記錄あり。能々併せ稽ふべきなり。

伊賀倉俊貞註記

新田義貞隱謀計略の事

爰に前亡相模入道の餘類等、東國・北國に起りければ、建武二年の秋、足利尊氏卿を關東に差下させ給ふ。足利殿東國に下向して、平氏の逆徒等を、悉く攻滅し給ひしかば、關東の諸士歸服して、威勢強大になり給ひけり。然るに兩雄は、必ず爭ふ習なれば、新田義貞と尊氏、日頃不快にして、互に滅さんとぞ企まれける。是に依りて新田殿も、內々樣々と思慮を巡らさるる。舟田入道申しけるは、當時准后の御惡しみ深く候へば、君には遂に、朝敵とならせ給はずんば叶ふまじく候。然る上は、片時も早く思召立たれ候へかしといふ。義貞聞き給ひ、足利を滅さんことは、義貞が手裡にあり。然れども今朝家に、智臣勇臣多ければ、事大儀の計略なりと宣ひけるを、舟田聞きも敢へず、先立ちて某思慮を巡らし置候。赤松父子は、朝家を恨み奉れば、播

磨一國を與へて、味方に御招き候べし。名和伯耆守長年をば、入道請取りて誅し候はん。正成一人こそ、六かしき相手にて候へ。是は方便り賺し寄りて、力者に仰せて刺殺され候へかし。其餘は誰か一人、頭を差上ぐる者の候べき。其上にて主上を押籠め奉り、持明院殿を、御位に卽け給ひ候へかし。然らば足利兄弟は、東國にて誅せられ候ひなん。とく〳〵思召立たせ給ひ候へかしと勸めければ、義貞是に同じ、然らば楠を賺し寄せん方便に、我れ先づ正成が許に行き交を親しくせん。然らば正成、我方に來らざることあるまじ。栗生・篠塚・畑・亘理・池田・由良六人は、組手なるべしと定められ、或夜究竟の者共、只二十人召具せられ、忍びやかに正成の館に入り給ふ。樣々饗應あつて、夜更くる迄物語し給ひて、心置なき體に居給ひけるが、夜も更け候ひぬ。歸り候はんと宣へば、正成餘りに御供の小勢に覺え候。御用心あるべき時節なり。某が郎等共をして、送らせ候はんとて、逞兵三十人を呼出し、中門迄送り出でられければ、義貞大に悅び、忝き旨を謝し、手の郎等並に送の者を召連れて、宿所にぞ歸られける。恩地、正成の前に參り、今宵の新田殿の御入來こそ、心

得ず候と、忍びやかに聞ひければ、さればとよ、定めて深き慮あつての事なるべし。此人隱謀の企ありと見えたれば、正成を味方に招かんとの謀か、又招き寄せて、誅せんとの術なるべし。旁心許すべきにあらず。されば送りて出でざらんは無禮なり。夜陰に送り出でんには、用心の程の心元なければ、御供廻の少く覺え候。某が手の者共をして、送らせ候はんとて、若黨共を呼出し、此者共と打連れて、送り出でしなり。是れ義貞の爲にあらず、正成が身の用心なりと宣へば、恩地大に感心をぞしたりける。案の如く三日を過ぎて、義貞、正成の宿所に使者を遣して招かれけるに、仰にては候へど、當時世上も騷がしく候。正成に於ては、朝家に仕へ奉る身にて候へば、誰にても朝敵となり給ひつる人に、矢の一つをも射んずるにて候。御用のあらんには、仰越され候へ。承り候はんといひて、使をぞ返されける。新田大に驚き、正成の智は神の如し。早我が心中を知りたるにやと宣へば、舟田、爭かさる事の候べき。某參つて連れ來り候はんとて、正成の許に行き、對面して申しけるは、足利兄弟東國にあつて、逆心を企てらるゝ條疑なく候へば、其旨上聞に達して、義貞罷下る

べく候。さりながら又准后、例の讒口を以て、義貞を却て不忠の者と申なし給ふべければ、楠殿の御思慮をも、承り度由を申され候。義貞に於て、何の御心置か候べき。倡御出で候へといへば、正成、舟田が顔をつく〳〵と打詠め、心中を殘すべきにあらざれば申すに候。新田殿も此頃は、君を恨み給ふ氣色顯然たれば、左程に君の御爲を、思召すべしとも存せられず候。其上數度の功名を顯し給ひつれば、朝敵となるとも、天下の士靡き從はんとこそ、思召すべき人の、先日私宅に入り給ひ、何よりもしめやかに親しく御物語あり。今又正成を招き給ふこと、不審の其一なり。是れ大事にして、密事にあらざれば、御邊御出あつて、某に談せらるべきに、さはなくして招き給ふ。是れ二つ。又先日、新田殿の御入來ありし時、左樣の物語をも、端々し給ふべき所なるを、包み給ひし。是れ三つ。押して東國に御下向あらば、朝敵の名を得給はん。君へ奏聞し給はゞ、准后の讒口に懸り給ふべし。然れば何れとも分け難し。某とても、何とか思惟仕るべき。其程の御思慮あるまじき新田殿にも候はぬに、なるまじき事を談じ給ふにより、大に不審の端起れり。是四つ。先立つて荒々

しき御返事申しつれば、御憤もあるべき所に、さもなく候。是れ五つなり。新田殿に對して、私の宿意は候はねども、兩家の確執止まざらん程は、君を守護し奉り、正成も用心の爲、何方へも出でまじきと、存じ定め候と宣へば、さしもの舟田、胸塞りて覺えしかども、さあらぬ體にもてなし、義貞に對し、何の御用心か候べき。義貞が心中に於て、變ることは候はぬものをとて、苦笑ひしてぞ歸りける。其後正成、恩地をも招き、今は大亂近きにあり。朝敵となりなん人、天下をば奪ふべし。正成が謀を御用ひあらんには、左右なく天下をば奪はれじ。分國へ告知らせて、合戰の用意せよ。御邊の勢、又和田以下をも呼上すべし。某が郎從も、一千餘騎にて、五日が內に上洛せさすべしとて、恩地を河內へぞ下されける。

南朝太平記卷第八終

新田義貞隱謀計略の事